最後の忍者

—どろんろん—

藤田西湖

甲賀流忍者一代記

最後の忍者

どろんろん

甲賀流忍術十四世

藤田西湖

260円

どろんろん

最後の忍者

甲賀流忍術十四世
藤田西湖

日本週報社

著者近影

上　忍び衣装

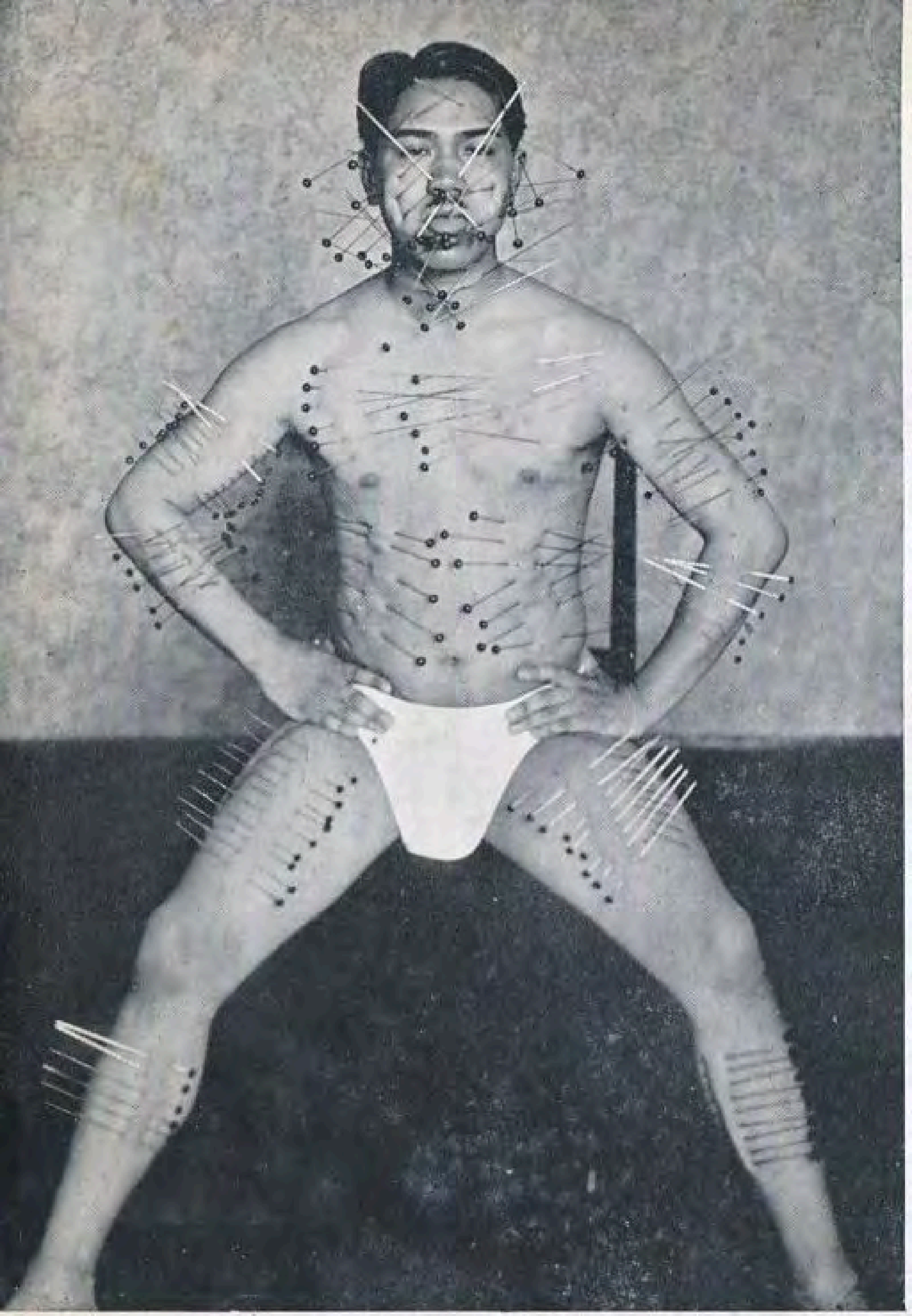
忍び頭布、伊賀袴、忍び刀で身を固めた忍者。忍者の刀はやや長めで、角鍔に滑り止めがある。
下げ緒は一丈二尺、サヤは光の反射を防ぐため黒くいぶしてある。
足袋はヒモ足袋で、歩くとき音がしないように底に綿が入つている。

右下　手鉤（てかぎ）

高所に上るとき、これで引つかけて上る。或いは戦闘用にも用いる。

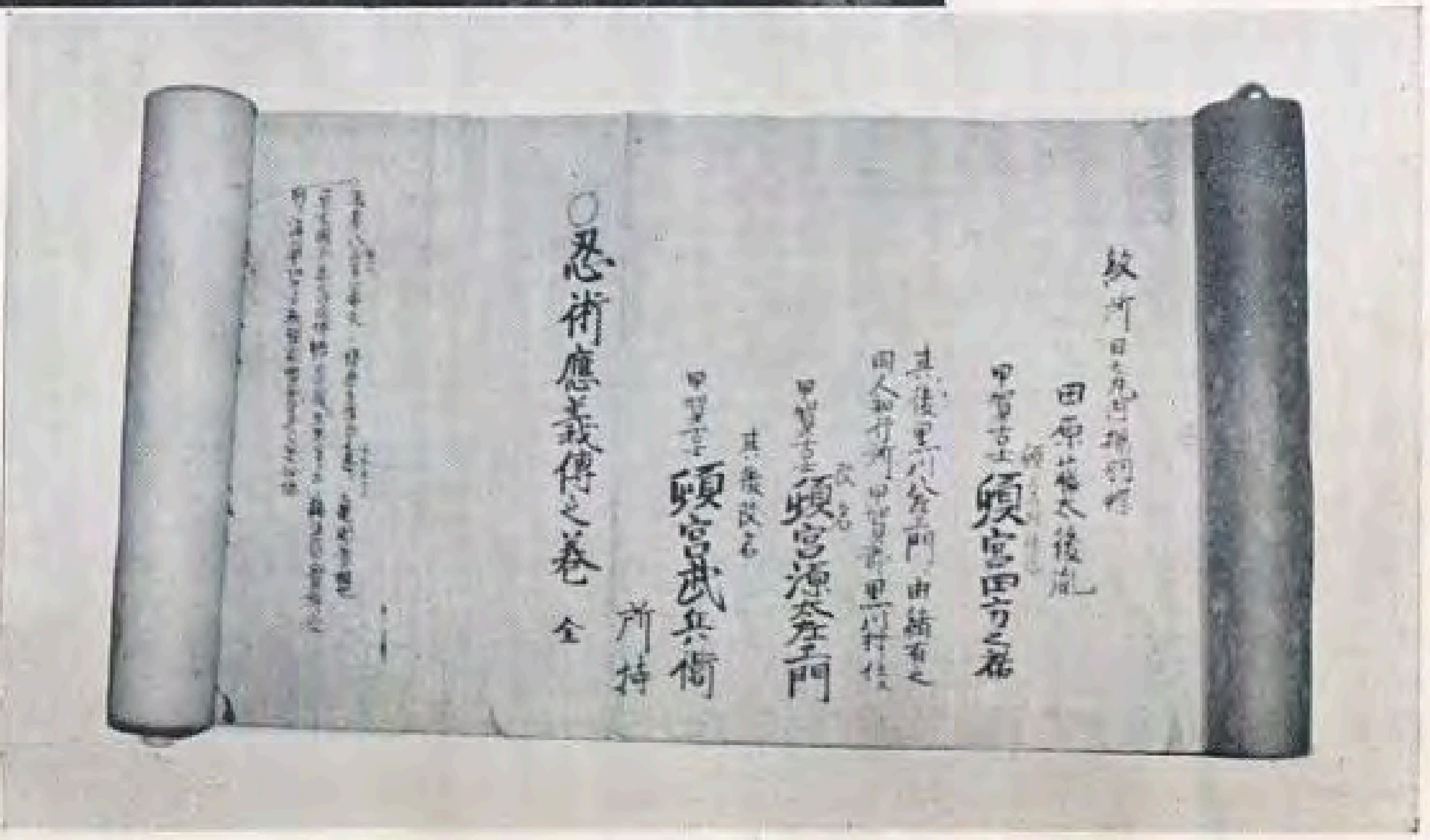
左下　水蜘蛛（みづぐも）

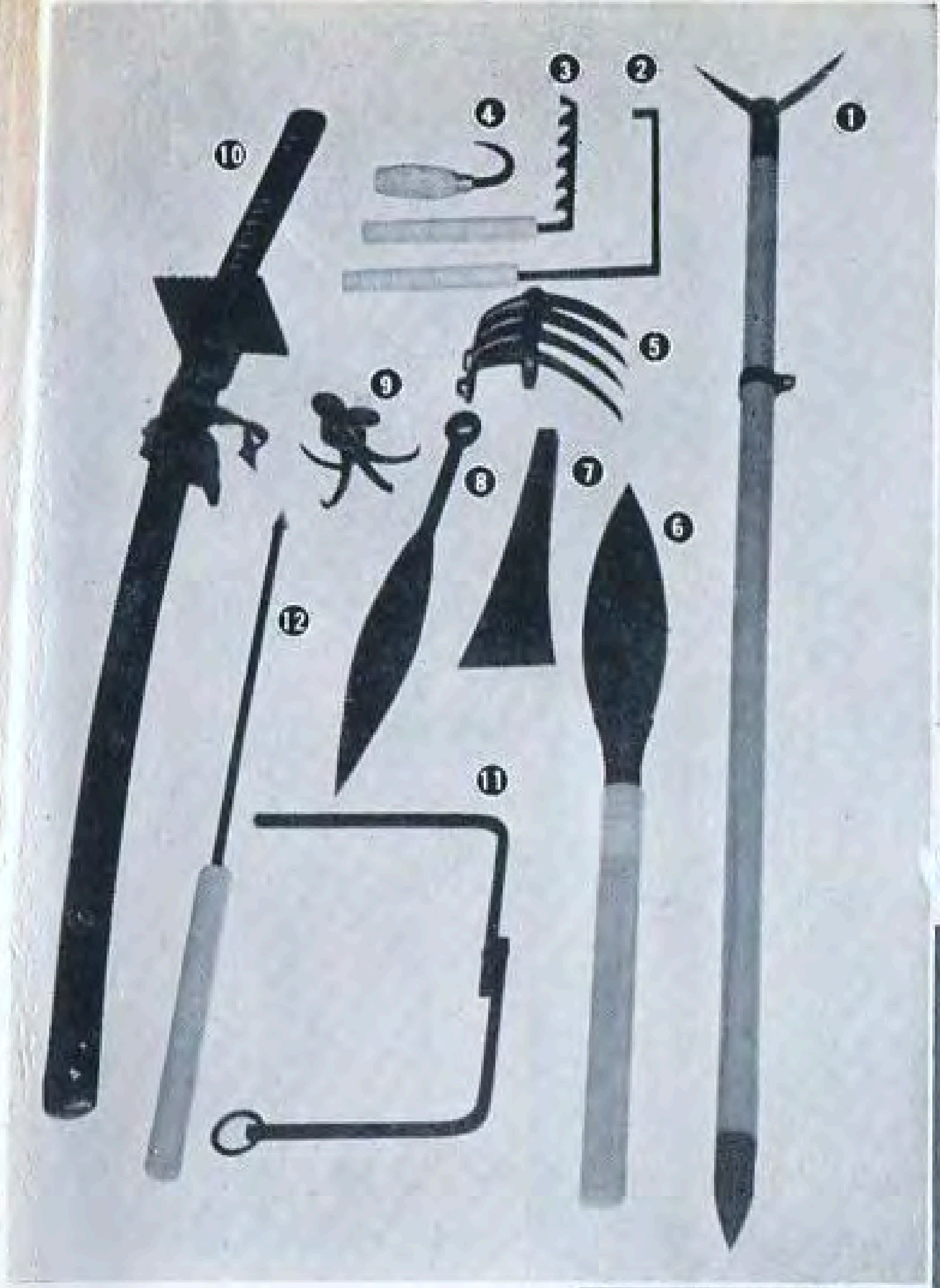
直径二尺八寸、内径一尺八寸の檜の合板で、真中に馬皮を紐で吊つてある。これを水面に浮べて乗り、重心の操作により水上を滑つて進む。持ち運びに便利なように四つに折り畳むことができる。



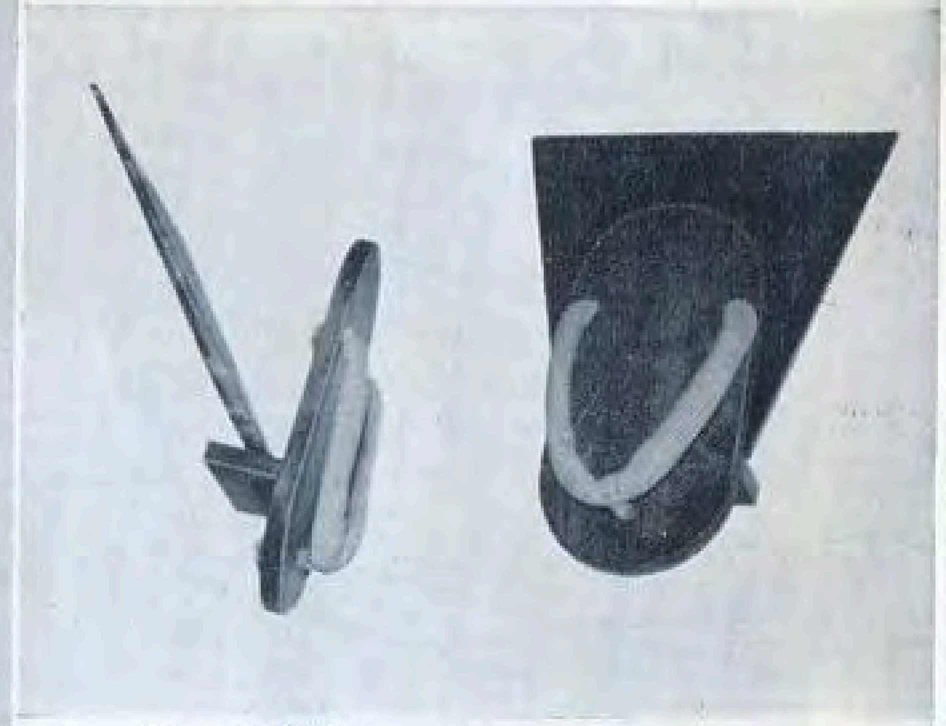
上　著者は「ヨガの行」の研究家としても第一人者である。これは、全身に五百本の畳針大の針を刺して世界記録を作つたとき。

下　忍術の心得や形態を記した「忍術応義伝」一巻。俗に忍術の巻物と呼ばれている。

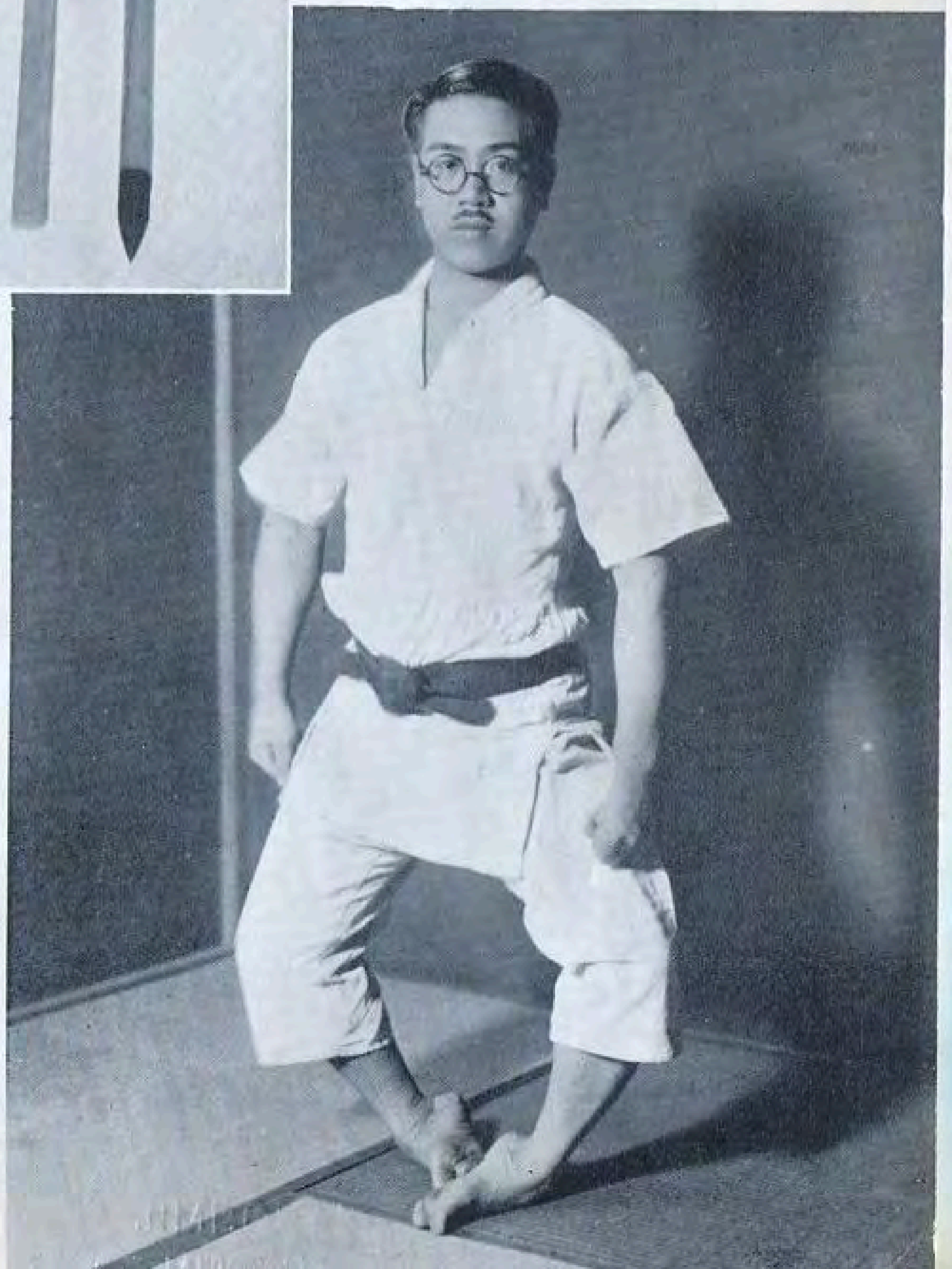




左上　忍者の道具の一部
①忍び杖②クロロ鍵③歯鍵④手鉤⑤手鉤⑥大ノコ⑦無双鉄⑧苦無（クナイ）⑨打ち鉤⑩忍び刀⑪延鍵（ノブカギ）⑫槍錐（ヤリギリ）



上　水かき
水中を泳ぐときにはく下駄。



右下　鍛錬
足の甲で歩き不具者を装う。

はしがき

忍術を表看板にして五十年、作家の某君は当代奇人伝を書くなら、私をその第一にあげるといつている。原子時代の今日、映画や小説でこそ人気もあるが、それを表看板にしてメシが食つていけるかと、お節介にも心配してくれる人もある。というのは、忍術を現代生活と全く遊離して、縁もゆかりもないものとの前提で考えているからだろう。

ところが戦時には戦時の、平和時には平和時の、忍術の利用面は、私にいわせれば無限といつていい。メシが食えるか食えぬかはともかく、今日まで、大は国家の御用に役立ち、小は私自身の物心両面に、かけがえのないプラスとなつてきたのは事実である。

私は幼少から甲賀流十四世を継ぐべき環境におかれ、常人とはいささか異なる人生のスタートをした。泰平の世に生まれながら、好んで山中にわけ入つて山伏修業をしたり、生き神様に祭り上げられたり、しばしば白刃の下も潜つたし、戦時となつては特命を帯びて、雨飛する弾丸のスリルも味わつた。

人は私の生き方を奇嬌（ききょう）というかもしれぬが、私は自分の信ずる一筋道に生きて、今日なおいささ

かの悔いもない。

忍術者の修業は一生を賭けたもので、これでひと区切りということはないが、来年は私も還暦である。すすめる人があつて五十年の回想をまとめたが、本書を通じて真の忍術の片鱗だけでも汲みとつていただければ幸いである。なお本書は、旧知、大平陽介氏が、私の記録と口述をもとにして書き改められたものである。氏に多大の労をわずらわしたことを付記し、感謝の意を表したい。

昭和三十三年九月

甲賀流忍術十四世

藤田西湖

目　次

はしがき……七

暴れんぼ街道……一五

家は代々徳川の隠密――先祖は和田伊賀守――六歳で十一人を斬る――寺の小僧に追放――エンマ堂の狼藉――山窩の復讐と母の度胸――三ツ峯山の大行者――山伏修業

忍術修業……四一

祖父から手ほどき――歩行術と跳躍術――学校の二階から跳ぶ――レンゲ山の喧嘩場――「竜紋の辰」との果し合い――コンニャク閻魔の地獄人形――三晩つづけて地獄に陥ちる――忍術の「忍」は忍耐の「忍」――血のにじむ体力鍛磨――動物を使う忍術

千里眼……七七
九字の護身法を身につける――「神通力」の体験――殺人犯の予言適中――心霊学博士の研究材料となる――インチキ透視術の末路――生霊の正体をみる

アウンバラマの妖術……九七
高利貸のアゴをはずす――恐るべき南蛮殺倒流――一人三役の兼業――〃生き神様〃西田香峯――妖術と忍術の闘い――天井裏からさぐる――インチキ妖術スッパぬき

喧嘩八段……一二四
ボスを叩く――キモをつぶした博徒の親分――自分の太股の肉喰う――真ッ赤な火が食べられるわけ――幽霊屋敷の探険

「生き神様」顚末記……一四四
「東京三変人」の二位――イカモノ喰い大会――院外団「国策断行会」設立――赤いハカマのエロ幽霊――虎の門事件と後藤新平邸ナグリ込み――神様商売繁昌記――三日やったらやめられぬ――「生き神様」逃げ出す

貫禄十分……一六七
世界一の怪力に勝つ――神様、関取に負ける――朝鮮人のナグリ込み――土佐の国粋会騒動――脳溢血と神経痛の治療に成功――香典を使い込む代議士――拳骨の連鎖反応

現代戦と忍術……一九四
満州事変の真相調査――「夕日と拳銃」の伊達順之助との再会――首に十万元の懸賞――馬上に悟る死生観――蔣介石暗殺の密命――土肥原将軍の反対意見――日本軍から宋美齢に贈ったダイヤ――中野スパイ学校の実態――担当はスパイ技術――大東亜戦争に役立った忍術の秘薬

縄抜けの術と敗戦……二三五
運命の大東亜戦争――「易」に出た日本の敗北――縄抜け術で前線激励――横芝部隊の反乱――やむにやまれぬ大和魂――青年将校たちの純情

武道追放と日本人の堕落……二五七
百万円の錠前会社――戦後の武術研究所

暴れんぼ街道

家は代々徳川の隠密

私の家は、代々、徳川将軍につかえた幕府の隠密であつた。

わが国の武将のなかで、いちばん忍術者を利用したのは家康で、家康はこれを隠密と呼んだ。徳川家が三百年の太平を保つたというのは、いつに隠密の力によるものであつたと云つてさしつかえない。それには、こういう話がある。

家康が織田信長の招きに応じて、天正十年（一五八二年）、泉州堺に至り飯盛山の陣地に宿していたとき、例の本能寺の変が起つた。これを茶屋四郎次郎が、早馬で家康のもとに知らせてきた。

家康は後年、タヌキ親爺といわれたけれど、その当時はまだ純情だつたとみえ、日ごろ恩顧をこうむる信長のために、敗るるまでも明智光秀と一戦を交えよう、もし、成らずんば自分は智恩院で腹を切るまでだと、わずかな手勢をひきいて本能寺に向おうとした。

しかし、この兵乱で野武士が蜂起し、ヘタをすれば途中、どんな目にあうかわからない。それを知つた本多忠勝が、このまま行つては危いから、一度、三河まで帰つてから後に兵を挙げても遅くはないと切に思いとどまるようにと諫めた。

家康もその意見をいれ、いつたん三河へ戻ることにしたが、その途中がどうも物騒である。そこで服部半蔵、柘植三之丞、穴山梅雪などの斡旋で、伊賀、甲賀、二百人の忍術者を招いた。そして途々を警固してもらつて、鹿伏兎峠を越え、伊勢の白子を通り、ようやく三河まで帰つてきた。これは徳川家康の三大難の一つといわれている。

そのときの縁故からして、のち天正十八年（一五九〇年）、江戸に居城をかまえるにおよび、家康は服部半蔵以下二百人の忍術者を呼び、邸をあたえ、禄を当てがつて、隠密役をつとめさせた。

いま新宿区の四谷に伊賀町というのがあるが、あれはその時に来た伊賀者をおいたので、この町名ができた。また甲賀者をおいたのが、千代田区神田の甲賀町である。それから麻布の笄町……これは下輩の忍者のいたところで、橋をへだてて甲賀者と伊賀者を住まわせ、その橋を甲賀伊賀橋、その町を甲賀伊賀町といつたのが、だんだんコウガイ橋、笄町という名前に変つたのである。

ついでながら、当時、その首領であつた服部半蔵が警固の役を仰せつかつていた麴町御門は、半蔵門と俗に呼ばれるようになつたが、これを観光バスなどの名所案内ガールが、とんでもない間違いを言つていたようだ。

「この半蔵門は、むかし将軍さまに象をごらんに入れようとして、ここまで連れてきましたが、こ

の門を半分しか入らなかつたので、それで半象門というようになりました」

これは話としては面白いが、実際は服部半蔵が守つていたので半蔵門というのである。

この服部半蔵、力は五十人力といわれ、いくさの時は五間柄の槍を持つて、縦横無尽にあばれまわつた。さながら鬼神のようで、「鬼半蔵」といわれたというが、これが麴町御門をずッと守り、あと二百人の忍者は、忍目付という役名をもらい、お庭番という形式で、将軍直属の密偵をつとめていた。この隠密の頭をして代々甲賀町に住んでいたのが、私の先祖である。

この隠密の組織が、徳川の一つの政治の方法であつた。例えば将軍が、毎日お庭を散歩する。その時、お庭番として入つている忍術者を呼んで、どこどこの藩のこういう点を探つて来いと命じる。するとお庭番はその場に箒をすてて、ただちに出発し、現地に潜入する。徳川の政治にはいろいろな無理もあつたが、とにかく三百年も幕府が続いたのは、この隠密網がいまの警察網のように、全国に張られて、絶えず正確な情報をつかんでいたからであろう。

先祖は和田伊賀守

さて、忍術というと、まず伊賀流、甲賀流といわれるが、これはもとからの流名ではなかつた。忍術の盛んになつた発祥の地というのは、滋賀県の甲賀、そして三重県の伊賀であるが、これらの土地はひじように険阻な山々にかこまれていて、その狭い、わずか千坪ほどのところに城廓をかまえ、一朝ことあれば風雲に乗じて、天下をも平定しようというほどの大望をいだき、たがいに情勢

を採り、軍備をととのえていた。したがつて伊賀、甲賀は、天然の地勢の上から、密偵潜行の術にたけた者の輩出する温床となつたのである。

そして長享元年（一四八七年）将軍足利義尚が佐々木高頼を攻めたとき、この軍に加わり、諸国諸大名の前で抜群の功をあらわしたのが伊賀者、甲賀者という名の出る始めで、伊賀、甲賀は忍びの術にたけていたというところから、甲賀流伊賀流が忍術の流名のもととなつた。

その後、戦乱は相ついで起り、忍術はますます時代の要求に添うようになつて、大いに長足の進歩をとげ、ほかに芥川流、根来流、扶桑流、忍甲流、甲陽流、紀州流など、およそ二十五流をかぞえるものが現われた。

しかし、すべての流派は、甲賀、伊賀の二大流派から分れたもので、同じ伊賀流といつても、これが後には四十九派に分れ、甲賀流は五十三家に分れた。

私は甲賀流五十三家の中、南山六家、または六大名の一といわれた和田伊賀守から、十四代を継承した者であるが、昔はこれほど盛んだつた忍術の道統も、今は、ほとんど絶えて私一人になつてしまつた。

剣術、柔術、槍術その他の古武道は、いまも乏しいながらもそれぞれ各自、流派の道統をかかげて、全国に散在しているのに、忍術にだけはその人なく、伝書すらが、ほとんど絶無といつてよいのはナゼであろうか。

もちろん、時代の変遷は大きな理由であろうけれども、忍術は、よほど克己心の強い者でなけれ

ば修業できない。またひじょうに危険な術であるから、師の心にかなつた正しい心の持主でなければ入門を許されない、というように、他の武術とは本質的に異なる制約のあることも、にわかに衰微した大きい理由であろう。

忍術は映画や時代小説で、今日でも大へんな人気だが、実際の忍術は、まさか印を結べばたちまちこの身が消えてなくなつたりはしない。しかし、忍者という者は、拇指と中指をのばして廻しただけの、つまり五寸（約一六・五センチ）か六寸（約一九・八センチ）の穴があれば、どこにも出入りできるのである。また、拳骨ひとつで普通の錠前くらい外すのは何でもないし、手提金庫くらいは拳骨ひとつで叩き割ることができる。入ろうと見当をつけた家なら、どんな厳重な戸締りがしてあつても入れるし、出ようと思うところへは、いくらでも自由に出られる。私の家にも鍵はかけてあるが、それは人のためにかけるので、私自身なら鍵はあつてもなくても、自由に出入りしている。

昔からの秘伝の中には、わずか拇指の先くらいの分量があれば、相手を眠らすことも、そのまま天国に送ることも、涙を出させることも、クサメを出させることも、自由自在にできる薬品の製法がある。つまり今のホスゲン、イペリット、催涙ガス、臭化ベンジルと同じような薬が、二、三百年も前に出来ていたのである。

暗殺のためには、ただ一滴の液体で、これを皮膚につけるだけのことで、二分の間に、相手の心臓の血液を結晶させる薬品もあつて、まことに恐るべきものであるから、これをつまらない者に教えてはひじょうに危険である。

ドロボウが利用すれば、石川五右衛門のようなものが、いくらでも出来上がるから、悪心を持つ者には教えられない。現今でもスパイの術というのは、すこぶる秘密にされているが、忍術は、さらにいっそう厳秘に付されていたもので、忍術者は、おのれが忍術者であるということをすら、外部の者には気づかれぬようにしていた。さらに一歩すすんで、

「あれが忍術者だ」

と、取沙汰する者があったら、これを殺してしまう方法をさえ、とっていたほどである。だから、たとえ自分の子供であっても、これが忍術者としての資格がないと見れば、ぜったい伝えない。したがって、もしも自分の継承者がないときは、伝書一切を火中に投じて後を絶ったものである。

忍術の伝書など現在きわめて少ないのは、このようにして焼きすてられたり、また、方法なども人に語ってはいけないと厳秘に付されてきたためで、それが忍術を神秘づける一方、その流布をも狭めていった。こうして今、忍術者というものは、私一人になってしまったが、私には後継者がないから、わが国の正しい忍術の道統は、私を最後として絶えるものとみなければならない。ここに最後の忍術者としての自伝を思い立ったのも、後世の研究家にとって、なにがしかの資料になれば幸いと思い、あえて恥をさらす決心をしたのである。

六歳で十一人を斬る

私の父は、藤田森之助といい、捕縄術は名人といわれただけに、警視庁巡査となり、刑事をつと

めて、抜群の働きをした。

明治四十五年に退職したが、それまでに有名な仕立屋銀次や出歯亀をつかまえたり、奥多摩から秩父の山地に巣喰っていた兇悪な山窩に手入れするなど、在職中に死刑囚八名、無期徒刑二十五人を捉えるというレコードの持主、「藤田刑事は鬼より怖い」と小唄の文句に唄われたほどの、一種の名物男であった。

この父は昭和十年七月十五日、六十四歳で亡くなったが、関東地区に於ける山窩を手がけたのは父が初めてで、その捜査や実態調査の資料は、死骸と共に埋めたが、いま考えると実に借しい気がする。

この父が浅草の六区につとめていた明治三十二年の八月に、私は次男として生まれた。父のつけてくれた名前は勇で、西湖は後に絵を学ぶようになってから、自分でつけた雅号である。

赤ん坊のときから極めて活動的で、母親はちっとも目が離せなかったようだ。二階の手摺から下をみるのが好きで、手摺から二度、下の通路に落ちている。普通なら死ぬか大怪我ものだが、不思議に何ともなかった。私は青少年の乱暴ざかりに、不死身といわれたもので、たいへんな怪我をしても、自分で傷口をなめるか塩でもつけて揉んでおけば、二、三日してケロリと治ってしまったものだが、このような一種の異状体質は、赤ん坊のころからあったものらしい。

「二度あることは三度ある」というし、三度目こそ用心しなければならないと、母は私が二階にいるとき、帯で体をくくりつけておいたところ、ちょっと油断している間に、また手摺から落ちた。

しかし、体をゆわえてあつたので、亀の子のように、宙吊りになつて寝ていたということだ。
当時、祖父はまだ健在で、名を新太左衛門といい、これが甲賀流の十三世である。祖父は私を、どこか見どころがあるとでも思つたのか、三つ四つのようやくものごころつく頃から、歩行術とか跳躍術といつた忍術の手ほどきを仕込んだ。
私には兄と姉があつた。兄は五つ年上で録吾といい、温良な性質で人々からかわいがられたが、私は兄よりもキカン坊で、四つ五つごろから近所の子供を泣かしたようだ。
五つになると、ハッキリした記憶がある。その年に父は青梅の駐在所へ転任を命ぜられたが、そこで私は、死ぬような大病をわずらつた。ジフテリヤで咽喉がふさがれ、息ができなくなつて、ついに脈もなくなつた。
医者も「お気の毒さまですが……」と診断し、父は棺桶の手配からお寺にまで廻つて葬式の準備をした。
その前の年に姉が死んでいるし、ここでまた、もう一人の子を失うことは、母として堪えきれない思いがしたのだろう。母は、父が葬式の用意で廻つているうち、死んだ私の口をあけて、綿を巻きつけた箸を咽喉に突込んだり、体をゆすぶつたり、必死になつて私を生きかえらそうと努力した。その一念が通じたものか、かすかに息をするようになり、いつたんあの世に行くところを、危く命びろいをした。一家の喜び、ことに母の喜びというものがどんなだつたかは、想像にあまりある。
このため、私は家内中からチヤホヤ大事にされるようになつたのだが、いまにして思えば、それが

そもそも私を一そう増長慢にし、わがままいつぱいの、手のつけられない悪童たらしめた原因のようである。
そのころ私は、祖父の好みで頭をアブハチトンボに結い、腰にはいつも小刀をたばさんでいた。切腹の仕方なども、手をとつて教えられた。武士の子らしく、とんだ逆コースで育てられたが、私も何となくそれが得意であつた。父も祖父のすることには、さからわずに放任していたようである。
私はますます強情になつて、疳癖がつよく、よく孫太郎虫の黒焼きなどを食わされた。まずくつて気味わるかつたが、祖父に「呑め」といわれると、仕方なしに呑んだものだ。私が後の忍術修業で、悪食が平気でやれたのは、そのせいらしい。
六歳の冬だつたと覚えている。兄が近くの隣町へ用足しに行つての帰り道、悪童連中に取りまかれてなぐられ、耳のしもやけをつぶされて血だらけになつてきたことがある。私はこれを見ると、怒り心頭に発した。
「よし、おれが仇討ちに行つてやる」
私は奥の間の柱にかけてあつた父のサーベルを引き抜くと、原つぱで遊んでいた七、八人の悪童連中のところへとびこんでいつた。みんな近所の悪くたれ坊主で、小学校の六年生から高等の、十四、五歳になる子供たちだつた。
狐色に霜枯れた草原の上で、彼らは竹棒をふりまわして戦さごつこをしていたが、私のピカピカ光るサーベルを見るとビックリ仰天し、悲鳴をあげながら、町の方へいつさんにかけ出していつた。

畠で麦を踏んでいた百姓たちも、おどろいてとんできたが、何といつても、耳をかすどころではない。

「待てーッ」

私は、どこまでも追いかけていつた。私はまだ小学校にも上がらぬ子供だが、足も、けつこう早かつた。町に入ると、道幅は一間くらいで、サーベルをふりまわしたら一杯になる。彼らは逆もどりができないから、みんな、まつさおになつて悲鳴をあげた。

「助けてくれーッ」

「ひとごろしーッ」

という騒ぎだ。

たちまち町じゆう総出の騒動になつて、テンビン棒、六尺棒、なかには物干竿など持ち出して、私をとりおさえようとかかつてきた。

それが、私にはみんな敵に見えた。(向うが悪いくせに、自分ひとりに町じゆうの大人がかかつてくるとは何ごとだ!)と、私はますますイキリ立ち、死物狂いであばれまわつた。

が、しかし、なんといつても数え六歳の子供のこと、だんだんにサーベルが重くなつて、とうとうテンビン棒で叩きおとされ、つかまえられてしまつた。そして浅手だが、十一人に傷を負わせてしまつたのである。

寺の小僧に追放

この事件は町の大問題になつたが、暴漢は駐在所の旦那の坊つちやんで、当年六歳とあつては表沙汰にもならなかつたとみえ、牢屋に入れられるようなことはなかつたが、父からは火の出るほど叱られた。

そして、世間さまへのお詫びにというのだろう、トンボ頭はクリクリ坊主にされ、小刀は取り上げられて、五日市のお寺へ小坊主に預けられた。それから間もなく、父が青梅から五日市に転勤になつたのは、栄転か左遷か知らぬが、私の刃傷事件に関連があつたのではないかと、ひそかに思うのである。

寺は大慈寺といつた。

子供ごころの印象では、大きな古めかしい寺で、住職以下十人くらいの坊さんがいたようである。ワラぶきの山門をくぐると、本堂に行く手前にエンマ堂があつた。

「勇、よく見ておけよ」

父は、そのキツネ格子の前に私を連れていつた。

「ウソを言つたり、わるいことをすると、この、おエンマ様にベロを抜かれ、地獄の血の池や針の山に追いやられるんだぞ」

格子のすき間からのぞいてみると、見上げるほどの大きなエンマ像が、目玉をむいていまにも喰

い付きそうな怖い顔をしている。極彩色の塗りも剝げて、ホコリだらけなのも、かえつて陰惨な感じをそそつている。

その横には、三途の川で亡者の衣類を剝ぐという、ショーツカ婆と称する痩せさらばえた不気味な老婆が、センタク板のような骨だらけの胸をはだけて、立つていた。

淡い冬の陽もとどかぬカビくさいエンマ堂の中に、二つの像は、まるであの世から、そのまま浮かび上がつてきたようで、きかん気の私も、さすがにゾーッとしてしまつた。

私は庫裏につれていかれ、痩せて小さい老住職の前に坐らされた。黒ずんだ坊主頭の所どころに白い斑点があつて、額のシワが深く、歯のない口をパクパクさせて話すのを見ていると、干蛸を思い出した。

何とか法名をもらつたが、忘れてしまつた。先輩の兄弟子連中は「シンポチ、シンポチ」と私を呼んだ。新発智という字を当てるのか、新参とか新米という意味らしかつた。

味噌摺り坊主ということがあるが、朝は暗いうちから起こされて味噌を摺るのが、新入り弟子の慣わしのようである。

私は六つだから、味噌は摺れない。摺り鉢を押えているだけだが、寒中、手先きは凍りつきそうで、なかなかつらい。それがすむと庭掃き、つぎに朝の勤行がはじまる。

私は「解経文」というお経の読み方を教えられた。それからやつと朝飯になる。葬式があると茶を運んだり、下駄をそろえたり、壇家とのあいだの使い走りやらで、なかなかいそがしい。

兄弟子たちは「シンポチ、シンポチ」と、おもしろ半分にコキ使う。十日もすると私はつくづくいやになつて、何度も逃げて帰ろうかと思つた。しかし、父の恐ろしい顔を思い浮かべるとそれもできず、一、二カ月の間は、どうにかこうにか神妙につとめていた。

そのうちに、だんだん生活に馴れてくると、そろそろ地金が出てきて、悪童ぶりを発揮してきた。近所の腕白小僧をあつめてきては餓鬼大将になつて、墓場のなかでいくさごつこをする。そして、卒塔婆を引きぬいたり、墓石をひつくりかえしたりするものだから、しばしば住職にお目玉をくつた。

「エンマ堂に入れてしまうぞ」

というのが最後の切り札で、これには私も降参し、泣きながらあやまつて、やつと許してもらうのだつた。

ところが性懲りもなくわるさをつづけ、ある日のこと、どうしても許してもらえないような事件をおこし、とうとうエンマ堂に入れられてしまつた。

エンマ堂の狼籍

それは、寺でもいちばん大切な壇家の法事があつたときである。本殿の読経がすんだころ、十歳くらいの男の子が出てきて、庭を掃いていた私に、

「おい小僧、下駄をとつてくれ」

と、横柄にいいつけた。
下駄は、入口の階段から少し離れたところに脱ぎすててあつた。
「これか」
「そうだ」
「よし」
私は箒の先にひつかけて、わざと遠くの方へ放り出した。
「やい、生意気な小僧だ」
それは壇家のひとり息子で、いつも寺に来ると威張つていたやつだが、はだしで駆けおりてくると、いきなり私をなぐりつけてきた。ところが年こそ小さいが、喧嘩なら負けていない。あべこべに突きたおして、箒でさんざんに殴りつけてしまつた。
兄弟子たちが、悲鳴をきいて駆けつけてきた。相手が大事な子供なものだから大騒ぎになり、住職も出てきて、五、六人の兄弟子たちに、私は手どり足どりウムを言わさず、とうとうエンマ堂に押しこめられてしまつた。
私は戸を叩き、地団駄をふんで、大声に泣きわめいた。それは怖いのと口惜しいのと、両方の気持だつた。住職たちは、そんなことにおかまいなく、ガチャンと裏戸の鍵をおろして行つてしまつた。
一人になると、後ろからいまにも大きい手がのびて、襟首をつかまれそうな恐怖におそわれ、よ

けい大声に泣いた。
が、もちろん誰も来てくれない。
一時間あまりも泣きに泣いて、泣き疲れると、あきらめもできて、いくぶん気持も落付いてきた。耳をすますと、もう法事は終つて客は帰つたらしく、シンとしている。私はなんど、エンマ様の顔を見上げたかしれない。
しかし、なんども見ているうちに、エンマ様の目の玉は、一方を睨んだきり、動かないことに気がついた。
埃だらけの台を怖る怖る叩いてみたが、エンマ様はビクともしない。こんどはふんばつている片方の足を撫でてみた。やはり動かない。いくらか勇気づいて、こんどは拳骨で尻を叩いてみた。なんのこともない。
（ナアーンだ！）
私はいよいよ大胆になつて、エンマ様の持つている笏を抜きとつて放り出した。となりのショーツカの婆は、いちだん低いところにあつて、これも動かないことがわかると、私は尿意を催してきたものだから、エンマの台に登つて、この婆の頭の上に小便をひつかけた。
「あッ」
という声が、キツネ格子の方でしたので、見ると、抜き足で偵察に来ていた兄弟子の坊主だつた。私の狼籍ぶりをみて仰天したらしく、バタバタ足音を鳴らして本堂の方へ駆けていつた。

まもなく住職を先頭に、大小の坊主あたまを振りたてて、全員が駆けつけてきた。私は逃げ場がないので、エンマの肩の上によじ登り、冠りをつかんで肩車に乗つかつた。

「こらッ、この罰あたり！　そんなところへ登りくさつて、はよ降りて来い！」

住職は、歯のない口をパクパクさせながらどなるのだつたが、私はエンマの頭にしがみついて離れない。二、三人が堂の中に入つてきた。一人が引きずりおろそうとして、手をのばしてきたが、私はエンマの頭の上で暴れて、なかなか足をつかませなかつた。

つかんでいた冠りの端が、バリッと音を立てて私の手に残つた。私は、それを振りまわしたり、ツバを吐きかけたりして、兄弟子たちを撃退した。

「これこれ、おエンマ様がこわれてしまう。えらいこつた。こら、降りて来い！」

住職は、小さな拳をふりまわしてわめきたてる。私はいよいよ図に乗つて、エンマの冠りを揺すぶつた。

「これ、やめてくれといつたら、はよ降りて来い！」

「降りたら、いじめるからイヤだい！」

「いじめはせん、いじめはせんから降りて来い！」

「だますからイヤだい」

「だましやせん」

「ほんとか」

「ほんとうとも」

住職としては、大事な商売道具をダイナシにされてはかなわぬと思つたらしい。とうとう泣きを入れてきた。

私は、だまされはしないかと半信半疑で、怖る怖るエンマの頭の上から降りていつたが、住職は、

「困つた奴じや」

と、ブツクサ文句を言つただけで、約束どおり、別に折檻はしなかつた。

それ以来、恐いものがなくなつたから、私はますますいい気になつて、したい放題の乱暴やわるさをした。

住職の留守の隙に、悪童連を本堂へ連れこんで、木魚や鐘や太鼓を叩かせたり、蓮台のホトケ様を降して、代りに馬糞をのせておいたり、廊下に蝋を塗つておいて、坊さん達をすべらせたり、お葬いの最中、とつぜん花火を鳴らして皆をびつくりさせたり、絶えず悪いことばかりしていたものだから、ついに住職も音をあげて、家へ連れもどされた。七歳の六月ごろだつた。

山窩の復讐と母の度胸

その年（明治三十八年）の八月十三日は、私にとつて生涯忘れることのできぬ悲しい日である。私の母は大腸カタルを患い、十数日のあいだ床についたきりで、その日に亡くなつたのである。

私は葬式にはついて行かなかつたが、遠くの裏山で母の亡骸が荼毘に付されている火が庭からも

見え、夕闇のなかにいつまでも赤々と燃えているのを眺めては、むしように悲しくなつて、大声に泣いたものである。
　母の名はトリといつて、ひじょうに正義観念がつよく、勝気の性分だつたようだ。駐在所の奥さんたちは、ときおり、子供をつれて、五日市の署長の官舎にあつまり、茶話会のようなことをしていたようだが、署長の一人息子が相撲が好きで、署員の子供を見ると、相手かまわず挑んできた。私より一つ年上の子だつた。そこでたいていのお母さんは、自分の息子に、「お前は負けてやるんだよ」といいふくめて、わざと花を持たせたものだつた。
　ところが私の母は、
「もつと負かしておやり」
といつて、ケシかける。私は遠慮なく、その子を投げとばした。泣きながら掛かつてくると、いつそうひどく投げとばすので、私にだけは掛かつてこないようになつた。
　そのころ、秩父、奥多摩方面に、兇悪な山窩がいて、ときどき町を荒しにやつてきた。彼らは昼間、坊主に化けて托鉢にくる。そして裕福そうな家に狙いをつけ、戸締りの様子などを偵察しておいて、夜、強盗におし入つてくるのだつた。
　彼らは平気で人を殺傷するので、町では戦々兢々の有様だつた。いつも同じ手口で、被害者の話による人相風態、持つている兇器の種類などからみて、父は、どうもこれは山窩らしいと判断した。
　それから父は、山窩専門の刑事みたいなことになり、山に入つて二日も三日も、時には十日も二

十日も家に帰つてこないことがあつた。そしてついに、何人かの最も兇悪なやつらを、数人検挙してきたのである。
　彼らがタタキ（強盗）に押入る手口は、昼間、托鉢僧に化けてきたときに、持つている杖で、カンヌキや錠前のある場所や高さを、なにくわぬ顔で計つておき、夜、適当な道具を持参してコジ開けて入るのだつた。
　父の山歩きは、だいぶ長いあいだ続き、山窩からは恐れられもし、恨まれもしたようである。彼らは復讐心が強いから、いつ獣のように家に忍びこんできて、父の寝首を掻かんともかぎらぬ心配があつた。
　今夜は来そうだという晩には（それはその日か前の日、山窩を一人か二人、捕縛してきたときである）、母は、父の傍らに夜通し起きていて、縫物をしていた。
　手近かなところには、いつも秘かに猟銃をおいていた。
「それをどうするんだ」
　父がある時、猟銃に気がついて、母にたずねると、
「来たらぶつぱなしてやります」
「相手に怪我をさせたらどうする」
「いいえ、第一発は空弾です。実弾は二発目からですよ」
　母は、笑つてそう答えたという。

私の負けん気は、母ゆずりのようである。母の亡くなつた日が、ちようど、私の誕生日だつたのも、不思議な因縁のような気がする。私は幼なごころにも悲しくて、毎日、裏山をみてはボンヤリ暮した。

その頃、山伏が何人ずつかの群となつて街道を通り、裏山に分け入つてゆく姿を、よく見かけた。髪を総髪にして兜巾をかぶり、山刀を帯び、白い装束で金剛杖を突き鳴らしながら行く姿が、私の目には、まことに好ましく見えた。母なきあとの淋しさと、神秘にあこがれる気持に駆られて、私は自分も山伏になりたいと思つた。

そして一日、私は父や祖父にも無断で家をとび出し、山伏の一行のあとを追つて山に入つたのである。

三ツ峯山の大行者

ある残暑のきびしい日、家の前を通りかかつた三人の山伏のあとについて、私はどんどん山道をのぼつて行つた。彼らは、なにか冗談口をたたきながら、平気で歩いているのだが、私はコンパスが短いから、駆け足のし通しだつた。

杉林の茂つた峠道にさしかかると、山伏はふりかえつて、

「お前はなんだ」

と、はじめて気がついたように言う。

「ぼく、山伏になりたいんだ。一緒に連れてつてくれよ」

「馬鹿な、こんな遠くまで来たら、帰るのにたいへんだぞ。家で心配するから、早よう帰れ」

それでもかまわず、ついて行くと、子供の山伏なんかあるもんじやないとか、山奥には子供をとつて食う天狗がいて、体を八つ裂きにしてしまうとか言つて、面白半分に、いい加減からかつたり、脅したりする。

私はなんといわれても知らぬ顔をして、どこまでも、どこまでも彼らの後に喰つ付いていつた。やがて道はなくなつて、真暗な密林の中へ入つた。丈なす草のなかを掻きわけて、進んでいく。彼らも私の強情には根負けしたのか、そのころは帰れともいわず、断崖を登るときは手を引つぱつてくれたりした。

「どうだ、へたばつたろう」

「ううん、平気さ」

「ははア、面白い子だ、ちよつと変つてるようだな」

「ちよつとどころじやない、こりやア、よほどおかしな子だ」

「どうだ、おんぶしてやろうか」

「いいよ、なんともないよ」

私は相変らず強がりを言つたが、残暑の陽の直射と、ムンムンする草いきれと、生まれて初めての強行軍に、全身は湯を被つたような汗で、膝小僧はガクガクになつていた。

しかし、こんな右も左もわからぬ山の奥に、おいてきぼりをされては大へんだと思つたから、死ぬ思いで一生けんめいについて行つた。小休止があると、ホッとして、着物の袖で汗を拭いた。三人になにかからかわれると、例によつて負けん気のヘラズ口をたたいた。

こうして夢中になつて歩いているうち、だんだん気がついたことは、彼らが道もないところをどんどん進んで行くのは、出鱈目や当てずつぽうに行くのではなくて、ちやんとした特別の目じるしがあつてのことだということである。

つまり、草が結んであつたり、何間かおきに木の枝が差してあつたり、木の幹に斧の跡がついていたり、それで方向がハッキリ示されているのだつた。それだけでなく、草の結び方や、斧跡によつて、何日前に何人の行者が山に入つたかということまでが、わかる仕掛になつていた。

その日のうちに着いたか、翌る日だつたか記憶はあやしいが、とにかく山また山を越えて、私たちは大行者のいる岩屋の前に着いた。大行者は絵でみる仙人そつくりで、みごとな白髯を胸のあたりまで垂らし、見るからに神々しい老人だつた。新着の山伏たちはその前に行つて平身低頭し、何か挨拶をのべるのだつた。

ここは関東唯一の三ツ峯の修業場で、全国から集まつてくる大ぜいの山伏が、あちらこちらにグループを作つてたむろし、何カ月間か修業する聖場なのである。その総元締が大行者なのだが、私はオッカナイような気がして近寄らなかつた。一緒に行つた三人連れの山伏の中にまじつて、行動を共にした。いわば山伏のモグリなのである。

山伏修業

夜は木の下に寝て、朝は太陽の出と共に起きる。火はこの社会ではもつとも神聖なもので、勝手につくることをゆるされない。火が必要なときは、大行者のところへ貰いにいかねばならないのである。

大行者は、朝、太陽の熱を天眼鏡であつめて、木に移す。レンズを使うところはなかなか科学的でモダンだが、他は一切が古式で、また恐ろしく超人的である。曇天や雨降りの日は、竹と桐の木を摩擦して火を起こし、軽い鍛冶屋炭に移すのだが、本部に火を貰いに行つた者は、この炭火を掌に受けて、一町も二町も、フーフー吹き起しながら走るのであつた。

飯を炊くにしても、鍋釜などという世帯道具を必要としない。どうするのかというと、米を麻の風呂敷に包み、そのまま渓流でザブザブ洗い、袋の口を縛つて地に埋める。そして上から火を焚くのだが、火にあたりながらムダ話をしているうちに、米は蒸れて軟かい飯になるのである。この方法なんかは、いまごろの人もキャンプに行つたときなど、利用すれば重宝だろう。

しかし、飯でなければ食えないというのは、下の下なるもので、行者の新発智である。功を積んだ者は、ほとんど米の飯は食わない。松の甘皮とか木の実とかを、ホンの少し摂つている。こういう行者がだんだんに行がすすむと、露をなめ霞を吸つて、ほんとうの仙人になるのだろう。あのへんには猿がたくさんいて、よく枝から枝に群れていたが、行者のなかには猿の造つた酒というのを

みつけてきて呑んでいる者もあつた。
絵にある天狗などは、よく一本歯の下駄をはいているが、山の行者はみなこれを用いている。山の登り下りには、一本歯でなければ都合がわるいので、あれはなかなか合理的なのである。つまり傾斜でも、下駄の面は水平に使えるから大へん楽なのだ。
彼らは片手に法螺の貝を抱え、もう一方の手だけを使つて、一本歯の下駄をはいた両足を突つ張りながら、すごく高いところまで木登りさえするのである。
彼らの日常は、朝、昼、夕と法螺貝を合図に、時間をきめて読経し、その合い間に祈禱、まじないの法とか、火渡りの法とか、探湯術（煮えかえつた湯の中に手を突込む）とか、杖術の練習をする。見ているだけでも物すごい。私の杖術は、この時に初めて手ほどきを受けたものである。あとから喧嘩のとき、ずいぶん役に立つた。速歩の方法などは、忍術にもあるが重宝なもので、行者のなかには一日に五、六十里（二〇〇キロから二四〇キロ）を行く者とか、百貫（三七五キログラム）の荷を背負つて、二十里（八〇キロ）も行く者があるという話であつた。
今でも不思議なのは、彼らが加賀の白山とか、羽後の羽黒山とかと、信号通信をすることだつた。これは功を積んだ行者だけのすることであるが、黙想して坐つているかと思うと、とつぜん立ち上がつて指を空に向け、指先きを動かしながら、なにごとか無言の通信を交すのである。
「何日後には、どこそこから何某を頭にして何人の行者が来る」
そんなことが、ピタリと適中する。

私が後に千里眼をやつて生き神さまに祭りあげられたのは、このときの強い印象で、人間には常識を超えた霊力というか、念力というか、または脳波というか、一種のエネルギーの存在を確信したからで、山の生活は私の幼ない眼に、日々ただこれ驚異と魅力の連続であつた。
私のような豆小僧が、現実の浮世から隔絶された神秘と幽玄の世界にまぎれこんで行つたのは、おそらく前例のないことで、行者たちもめずらしがつて面倒をみてくれた。そら読みだが、お経を覚えるのが早いと言つて驚ろかれた。杖術もだいぶ上達したし、火渡りとか探湯術も一緒にやつた。
そんな生活を百日以上もつづけていたようである。
山々の紅葉が深くなり、朝夕の霜がだいぶ身に沁みるようになつてきた或る日の午後、炎々と燃える松材の火の海を、行者たちが九字を切り、呪文を唱えながら渡つてゆく、その火渡りを、すこし離れて踞みこみ、頬杖をついて一心に見ていたときである。
「おい、勇……」
左右からとつぜん肩を押えられた。
ふり返ると、父と兄である。
私の出奔以来、家では大騒ぎになつて、さんざん探しまわつたとのことだ。東京市内にでも飛び出したのかと捜査願も出したし、どこかで死んでいるかも知れないと、町の内外はもとより、近辺の山や森を探し、河までさらい、どうしてもわからないので、町の人々は神隠しになつたのだろうと噂した。

二ヵ月以上経つと、もうこの世に居ないだろうといわれたが、父はどうしても諦めきれず、どこかに生きているような気がして、山窩（さんか）狩りのとき山を歩いた経験を生かして、秩父一帯の山々を探しまわり、とうとう発見したという。
それは十一月も末のころで、家を出てから四ヵ月経っていた。私は山の生活に、尽きぬ未練をのこしながら、ついに父と兄に連れもどされ、ひどくお説教を食つた。

忍術修業

祖父から手ほどき

父は、警察に迷惑をかけたこともあつて、私をひどく叱つたが、祖父はむしろなだめ役で、全然文句を言わなかつた。かえつて私の話をきくと、
「それはいい修業をしてきた。よかつた、よかつた」
と、喜んでくれたようだ。
そして二、三日すると、
「お前は見どころがあるから、これから忍術の稽古をつけてやろうと思うが、どうだ、やる気があるか」
と、言つた。私は、もとより願うところなので、言下に「やります」と答えた。
「しかし、この修業は、つらいぞ。勇にできるかな」

「つらくっても我慢しますよ」
「途中で気が挫けるようなら、初めからしない方がいい。本当にやり通す決心があるか」
「あります」
「では、金打をせい」
金打というのは、刀のつばを打ち合わせて、約束を誓い合う武士の作法である。祖父は刀架から大刀をとって自分の腰に差し、私にも小刀を渡した。二年ぶりで私は腰に刀をたばさみ、おごそかに金打をした。
忍術は適当な資格ありと認めた者でなければ、わが子といえども後継ぎをさせない。適当な資格というのは、第一に正直、第二に頭脳の鋭敏、第三に身体の敏捷、これである。
正直とか誠実、正義心というのは忍者の必須条件で、忍術は善用すべく、悪用をゆるさないという建前から、これは当然の要求なのだ。頭脳の鋭敏、身体の敏捷は、あらためて説明するまでもない。
祖父は、私にその資格ありと認めて、改めて後継者たらしめようとしたものらしい。
「勇、来い」
あくる朝、祖父に呼ばれた。私もかねて忍術や忍者の話は祖父や父から聞いていて、あこがれのようなものをもっていたから、心をおどらせて隠居部屋へ行った。
「坐れ」

と、いう。いつになく祖父の顔が緊張して、いかめしく見える。どんなことから始めるのかと、いくらか恐ろしいような気持でいると、祖父は、机の上から巾三分、長さ五分ほどの小さな綿屑をとって、一端を甜め、前に垂れるように私の鼻の先につけた。
ひどく緊張していたのが、こんなことなので、私は可笑しくなって笑い出した。綿は、とたんに落ちてしまった。
「なぜ笑う」
「だって、こんなもの……」
「これが修業の第一歩なのだ、自分で今みたいに鼻の先へつけなさい」
「はい」
「いいか、これは整息術といってナ、呼吸をととのえる練習だ。息をしても、綿が落ちないようにならんければならない。さあ、やってみい」
わけはないようで、やってみるとなかなかむつかしい。よほど気をつけて息をしても、綿は、すぐ落ちてしまう。それが全然おちないように静かに呼吸をするのが整息法であるが、よく次の間に入ってきた者が、息づかいで察せられるということがあるので、整息は忍びの第一に必要なのである。
初めはただ坐っていての練習だが、だんだん上達してくると、庭をいくまわりも走ってきてから、この整息法をやらせられる。

それから歩行術をさせられた。
最初は「足先き歩き」である。足先き歩きというのは、俗にいう爪先き歩きのことで、これも五歩や十歩はワケはないが、三十分以上にもなると、なかなか苦しい。
すきを見てカカトを降すと、
「こらッ」
と、どなられる。とんできて鉄扇でピシリと頭を打たれる。
「わしをゴマカそうという精神がよくない」
と、恐ろしい剣幕だから、二度とゴマカシはできなくなる。
これが出来ると、次が本当の「爪先き歩き」で、トウダンスのように足の拇指の爪に重心を乗せて歩く方法だ。トウダンスはバレー沓というものがあるからなんでもないが、ハダシでは、立つだけでも痛い、苦しい。まるで拷問にかけられるような気持だつた。
この整息法と歩行法を二時間くらい。それから「日本外史」の素読を一時間、三体千字文の習字を一時間ほどやつて、午前中がすぎる。
午後からは一尺四方の箱の中に、砂を入れたものをもってきて、
「勇、この中へ力いっぱい手を突込め」
と、いう。これは指先きを強くする鍛練である。初めは指先きが痛いばかりで、少しも砂にささるものではない。

「痛いよ、お祖父さん」
「痛いにきまつている。それを我慢してやるんだ」
祖父は忍術のこととなると容赦はしない。私も「なにくそッ」という意地で続けたが、最初の日に指先きに血が滲んできた。その日は、まだ我慢できたが、翌日は触つても痛い指先きを、そのまま、また砂の中に突込ませられたときは、さすがに涙が出た。
「だめだめ、もつと力を入れて！」
祖父は、少しも仮借せず、私を叱咤した。
こうなると私も、手なんかどうなってもいいという捨て鉢な気になつて、血の滴る手を、歯を喰いしばって、
「えいッ」
と、力まかせに突っ込む。
こういう無茶というか乱暴というか、文字通り血の滲む猛練習が、毎日続けられた。

歩行術と跳躍術

一カ月もすると、馴れるというか、歩行術も爪先き歩きも完全にできるようになつた。するとこんどは、足の甲で歩く練習である。つまり足先きを内側に向けて、甲を下にして歩く方法だ。これがまたすこぶる痛い。足首の関節がいまにも挫けそうな痛み方である。二日目にボキッと鈍い音が

して、関節が外れた。
私は気が遠くなるような痛さで、ぶつたおれてしまつた。祖父は、すぐに接骨をして、酢の臭いの強い薬を塗り、手当をしてくれた。普通なら腫れ上がつて、二、三日は動けないのだが、二時間もすると痛みもとまり、腫れるようなこともなかつた。
その日は、それで稽古は終りかというと、そうではない。
「足は挫いたが、手の方は何ともないはずだ」
と、手の鍛練である。
手の鍛練も、一カ月も続けると、指先きが固くなり、砂の中に手首くらいまで入るようになる。するとこんどは箱の中の砂が砂利にとつて代えられる。小砂利を卒業すると次は粘土になり、粘土を卒業すると、つぎは普通の地面へ突込む練習になるのである。
こうして、鍛練を積むと、素手が鋼鉄にまさる武器となって、敵のノド笛へ手刀をぶすりと突込むくらいは造作のないことで、敵の肋骨を引抜くこともできるようになる。
指先きを鍛え、ウンと強くするのは、忍者のもっとも重きをおくところで、手ほどきのイの一番からこの鍛練を始めるのである。
指先きの力が強くなると、天井が匍えるようになる。つまり格子天井なら、その格子を二本の指でシッカリ掴んで体重をささえて、渡つて歩くのだ。八畳間なら二分か三分で渡ることができるようになる。

こういう練習を毎日しながら、二、三カ月すると、午後から跳躍術が加わってきた。
忍術の跳び方には、前跳び、後跳び、高跳び、巾跳び、斜め跳び、横跳びなど六法があることを説明され、祖父がまず型を示したが、スルスルと木登りして、三間も高いところから、身軽に跳びおりたのには、私も子供ごころにおどろいた。
しかし三間（十八尺、約五・四五四メートル）くらいは、単に型を見せるために跳んだにすぎないので、忍者は普通五十尺（約一五メートル）の高さから跳んでも平気でなければならないとされている。私は、後のことだが四十五尺（約一四メートル）を跳んだ経験がある。
それ以上を跳ぶには、風呂敷なり何なりを、口と両手で三方にひろげて、パラシュートの原理で跳ぶのである。しかし、それは特別の用意がないときで、忍具のなかには今日のパラシュートとそっくりのものが、すでに七百年以前に、ちゃんと出来ていて、百尺もある石垣でも城塞でも跳びおりていた。
それから巾跳びは三間、高跳びは九尺が、忍者の跳べなければならぬ標準になつている。この練習をするには、まず一坪の土地に麻の実をまき、麻はまっすぐに延びて、成長の早いものであるから、その上を毎日とび越える。一日ごとに高くなつて行くから、それと共に跳び方も上達していかぬと、麻に追いこされてしまう。九尺の高跳びができるようになるには、やはり三年はかかるとみなければならない。
歩行術と、爪先き歩きと、足の甲で歩く練習を卒業すると、次に両股を一様にひらいて、尻を地に

つける練習をする。このかたちは西洋のダンスにもあるが、そうしても股が裂けない鍛練をするのである。これは骨のやわらかい子供のうちが早く卒業できるので、私も大して苦労せずに出来た。
以上の三種が歩行術の基本訓練であつて、これが済むと、いよいよ本論に入る。歩き方には前方、後方、横歩き、斜め歩き、這行（しやこう）、速歩（そくほ）と六種あつて、それぞれ忍者にとつて必須（ひつす）の修業になつている。
「前方」は普通の歩き方だが、これは力低（りきてい）といつて、紙を八ツ折りにしたものを奥歯に噛み、自分の足許を見ながら小刻みに歩く。顔を上に向けると鼻腔（びこう）へ抵抗がきて、それだけ疲労を早くするから、やや俯向（うつむ）き加減がよろしい。それで一時間に四里（一六キロ）、一日に四十里歩くというのが忍術の定法（じようほう）となつている。その速力は、胸に笠を当てて　それが滑りおちない程度のスピードでなければならない。あるいはまた、一反の布を襟につけて、走つている間、その先端が、少しも地につかないというのを見当にして練習するのである。
横に歩く方法は、両足をX形に組んで歩く。これは一日に三十八里（一五二キロ）を定法としてある。この歩き方は、塀にぴつたり寄り添つて行くような場合、または狭いところなら人間の胸の厚さだけの間隔、つまり七、八寸（約二三センチ～二六・四センチ）の狭いところでも歩けるのである。
這行（しやこう）、これは匍い歩きで、闇夜を歩くときの方法だ。匍（は）つて地上を透かしながら歩くのだが、こうすると闇夜にも、おぼろに敵の影がみとめられるので、忍者にはもつとも重宝な歩き方になつている。

忍者は、不具者をよそおわなければならぬ時もあるが、これは歩行術の基本型を応用する。つまり一方の足は爪先き歩き、片方は横にねじまげて、甲で歩けば、誰がみても片輪としか見えないはずである。

学校の二階から跳ぶ

毎日、このような猛訓練に明け暮れて、やがて新しい年を迎え、私は数え八歳になつた。
その年の三月、父は再び東京勤務を命じられ、小石川の竹早町へ引越して行つた。
生活環境の変化は、新奇をよろこぶ子供心には楽しいことにはちがいなかつたが、裏山にある母の墓と別れたのは、なんとなくもの悲しかつた。
東京に来て日が経つにつれ、心の空虚は、ますます大きくなつていつた。
四月になつて、私は小日向台町小学校の二年に新入学した。昔は学力に応じて、いきなりそんなことができたのである。
私は他のことは知らなかつたが、読み書きは六歳から寺でお経を習つたり、祖父から漢籍を学んだりしていたので、読み書きソロバンの三つだけが主要科目だつた当時の小学校にすれば、相当に高度の学力があつたらしい。祖父は毎朝、五時というと私を起こして、二時間くらい忍術修業をつづけさせた。それから朝飯になり、学校へ出かける。
学校は、あまり面白いところではなかつた。東京の府下といつても、青梅とか五日市のような田（いな）

舎町に育つた私の目からみると、同クラスの者はもとより、どの生徒も、ひ弱なくせにただコマシャクれて、生意気で、気取り屋で、どいつもこいつも気にくわなかつた。いまから思うとこれには私自身に、いわゆるインフェリオリティ・コンプレックス（自己劣等感）があつたのかもしれない。そういう気持に加うるに、母のいない淋しさが、何かもやもやしたものを、いつも胸のなかに鬱積させていた。

こういう気持のはけ口といえば、腕力をふるつて心の中の快哉を叫ぶことだけである。私はクラスの者を片ッ端からいじめた。何かアッといわせるようなことをして、みなのドギモを抜いてくれようという、不逞な考えをつねに胸の底に燃やしていた。

ある朝、二階で遊んでいると、朝礼の鐘が鳴つた。大部分の生徒が校庭に集まつたころを見すまして、私は二階の手摺から校庭へ飛び降りた。

「あッ」とか「わッ」とかいう声が、校庭のあちらこちらから聞えたが、私はちよつとよろめいただけで、すつくり立ち上がり、悠々と自分のならぶ場所へ行つた。

朝の授業が始まる前、受持の先生に呼ばれた。

「藤田、お前は二階から跳んだというが、本当か」

「はい」

「そんな乱暴をしちやいかん。ちやんと階段というものがあるではないか」

「でも、その方が早いです」

「馬鹿、もう二度とそんな真似はよせ」

「なぜですか」

「怪我でもしたら大変じやないか」

「怪我なんかしません」

「いや、今日は幸い何事もなかつたが、こんどはキットするぞ」

「じやア、もう一ぺん跳んでみせます」

「もう跳ばんでいい」

先生も、呆れ返つたようだ。

私はこの日から、全校の注目を一身にあつめるようになつた。人間には自分の存在を、他に認めさせたいという本能があるようだ。私はますます得意になって、腕力……というより暴力をふるつた。

クラスの者は誰一人タテつく者はなく、みんな私のごきげんをとつた。私はいい気になつてボスのようにふるまい、アゴでみんなを指図した。

気にくわぬ相手は、上級生であろうと喧嘩を吹つかけて殴りつけ、「降参」というまで痛めつけた。上級生には、先生くらい背の高いものもいたが、次々と五、六人に喧嘩を吹つかけて降参させると、あとはみな、敬遠して手向つてくる者はなくなつた。

ずいぶんいたずらもしたもので、いろいろとわるさを考えては、みんなに命令した。

「明日は竹筒のなるべく太いのを、一本ずつ持つてこい」
というと、クラスの者は、わけがわからず、その通りにする。何をするのかというと、学校の帰り、みなにそれで馬の糞を拾わせた。
その頃は、トラックの代りに馬車や荷馬車がハバをきかせ、東京市中の街路には、至るところに馬糞が湯気を立てて、おきすてられていた。
それへ竹筒をあてて、上から押すと、丸く穴の形にくりぬかれる。それを商家の軒先きに行つて、ポンと叩きおとさせる。
「それが天狗のクソだ」
こうして軒並みに天狗のクソをおとして歩いたり、夏のある時などは、店や住居の軒先に、スダレが掛かつてあるのを見て、習字の時間が始まる前に、
「今日は、みんな、半紙一枚に忌中と書け」
と、命令しておく。弁当のときは、メシ粒を少し残しておくようにいつておいて、学校の帰り道、軒並みのスダレに「忌中」の紙をはらせたこともある。

レンゲ山の喧嘩場

小日向台町小学校に喧嘩相手がなくなると、私は他の学校まで遠征に出かけた。
小日向台町から坂道を下りていつたところに、黒田高等小学校という、高等科の生徒ばかりの学

校があつた。ここの小林というのが強いという評判だつたので、学校の帰り途に、取り巻き連中をしたがえて、黒田高等小学校の門前に待ちかまえた。
終業の鐘が鳴つて、ゾロゾロと生徒が出てくる。高等科だからみな、背も高い。
「あそこに来るのが小林だ」
「よし」
私は、小林のそばにヅカヅカと近寄つて、その前に立ちはだかり、睨みつけた。なにも因縁をつけるような文句があるわけでないから、ただ無言の挑戦である。
「お前は、なんだ」
小林も黒田校の腕白大将の貫禄をみせて、私を睨みつける。
「おれは小日向の藤田だ。お前と喧嘩しに来た」
「よし、レンゲ山に来い」
レンゲ山というのがその頃のケンカ場で、茗荷谷から上がつたところにある草つ原だつた。小林も私も、大ぜいの弥次馬に取り巻かれて、レンゲ山に登つていつた。
原つぱの適当なところを見つけると、学校道具の風呂敷包みを放り出して、
「さア、来い！」
と、待つたなしの殴り合い、取つ組み合いが始まる。
私は小粒だが手が早く、相手が一つ殴るところを、四つ五つ殴つてしまう。自分より大きいやつ

きだつた。不意に人の気配を感じたせつな、右の下ッ腹をチカリとやられた。
待ち伏せして、竹槍で刺したのである。
「くそッ」
私は、抜きうちに、竹槍を持つて泳ぎ出た相手の肩先へ斬りつけた。
「わあッ」
そやつは私の腹へ刺した竹槍をそのまま、坂道をころげるように駆け出して行つた。
その後から、もう一人、竹槍を持つた奴が駆けて行つた。私の腹を突いたのが、木村辰次ではなかつたかと思う。
私は、脇腹の竹槍を引き抜いた。
その時の感じでは、四、五寸も入つていたように思う。ひどく血が吹き出した。私は右手で傷口を押えながら、片手で三尺を解き、着物を脱いだ。
私はその頃から六尺褌をしていたので、褌でキリキリと腹を巻き、また着物を着た。
傷は、さほど痛いとも思わなかつたが、頭がふらふらして、よろけそうになつた。出血が多量で、貧血を起こしたらしい。
あたりはもう、夕闇に閉ざされていた。
私は、足を曳きずるようにして、家に帰つた。そして、暗くなつていたのを幸いに、裏窓から自分の部屋にころげこんで、布団をかぶつて寝てしまつた。

父に知れると大へんだと思うと、医者にも行けない。私はコッソリと台所から酢を持ち出し、傷口を洗つて、また褌をしめなおした。
そして、家人にはカゼを引いたといつて、そのまま三日間、寝床にもぐりこんでいた。
三日経つと、完全に傷口もふさがつたので、起き出して普通のようにふるまい、家の者にはなにくわぬ顔をしていた。
私は、木村辰次の卑怯なだまし討ちに憤慨し、こんど出会つたら、出ようによつては息の根をとめてやろうくらいの決心で、その後、よく大塚近辺を歩きまわつたが、木村はもとより、その子分らしい者にも、一度も出会わなかつた。
なんでも後からの噂によると、木村は私がつけ狙つているというのをきいて、大阪へ飛んでしまつたということである。そのため、彼のひきいていた不良少年団も、自然、解散の形になつてしまつたという。私の向う見ずの乱暴も、社会に害毒を流していた彼等を追放したという、思いがけぬ功績をあげたことになつたわけである。

コンニャク閻魔の地獄人形

その後も懲りもせずに、相変らず喧嘩をしたり、いたずらをしたりしていたが、それから三カ月ほどの後、さすがの私も、自分のいたずらに冷汗を流すような事件にぶつかつた。
それは忘れもしない盆の十三日だつた。例によつて本郷台の方へ、喧嘩を探しに行つての帰り途、

ぶらぶら歩いてくると、小石川柳町にある源覚寺という、古いお寺の前にさしかかつた。俗にコンニャク閻魔というが、ここにある地獄極楽のカラクリ人形は、なにがしという名工の作なのであろう、昔から有名だった。縁日とか盆とかは、坊さんがこのカラクリ人形を動かして、人寄せをするのが例になつていた。

ちようどその日が盆の十三日なので、寺は大へんな人出で、ことにアヤツリを実演中のエンマ堂の前は、善男善女が黒山のようにひしめいていた。

私も、ひとつのぞいてやろうと思い、群衆の足もとをくぐりぬけて、いちばん前へ乗り出していつた。

日ざしも傾きはじめて、小暗いエンマ堂の中には、眼を怒らせた眉の太いエンマ大王が中央にひかえて、左右にいる赤鬼、青鬼が、額に三角のきれをつけて、痩せさらばえた亡者の襟がみをつかんで石ウスの中に入れる。そして、鉄の杵をふり上げて、交互に搗くところを見せているのだが、ただよう線香の煙の中で、陰にこもるような妙な節をつけて説明する坊主の文句が、また一段と無気味だつた。

この世で悪事をした者は
血の池地獄や針の山
石の臼にてくだかれて
青鬼、赤鬼、容赦なく……

単調な抑揚で、呪うがごとく、人の心を脅かすがごとく、そんな文句をとなえながら、坊主が綱を引つぱると、ガタン、ガタンとカラクリが動くのだが、そのぎこちない動き方が、かえつてまた、陰惨な、怖ろしげな効果をいつそうかき立てているのだつた。

私は、じつと見ているうちに、自分のことを言われているようで、ゾッと身ぶるいが出るくらいこわくなつた。それほどその人形は巧みに出来ていたのだろうし、坊さんの操り方も上手だつたのだろう。

私は、もう見るに堪えられなくなつて、よほどすぐ帰ろうかと思つたが、その時、ふとまた、生来の負けん気が、ムクムクと頭をもたげてきた。小ざかしい反撥心が、私の全身にたぎつてきたのである。

「なにクソ、デタラメを言つてやがらア」

すぐ足もとに、幟を立てる穴のふさぎに使う、タクアン石ほどの大石があつた。私はそれを頭上にふり上げると、カラクリのどまん中に叩きつけた。

ドン、ガラガラッと、すごい音を立ててエンマの庁はメチャメチャにひつくり返つてしまつた。さアそれからが大へんな騒ぎで、坊さんは血相かえてとび出してくる、見物は総立ちになる。もちろん私は、すばやく見物の中にまぎれ込んだが、

「あッ、あの子だッ」

「あすこに居るぞ！」

「それ、つかまえろ！」
などという叫びが、身辺に迫つて聞えると、さすがに胸がドキドキして、いつさんに寺の境内を逃げ出した。
「待て、この野郎！」
「叩つ殺してくれる！」
二、三人の坊主と檀家の若い衆らしいのが、五、六人で後を追つてきた。私は走つた走つた。露地から露地を抜けて、電車通りから南坂、春日町、砲兵工廠裏の原つぱから、富坂と逃げまわつたが、坊さん達は、どこまでも追つてくる。その執念ぶかさには、私も閉口した。もう来るまいと振り返つてみると、まだ追つてくる。
源覚寺にすれば、伝来の寺宝を、それも大事な商売道具をメチャメチャにされたのだから、チョッとやソッとの憤慨ではなく、その見幕も凄いわけだ。
一時間近くも追跡の手をゆるめなかつたようだが、この辺はどんな露地裏、抜け道も知つていたので伝通院の前までくるうちに、ようやく追手をまくことができた。しかし、私もクタクタになつてしまつて、まつたく命からがらという思いだつた。

三晩つづけて地獄に陥ちる

その夜、私はひどい熱が出た。

いまでもそうだが、私の体は普通とすこし違うようで、ちよつと熱が出たと思つても、体温計で計つてみると、四十二、三度にもなつている。やや高いかなというようなときには、水銀柱の目盛がいつぱいになつてしまつて、何度あるかわからないのである。
私がウトウトとすると、エンマ大王の眼玉がギラギラと光つて、
「……この世で悪事をした者は……」
坊主の薄気味のわるい声が聞えてくる。
すると赤鬼、青鬼が出てきて、私を石の臼（うす）に押し込み、鉄の杵（きね）で搗（つ）くのである。私は恐ろしくて、恐ろしくて、つい悲鳴をあげる。
「勇、勇、どうしたの！」
その頃は二度目の母が来ていて、私を揺り起こしてくれた。私は全身グッショリの汗で、体からは湯気が立つていた。寝巻きを着替えさせてもらつたが、ウトウトとすると、また地獄の夢である。ひどいウナされ方で、また母に揺り起こされた。私は、眠ると待ち構えているようにエンマ大王の眼玉がギラギラ光り、坊主の唄声が聞えてくるので、こわくて眠ることができない。眠るまいと床の上に起きあがつたが、高熱で起きてもいられず、眠ることもできぬという苦しい状態で、とうとう一夜を明かしてしまつた。
次の晩も、同様だつた。
眠ると地獄の夢でうなされ、また母に揺り起こされた。その次の晩も同じようで、私はとうとう

三晩つづけて恐ろしい夢に苦しめられた。

　私は不眠と恐怖で、ヘトヘトに疲れ、げつそりと痩せてしまつた。私は地獄とかエンマの庁とかが、あるのか無いのか、そのことだけが気になつて仕様がなかつた。

　四日目にお盆の法事で、家に坊さんがやつてきた。坊主なら本当のことを知つているにちがいないと思い、なに食わぬ顔をしてたずねた。

「和尚さん、地獄極楽つて、本当にあるものかい」

「あるとも、あるとも、大ありさ」

「ウソだろう」

「なに、ウソなもんか。お前みたいにわるさばつかりしている者は、エンマの庁で照魔の鏡という前に立たされてな、自分のした悪いことがことごとく映し出される。そして石のウスに放り込まれて、赤鬼、青鬼どもの鉄の杵で搗かれることになろうな」

　この和尚は、私がコンニャク閻魔で乱暴したことを、知つているのかいないのか、毎晩みる夢の通りのことをいうので、私はシュンとしてしまつた。

　本当に地獄や極楽があるなら、とんだことになる。エンマ大王や鬼どもにいじめられる自信が十分にあるので、さすが無鉄砲の私も心配になつてきた。

　私にとつてこれは大問題なので、それからというものは、朝、目がさめると一日中、地獄極楽のことを考えるようになつた。

　毎日考えているうちに、地獄極楽があるか無いかということより、人間が死んでから先、そのような世界へ行くものかどうか。人は死ぬと肉体は無くなるが、霊魂が死体から抜けて行くという、そういう霊魂などというものが、本当にあるのかどうか、それが先決問題だと気がついた。

　霊魂などなければ、地獄や極楽に行く心配はないのだから、なにも気をもむことはない。このことからハッキリ知りたいものだと思つた。

　私はこの疑問を解明したいものと、祖父や父にたずねた。すると祖父は「ある」という。父は、

「あるともないとも言えんな。あるといえばあるし、ないといえばない」

と、すこぶる頼りない返事だ。

　いつたい、私は、思い立つたらガムシャラに突進する性質で、これをきつかけに霊魂とか心霊という、神々の世界の探求に全精力を傾けるようになつたのである。

　当時はちょうど明治の末期、四十年代で、催眠術とか心霊科学とかの研究が、もつとも盛んな時代であつた。

　有名な研究団体を数えあげても、山口三之助の帝国催眠学会、小野福平の大日本催眠術奨励会、桑原俊郎の精神霊動会、このほか催眠術の研究で学位をとつた福来友吉博士の団体や、幽霊博士といわれた井上円了博士を中心とするグループなど、百花斉放の観があつた。

　したがつて、これに関する学術的なもの、インチキなもの取りまぜて、いろいろな本も出ていたから、私はこれらを片つ端から読破した。

しかし、こういう本で私の研究心は満足されず、当然のコースとして宗教（主として仏教だが）方面に首を突込んでいつた。来世を説いた経文や解説書も読んだが、最も興味をもつたのは密教、真言秘密の法である。私の興味は、ますます神秘なもの、幽玄なものにひかれていつた。

忍術の「忍」は忍耐の「忍」

こういう研究を続ける中にも、忍術の修業は一日も欠かさなかつた。ことにその年（四十三年）の六月ごろから、祖父の指導はきびしくなつた。

祖父はこの年の九月初めに亡くなつたが、思えば死期を予期して、後継者たる私に、甲賀流の大綱を、生きているうちに伝えておこうとしたものらしかつた。

忍術の映画などをみると、極意の巻物をさずかると、それから術を使えるようになるのだが、なるほど各派に印可とか伝書とかいうものはあるけれども、それには箇条書きに術の方法につけた名称などが並べてあるだけで、実際の指導は口伝によるものなのである。

しかも、この口伝は、折にふれ、時に応じて伝えられるもので、巻物をさずかつたからといつて、それを読んでから、とたんに術を使えるものではない。

術を使えるようになるまでには、何年間も苦しい修業に耐えなければならぬのだ。忍術の「忍」の字は、実は忍耐の「忍」の字であるといつた方が妥当であろう。

忍者が一人前になるまでには、どういう基本的な鍛練が必要かというと、五体の練磨はいうまで

もないが、いかに五体が頑健でも、内臓の鍛練がおろそかであつては何にもならぬというところから、この方面でも、忍者は人間わざとは思われぬまでの荒行をやる。

第一に、無臭の術に入るので、これは体臭を避けるのである。体臭をなくするためには、日ごろは酒もタバコも用いず、なま臭いものを食わない。ニラ、ニンニク、玉ネギなど、特殊な臭気を発するものを食わない。発汗の多いものは飲まない。これは人の目をかすめて通るとか、一室に隠れ忍ぶとき、その体臭によつて勘付かれるおそれがあるからである。

次には絶食に耐える練習、また不眠不休で通す練習。反対に術策上の交際には、暴飲暴食をして平気で居られる練習をする。私は平素、酒もタバコも用いないが、いざ必要とあれば、斗酒なお辞さない。

酒は人を酔わしめるというが、酔つてはならぬと覚悟して飲むと、決して酔うものではない。戦地で斥候に出るとき、菰かぶりの鏡を抜いて、飲み放題に飲んだが、誰も酔わなかつたという話もあるくらいで、忍者は斗酒を飲んでも酔わぬという建前である。暴飲暴食をした場合、私は胃の伸縮運動によつて、内容物を腸に送るから、胸がくるしいなどということはない。がんらい胃袋は不随意筋といわれているが、鍛練によつてこれを随意筋にすることができる。これは公衆の前で、私はしばしば実演してみせている。

これまでの忍者の大食のレコードは、一度に生米四貫匁（一五キログラム）を食つたというのが「伊乱記」に出ている。忍者は酒をのむのは五合から二升くらいまでを「酒を嗅ぐ」という。三升から

五升までをなめるといい、五升から一斗までを、いくらかのむといい、一斗五升以上を大酒といっている。私も大食では、天どんなら八杯、カケそば二十五杯、酒八升五合、タバコ十箱というレコードを持っている。タバコをのむときは、鼻からのむ。鼻から吸うとニコチンが完全に胃や肺に吸収されて、口から吸うよりニコチンの毒が多いわけである。こうして平素からニコチンに対する抵抗力を養っておく。煙は全然出さないこともできるし、肺にでも胃にでも自由に入れておいて、出そうと思えば一度に出すことができる。

つぎに、精神を統一することによって、五官の感覚を鋭敏にする練習をする。練習を積むことによって、人間の聴覚は、平時の十四倍くらいまで鋭敏になるし、視覚は八倍、嗅覚、味覚はそれぞれ三倍になる。

忍者が目的の邸内に忍び入るさい、その家の壁に耳をあてて精神をこらし、あるいは聴き筒をあてると、広い家でも内部の話声がききとれる。心をしずめると、線香の灰のおちる音、雪のさやさやと降る音、針の落ちる音、蠅のとぶ音も聞える。鍛錬と同時にいろいろと方法もあるもので、たとえば闇に、地に伏して耳を澄ませば、誰にでも数丁先きの物音、人の近づく気配がわかるようなものである。

それから忍者には、毒殺の危険がつきまとうから、これを脱れるために、内臓を強健にし、意思をはげまして毒物にも打ち勝つという練習をしなければならない。また木石、土砂、悪虫、なんでも食ってやるという悪食を練習もする。

これは例えば、秘密文書を敵に奪われるおそれがあって、これを完全にいん滅する隙のないときは、文書とか小さな物品なら、腹中に嚥下してしまう必要もあるし、また敵陣に忍び込み、床下へ伏しているとした場合、何日間も身動きできない羽目になると、床の土にでも多少は栄養になる有機物も含まれているので、これを食って飢をしのがねばならぬこともある。このためには、なんでも食うという練習が、日ごろから必要なのである。

私もこの方面の練習を、だいぶやったもので、硫酸、硝酸、猫いらず、ヤモリ、ムカデ、蛇、芋虫など食ってなんともない。その他、ガラスのコップ、煉瓦、屋根瓦の類も食うことができる。富士登山の途中、五合目あたりの岩を食ったこともある。

私のコップを食った実例は、すでに八百七十九箇に及んでおり、煉瓦や屋根瓦も二、三十は食っている。コップはセンベイでも食うように簡単だが、煉瓦は一箇を食うのに四十分かかり、屋根瓦は二十五分から三十分はかかる。こうして、いざという時にそなえて、平生からさまざまな荒行をやり、不死身の体を作るのである。

血のにじむ体力練磨

なお忍術者は、敵にとらえられて拷問にかけられる場合も多いと考えなければならぬが、そんなことで音をあげてしまっては、忍者としての使命が果せるものではないから、大概のことには平気で耐えられるように、そのためには日頃からずいぶん思い切った練習をする。その一つとして私が

試みたのは、身体に針を刺すことで、これは畳針大のものを顔面から耳、舌、全身へ五百本も刺したレコードがある。とても痛くて苦しいことのようだが、思い切つてしまうと何でもなく平気でやれる。舌に針を刺したまま、人と話をするぐらいは造作ないことである。

また、五体を強健にする特殊の練磨方法としては、八貫匁（約三〇キログラム）から十五、六貫くらいの鋼鉄の分銅を振つて、自分の胸部を打つこともある。私は十八、九歳くらいの時から、これは二十年以上、毎日のように続けたものだ。

昔、回向院の角力取が、相手の猛烈な頭突きに耐える体力を養うために、米一俵を天井から吊つて、それを弟子に撞木のように振らせ、自分の胸を打たせたという話もあるが、こういうことは板の間の剣術や、タタミの上の柔術とはだいぶ訳がちがう。

一人前の忍術者となるためには、このような荒行に耐えていかねばならぬのだが、人間の体は鍛練によつて、不思議と思われるほどの力を発揮できるものなのである。よく火事のとき、二、三人がかりでも持ち出せないような重い物を、一人で持ち出し、後で自分ながらびつくりしたということが話のタネになるようなものである。

この不思議と思われる力は、火事のときしか出せないのかというと、そうではない。日頃の鍛練によつて、いつでも、どこでも発揮できるので、忍術は、この人間の体力の可能性を十分研究の上、常時、発揮できるように鍛練するに他ならないのである。

ついでながら、この人間の体力ということについて附言すれば、人間が目をつぶつた瞼の力は、

自分の体重の約三分の一の重さを吊り上げることができるものだし、歯の力は、健全な歯であれば、婦人は乳呑児を抱いて、天井の桟に食いついてぶら下がるだけの力を持つているものなのである。

忍者はまた、いわゆる武芸十八般、なんでもやらなくてはならぬ。私は祖父から、剣術、柔術、水泳、槍、薙刀、弓術、鎖鎌、鉄砲、あらゆる武芸をひと通り手ほどきを受けたが、後には（これについては項をあらためて述べるが）武器の持合わせがないときの用意として、南蛮殺倒流拳法、心月流手裏剣術、一伝流捕手術、大円流棒術などもやつた。

以上は、昔ながらの忍者としての、いわゆる必修課目だが、武器や科学の発達した今日では、近代戦に適応するためには、この課目もガラリと様相を一変させる必要があることはいうまでもない。

（鋼鉄の分銅をふって胸をきたえるすさまじい鍛磨＝著者）

私は昔からの伝統そのままを、ひと通り踏襲したわけだが、後には自分の発意から、拳銃の練習に力をそそぎ、早射ちには、かなりの自信を得るだけになつた。

このほか、変装術というのも大事な修業で、忍術ではこれを「七方出」といい、七種の変装を用いている。つまり山伏、出家、猿楽師、商人、放下師

虚無僧、絵師の七種の変装ができれば、まず間に合うとされた。
しかし、外形だけの変装では、すぐに化けの皮が剝げてしまうから、山伏なら加持祈禱の法はもとより、火渡り、探湯の術など、山伏として出来ることは、なんでも出来ねばならぬし、出家になればお経が読めねばならない、虚無僧としては尺八を吹く、放下師としては手品や奇術をやる。猿楽師としては唄や踊りができねばならぬし、絵師になれば絵師で、しろうと離れした立派な絵が書けなければならない。
また、武士が商人に変装しても、急に身のこなしや言葉づかいなど、商人になりきれるものではないが、忍術者は、いつでもこれを器用にやってのけられるくらい、日頃からの修業が必要なのである。
私も、この道は早くからいろいろやらされたもので、だいたい、いま用いている「西湖」という名からして、八歳のときからの絵かきとしての雅号なのである。踊りも稽古して、藤間流の名取りであるし、唄は、かつて大阪の中央放送局から、明治以来の流行歌を放送したこともあるくらいで、寄席芸人のやることくらいはなんでもできる。
また、トッサの場合の擬音に熟達することも大切なことで、私は新聞紙一枚あれば尺八代用に曲が吹けるし、口でヴァイオリン、マンドリンの真似もできる。
犬や猫の啼き声にも、上達しなければならない。寄席芸人には、犬、猫の啼き声を売りものにしているものがあるが、忍術者からみれば本当の啼き声になっていない。本当の啼き声は、その動物

の習性、慣性をハッキリ出さなければならないのである。
だいたい、猫の啼き声はたやすいものだが、犬は三十五音といって、三十五通りあり、白、黒、ブチ、赤などによって、啼き声もちがうとされ、どういう啼き声にも通じていなければならぬから、その種類を覚えるだけでも大変である。
それも昔は犬の種類も知れたものだったが、最近は西洋ダネがだいぶふえて、ますます種類も多くなったから、これをさらに、怪しい者をみつけた時の啼き声、老犬と仔犬の声を啼きわけるなど、いよいよ多岐多様となり、ひと通り研究するだけでも大仕事である。
甲賀流では、犬の擬音を利用する場合がなかなか多い。これは、人里にもっとも多く、いつ、どこにでもいるし、また敵の番犬なども必ずいるから、特に犬を研究して利用するのである。
火急の場合、犬の啼き声で近所の犬を呼びあつめ、その喧騒にまぎれて逸早く脱れようとする。追手は外へ出てみて、多くの犬に吠えられ、戸惑っている間に、こちらは易々と逃げ去るのである。犬の啼き声は私も相当に練習を積んで、犬と話ができるくらいの自信をもっている。
また忍者は、盆景の製作にも玄人の域に達していなければならない。これは遊芸ではなく、真剣な必要から起ったものだ。というのは、家康が天正十八年、江戸城に移ったとき、甲賀、伊賀の忍びの者を大勢ひきいて来たことは前にも話した通りだが、諸国の大名たちもおのおのこうした忍びの者を傭い入れたから、だんだん土着の忍術家が分散して、全国に拡まっていった。
当時、忍術家が一国一城を調査する報酬は米百俵といわれ、諸大名はさかんに敵城を調査させ、

見取図を作らせたものである。私のところにも、こうした見取図はたくさん集めてある。中には距離を歩数で調べてあるように、詳細をきわめたものもある。これを、殿様に報告するには、土図、つまり立体的模形を作つて献上したもので、盆景はどうしても忍者の必要欠くべからざる技術となつたのである。また、こうした見取図を作るには、目算が異常に発達していなければ、正確なものができない。昔の城は、決して直角には造つてなかつたからである。

動物を使う忍術

以上述べたことは、忍術修業の基本的な問題で、私は六歳から十三歳の秋口まで、祖父からいろいろときびしい練磨をさせられた。実際に卒業したものもあれば、ただ口伝だけをうけて、その後に修業したものもある。

こういう基本的修業に並行して、忍術の方法も授けられたが、忍耐力と勇気を養うという忍術修業の本質からみれば、方法などはむしろ枝葉に属するといつてもいいくらいなものである。

忍術者は我からすすんで、敵のまつただ中に飛び込むのであるから、むろん最初から命はないものと決めてかかるのであるが、両手をもがれ、片足を切られても、残る片足だけで帰つてきて、味方に敵情を伝えなければならぬ。ひと思いに死んでしまえなどという単純なことでは、忍術者にはなれない。その任や重し、で、戦場にあつて正面の敵と戦うにくらべれば、一人で一国の運命を担う忍術者のつとめというものは、絶大の価値があるのである。

指を一本振つて口で何かを唱えれば、身は化して大蛇となり、大ガマとなり、煙のごとく消えて見えなくなるのが忍術であるなどと、単純に考えるのは途方もないことだ。国家競い立つて互いに他の隙をねらう場合、まず敵国敵陣の様子を探知することが必要である。ゆえに国際間に諜報機関が重要視され、戦時でも平時でも、これにはもつとも精魂がつくされてきた。外国語ではこれをスパイという。わが国では忍術という。

なんでもあちら語ばやりの今日、スパイというと陰険な不頼漢のような意味にとられるが、これは敵側のスパイに対する感情であつて、スパイ自身は自国側からみれば忠勇の士である。自国人でありながら、敵のためにスパイ役を演じる者は、つまり敵のために味方の秘密を売るような者は、忠でも義でもなく、ただ金のために操られる売国奴で、もつとも、卑しむべきやつである。

自国のために、または主君のために敵の機密をさぐるのは、いわゆる軍事探偵であつて、智勇兼備の士でなければならぬ。三国志の赤壁の戦争には、蜀の軍師諸葛孔明が、みずから呉の国に入つて立派なスパイ役をつとめ、これによつて主君玄徳の危難を救つた。日露戦争における明石元治郎大佐のごときも、スパイ役の総元締をして、ロシア人を相手に縦横無尽の活躍をし、勝利への大きい機縁を作つている。

しからば実際の忍術は、どういう方法で行われるかということになるが、これについて詳しく書けば一冊の本にしなければならぬし、私は前に「忍術からスパイ戦」(東水社発行)という単行本を書いているから、これを見ていただきたい。そこで、ここにはごくあらましを述べることにしよう。

世間一般が期待する忍術というのは、呪文をとなえ九字を切れば、たちまちパッと姿が消えたり、大蛇や大ガマがノタリノタリとあらわれたり、あるいは目の前に洪水をあらわして人を溺らせたり、火焔を生じて人を驚ろかしたりすることであるが、「実際の忍術であのようなことが、はたして出来るのか」という好奇心は、誰しも持たれることであろう。

しかし、いくら忍術の名人でも、居ながらにして体を消したり、ネズミに姿を変えたり、大蛇になつたり、そんなことができないことは改めていうまでもない。

しかし、名人、達人の域に達すると、さながらパッと消え去つたように、身を隠したり、巧みに動物を使つたりするものだから、あたかもその動物に化し去つたように思われたかも知れぬ、ということは言える。

これを現実に目撃した人々が、話に輪をかけて後世に語り伝え、さらに戯作者や物語作家が尾ヒレをつけて、芝居にしたり講談にしたりして、忍術をマカ不思議の術であるかのように神秘化していつたものに他ならない。

動物を使つて人の目をくらまし、その隙に乗じて忍術の目的を達する方法は、忍者の常套手段で、仁木弾正が日ごろネズミを飼いならしておき、これを懐中し、殿中に放つて警衛者を騒がせ、その間に自分は同じ警備の服装をして殿中に入り、所期の目的を達したとすれば、これはネズミの術を使つたといつてさしつかえない。しかし、弾正はネズミの術に失敗し、さらに火遁の術を使つて脱れたといわれている。火遁の術は、主に火薬で、万一の用意につねに懐中し、敵の包囲におちいつ

たとき、これを爆発させ、その物凄い音響と火光に敵を煙りにまいて、身を脱れるのである。

鼠小僧次郎吉も、よくネズミの術を使つたといわれているが、これはネズミの鳴き声や、ガリガリと噛む音を利用して人の家に忍び入り、財宝をうばつたというのであるが、これを戯作者をして「ネズミと化した」と想像の筆を揮わせたのである。これを芝居がかりに想像化すると、鼠小僧がネズミと化して舞台を走りまわり、宝をくわえて逃げ去るという場面をあらわし、観客の好奇心を満足させることになる。

大蛇丸の蛇なども、文学者の空想から生まれたもので、忍術者はよく蛇を馴らして懐ろに入れ、これを放つて燈火を消し、または女中のたまりなどに放つて仰天させ、大騒ぎをしている隙に、難なく邸内にしのび込み、主人の首を掻くとか物を盗るとか、自分の目的を達したものであろう。

その他、霧隠才蔵が蠣灰をまいて敵の目をつぶしたとか、猿飛佐助が塀でも屋根でも飛び渡つたとかいわれているが、すべて物を利用し、精神を統一して、あるいは忍び込みに、あるいは遁走に、神変不思議と見せかける業をしたのが忍術者の特色で、ちよつと人間ばなれのした妙術と思われたのも当然である。

だから代々の忍術家は、知恵をしぼつていろいろと物理化学上の発明をした。毒ガス、毒薬、火薬、点火器、探照燈、妖怪変化に化けるための道具。それから忍び込みに用いる道具には縄梯子、操作の簡単な竹梯子、カギ縄、水を渡る道具、水泳具などから、七通りに使いわけのできる羽織、忍びの衣裳など、一つとして備わらぬものはない。

がんらい忍術は、隠身の術、遁身の術と見なされている。そこで天地人の三遁とか、木、火、土、金、水の五遁の術とか、いろいろ言い伝えられている。

しかし、土遁の術といっても、人間が土に化けるのではない。人間は死なないかぎり土にはなれない。つまり凹所や断崖に身を付けて、暗夜、追手の目をくらますのが土遁で、水中に潜り、頭に枯草などをのせて身を隠しているのが水遁、木の洞とか茂みに隠れるのが木遁というように考えると、この程度のことなら少し器用にやれば、誰にもできることなのである。

ただ忍術者は、そこに普通以上の工夫をこらして、常人の考え及ばぬところまで達したのである。天地人の三遁といっても、天遁は天象気候、人遁は人情風俗、地遁は地理物象に通じて、それを利用する意味と解釈されている。諸葛孔明が上は天文に通じ、下は地理に熟し、神機妙算、はかりごとを帷幄の裡にめぐらし、勝を千里の外に決したということなどは、やはり天地人の三遁に他ならないというべきである。

千里眼

九字の護身法を身につける

祖父は明治四十三年、私が十三歳のとき、九月に入ってまもなくのころ、数日、病床に臥しただけで、八十三年の生涯を終えた。

亡くなる前の日まで意識はハッキリしていて、私は枕頭に呼ばれ、甲賀流の伝書一巻を渡された。

「おそらくお前のあと、甲賀流の正統は絶えるだろうが……」

と、そのときの言葉と、祖父のやや淋しげな顔は、いまだに忘れることができない。

私はその後、祖父の期待を裏切らぬよう、忍術家としての自らの完成につとめ、私の後継者を求めることにも、今日まで、できるかぎり努めてきたが、どうやら祖父の予言は適中し、甲賀流忍術は私の第十四世で、終止符がうたれそうである。

死後の霊魂の探求から、神秘なものに憑かれていた当時の私にとって、祖父の死は大きなショッ

クだつて。ポッカリと口をあけた心のうつろに、しきりに恋しく思い出されるのは、幼年のころ山伏にあこがれて登つた秩父の山々であつた。あの当時、ただ驚異であつた山伏の生活が、現在、さぐり求めている神秘の世界の扉を開く、一つの鍵になるのではあるまいかという考えが、私の潜在意識の中にあつたせいかも知れない。

私は祖父の葬式があつた翌日、また家をとび出して、一路、三ツ峯の山中に急いだ。勉強机の上に、父に宛てて行先を示し、決して心配いらぬから、探しに来ないようにと書いた手紙をおいて来たから、このときは父も、私の出発を放置しておいた。

このときは約二カ月間、山伏の群のなかに起居し、朝から夜まで、山伏たちと同じ修業をしたが、特にこの時は九字の護身法と呪文について、大行者から直接に指導をうけた。

呪文を唱え印を結ぶのは、精神統一の方法として、古来の伝書にもしるされているが、密教に関係ぶかい山伏（修験者）は、これによつて法力が得られるものとし、この修業にはもつとも厳粛である。昔から真言宗では、身、口、意の三密を具足することを教えたが、この三つが完全に一致したときこそ、即身成仏ができるとされている。

忍道ではこの身を印、口を呪文、意を観念とし、印と呪文と観念が一致すれば、そこに人智を超越した力が、ただちに具顕されるといつており、真言秘密の法と共通したものを持つているから、私が大行者について九字の護身法を学んだことは、忍者としての能力を、さらに一歩前進させるに役立つたのだ。

もつとも、私が呪文について祖父から手ほどきをうけたのは八歳からで、特にこの方面に興味をもつていた私は、折にふれて広く研究を積んできたが、私が予言をしたり、透視をして千里眼といわれたり、新聞に神童とさわがれたりするようになつたのは、この年、山を降りてからのことで、この三ツ峯における二度目の修業は、私にとつて大へんなプラスだつたといえよう。

「神通力」の体験

山を下つたのは十一月の初めであるが、東京に戻つてから、私は、妙なことで騒がれる少年となつた。それは、不思議に私の予言が適中するようになつたからだ。

それまでも、そういう傾向は度々あつて、たとえば学校の行き帰り、友達と一緒に歩いているときなど、

「二、三日うちに、この家から葬式が出るぞ」

と、私が言えば、かならずその通りになつた。

全然、見ず知らずの家で、その中に病人がいるかどうかなどわからなくとも、その家の前を通りかかると、フッと私の脳裡に「葬式」ということが閃くのである。

だから、そう言うのだが、二、三日すると、はたしてその家の前には、「忌中」と書いた紙が貼り出されたスダレが軒の下に吊り下げられ、紋付の男たちが集まつて、まちがいなく葬式になるのだから、友達連中はびつくりした。

「どうしてわかるのか？」
と、訊かれても、返事のしようがない。
「なんとなくわかるのさ」
私は、そう答えるしかなかつた。
ところが、葬式を当てるだけでなく、こんどは火事を予言するようになつた。
「この家に火事があるぞ」
私が友達に言うと、一日か二日たつうちに、キット火事が出た。
葬式のことも火事のことも、友達の口から次々につたわつて、私は「不思議な少年」「怖るべき子供」として、うわさされるようになつた。
これが、ついに警察に知れた。
あるとき、父と懇意な巡査が遊びにきた時、
「坊ちやんは、葬式や火事があるのを当てるということですが、本当ですか」
と、私に訊いた。
「うん」
「竹早町に恐ろしい子供がいるつて、えらい評判でね。だんだん聞いてみると、藤田さんのところの坊ちやんだというので、びつくりしてしまつた」
その巡査は、父と母に大層な身ぶりで、面白げに語るのだつた。そして、私に、

「坊つちやん、葬式くらい当てるのはいいけれども、火事のことは言わん方がいいですよ。万が一にも疑われて、アリバイが確かでなかつたら、とんだ面倒なことになりますからね」
と、注意した。
そこで父からも言われたので、私もなるほどと思い、それから火事の予言は口外しないことにした。
学校の試験問題でも、私には何が出るかピンとわかつていたから、どんな学科でも満点だつた。友人に訊かれると、
「これとこれと、これが出る」
私が頭にピンと来たものを、指摘してやると、ちやんとそれが出た。理屈でもなんでもなく、考えている暇もないくらい、パッと頭にひらめく。それがピタッと適中するのである。しまいには先生の方からカブトをぬいで、
「藤田には試験をしても意味がない。お前は受けなくともよい。その代り、他の者によけいなことを言うな」
と、いわれた。
そのころ私には、多年の修業の功顕（こうけん）がようやくあらわれてきたというのだろう、霊力というか法力というか、自分ながら何とも表現しがたい力が、体いつぱいに充実してくるのを覚えた。
私がひと睨みすると、睨まれた相手は頭痛を起した。腹痛を起こして、糞をチビつてしまう者も

あつた。体がすくんでしまい、動けなくなる者もあつた。いわゆる不動金縛り(かなしばり)になるのだが、相手の体質や精神状態によつて、それぞれ異つた結果になつて現われるのは面白い。
私が「千里眼」とか「神童」とかいつて、新聞で騒がれるようになつたのはその頃だが、これには一つのチャンスとなる事件があつた。

殺人犯の予言適中

私の父は警察官であるから、警察関係の仲間がよく出入りしていたが、怪童ぶりは奇異を好む人人の話題には絶好のものだけに、次々と語り伝えられて、警察仲間では誰知らぬ者とてないくらいだつたが、あるとき一人の刑事がやつてきて、
「赤地ガ原にコロシ（殺人）があつたのだが、犯人のめぼしが皆目つかめない」
ということだつた。そして、父といろいろ話のすえ、
「お宅の坊ちやんは、葬式や火事が出るのを予言するということですが、当てるのは死人と火事だけですか」
「紛失物をたのまれて、当てたこともありますよ」
父がそういうと、それでは坊ちやんに一つおねがいしてみたいというので、私が相談を受けた。
赤地ガ原というのは春日町の近くで、今はびつしり家が建てこんでいるが、当時は淋しい原つぱで、そこに若い女が絞殺体となつて発見され、その身許もわからぬし、証拠物件としては、手拭が

一本あるきりで、犯人の見当もつかぬというのだつた。
私は刑事の話を聞いているうちに、
「殺されたのは、看護婦だ」
と、心に浮かぶまま答えた。
「どこの看護婦かね、どこか大きい病院の、それとも……」
「本郷元町二丁目の看護婦会の看護婦じやないか」
「手拭いについては、何かわかりませんか」
「白木屋の手拭です」
刑事は、手帖に書きつけながら、
「犯人は、すぐにつかまりますかな」
「三日の間なら、つかまるよ」
刑事は、だんだん慾ばつたことを訊く。
「犯人はいま、どこにいるか、それがわかるとありがたいんだが」
私は目をつぶつていると、頭の中に二つの街のすがたが出てきた。一つは池の端の七軒町で、それとダブるように、もう一つは神明町なのである。
刑事は、よろこんで飛び出していつたが、三日目はおろか、一と月たつても犯人はつかまらなかつた。

私も、このときは失敗だつたかと思いながらも、いつか気にしなくなり忘れていたが、二、三カ月たつて、そのときの刑事がお礼にやつてきた。
「いや、坊ちやんの神通力には、まつたく恐れ入りましたよ」
という前置きで話し出したのは、次のようなことである。
殺された女は、私の言つた通り、本郷元町二丁目にある看護婦会の二十二歳になる看護婦で、手拭も白木屋の出であつた。しかし、それだけでは手がかり不十分で、ちよつと迷宮入りの形になつたが、この日、偶然なことから犯人がわかつたという。
それは栃木県で何かの罪を犯した男がつかまつたが、これは警視庁の管轄に属する事件なので、犯人は警視庁に送られてきた。
いろいろ取調べているうち、この男が赤地ガ原の女殺しを自白した。この男は、女を殺してから高飛びの金を手に入れるため、神明町にいる姉のところと、自分が下宿していた七軒町の家とを、三日間、行つたり来たりしていて、四日目に栃木県へ飛んだという。
そこで、私が犯人の居所を、池の端七軒町か神明町といつたのもピッタリ当つたわけで、三日間のうちならつかまえられると答えたのも、正しかつたという結果になつた。そこで、びつくりして報告にきたというのであつた。
このことは、赤地ガ原の殺人犯検挙というので、大々的に新聞に書かれ、その裏話として「神童の予言適中云々」と、私のことまでひじようにセンセーショナルに書きたてたから、私は一躍、神

秘的な存在として、世間の注目をひくようになつた。

心霊学博士の研究材料となる

そういうことがあつてから、私のところへは、新聞で見たといつて、見知らぬ人が、毎日のように訪ねてくるようになつた。家出人を探してくれとか、失せ物が出るだろうかとか、まるで易者か何ぞのように思つてやつてくる。
私の父は、これを嫌つて、
「うちのせがれは易者じやないから」
と、みんなニベもなく追い帰していたが、ある日、人品のりつぱな老紳士が訪ねてきた。この人には父も鄭重だつた。
私は呼ばれて引きあわされたが、この人が東大（当時帝国大学）教授の福来友吉博士であつた。福来博士は催眠術の研究で学位をとつたという精神科学の先生だけに、私を研究材料にしたい希望で、訪ねて来られたという。
そのころ心霊学の研究がひじようにさかんだつたことは、前にもちよつと触れたが、これに関連して催眠術や千里眼というものが、世上のうわさを呼んで、大へんな人気だつた。
わが国における千里眼の元祖ともみられるのは、九州熊本の御船千鶴子という、二十三歳の婦人であつた。あるとき、彼女が義兄に当る人に催眠術をかけられて、

「サア、お前にはだんだんと不思議な力が乗り移ってくる。どんな物でもそれを透して見ることができる。ホラ、あすこの庭の木の下から三尺のところに、なにが入つているか、よく見てごらん」

と、いわれて、

「虫がいる」

と、答えた。

家人が幹の皮をはいでみると、はたして虫が出てきた。これが、彼女が不思議な霊能を得るに至つた端緒であるとのことで、それから公衆の面前で、箱の中の物を透視したり、遠く離れているものを言い当てたりするようになつた。

ついで現われたのが、明治四十三年の四月、四国丸亀の長尾という判事の夫人、郁子さんで、つぎに塩崎孝作、川崎進、藤田勇などという千里眼が続々とあらわれ、だいたい奇を好むのは人の常ではあるが、新聞があおり立てたことも手伝い、一時は日本中が千里眼の評判でもちきりの観があつた。

その中の藤田勇というのが、他ならぬこの私で、私は千里眼の術者としては第五番目に登場したわけだが、私だけは少年なので、「神童」とか「鬼童」とかいわれ、特にジャーナリズムには騒がれたようである。

私は福来博士に、学校の研究室や、本郷のお宅に連れていかれて、透視術の実験をしたが、私の経験では、透視術とか千里眼とかいつても、不透明体を透して、中の物が見えるというのではなく、

いわば「感じ」なのである。

たとえば、ボール箱の中になにかを入れて、これを透視するという場合、この箱を透明なものなりと考えて、じつとこれを凝視している。すると丸い黒い影が浮かんでくる。しかし、丸いだけでは何だかわからぬ。リンゴだろうかボールだろうか、どうも軟かいような感じだから、ボールだろうと思つて、

「ボールです」

というと、当つている。そういう場合が多かつた。

こういうふうに推定式でやつていれば、誰にでも出来ることと思うが、これも神経作用の異常に発達した有能者にして、始めて出来るのだという説と、脳細胞から一種の光を発し、その光によつて透視ができるのだという説があつた。これは南条文雄博士の説えたもので「霊光説」といつた。

インチキ透視術の末路

「千里眼」や「透視術」にたいしては、学界でもだいぶ問題になつたが、諸説紛々で、これという定説はないようだつた。私流の考えでは、物質はすべて密度の差こそあれ、分子によつて構成されている。その分子間には隙間がある、隙間があるから強い圧力を加えれば木でも鉄でも、その個所が凹こむわけだが、人間の精神能力というものは、前にも述べたように、鍛練によつて聴覚は平時の十四倍、視覚は八倍にもなるものであるから、異状に発達した者の念波は、この分子間の間隙を

通過して、映像をとらえることができるのではないかと思うが、どうだろう。

しかし、これには精神の統一、無念無想の境に入る修練が大切で、私は忍術を修業していたという、有利な条件に恵まれていたから、割合にたやすく、このような能力も身についたのかもしれぬのだ。

というと、最初から何の造作もなかつたように聞えるかも知れないが、どうして、なかなか人知れぬ苦労をしたものである。

実は福来博士の訪問を受ける半年ほど前から、私は御船千鶴子、長尾郁子などの新聞記事をみて、自分もできぬことはあるまい、ひとつ、やつてみようという気になつた。

隔離障碍物を透して、その中にある物を識別する法は、「透視術」などと騒がれるそのころに始まつたものではなく、三千年も昔から六神通のうちに数えられ、東洋にも西洋にもあつたことなのである。

私は母にたのんで、木の箱の中になにか私の知らない物を入れて密封してもらい、透視の実験にかかつた。

この木箱の前に静座瞑目し、雑念を払つて精神を統一する。しかし、中になにが入つているのだろう……という考えは、なかなか消えるものではない。そして自分の想像で、いろいろな物を心に描き出し、あれだろうか、これだろうかと迷うばかりである。

(これではいかん!)

と、気をとりなおせば、こんどは選定した一物のみがチラついて頭から離れない。ついに気がいらいらしてきて中止する。そのうちに(これか……)と思いついた物を母にいうと、

「ちがいます」

と、いわれてガッカリしてしまう。

また、やりなおす。そしてはまた、失敗をくりかえして、ついには根気もつきて止してしまう。

つぎの日もまた、同じことの繰返しであるが、前にも述べたように、私は一たん何事かを始めると、徹底的にやり通す性質で、しまいには相棒にされた母の方で、悲鳴をあげてしまつたほどである。こうして二た月、三月と続けているうちに、いつとはなしに、半年ほどの後にはボンヤリと中の物の形が透視できるような気がしてきたのである。

私が福来博士の実験材料にされたときは、私の透視術もだいぶ進歩していたころであつたが、今日のように「脳波」などという言葉の知られていない時代なので、南条博士のように霊の光であるとか、あるいは動物電気の作用であるとか、学界でも議論百出で、まことに賑やかなことであつた。

こういう世間の動きに乗じて、インチキ千里眼や、まやかしの透視術が、舞台や寄席に続々とあらわれるようになつた。鍵のかかる木の箱を、客席の中に持ちまわつて、中に品物を入れさせ、鍵をかけて舞台の上に持つて行く。

舞台には千里眼の先生がいて、木の箱はうやうやしく机の上におかれるが、実は箱の底と机に仕掛がしてあつて、鏡の反射を利用し、中の物がわかるようになつている。このタネや仕掛がだんだ

んにばれて来て、千里眼とか透視術は、実はインチキなものであるということになり、これまで煽りたてていた新聞までが、反動的に悪口をいうようになつた。

折も折、それは明治四十四年一月のことであるが、千里眼第一号の御船千鶴子夫人が、精神に異常をきたして毒薬自殺をとげ、翌年の二月には同じく第二号の長尾郁子夫人が病死し、第三号の塩崎孝作、川崎進が相ついで自殺するという事件が起つて、一時、天下の人気をあつめた千里眼は総倒れの形となり、生き残つたのは私一人ということになつてしまつた。

福来博士は、こういう人々に、いつも付き切りのような状態で研究をつづけて来たが、世間のごうごうたる非難に、とうとう明治四十五年に帝大教授を辞任し、研究も捨ててしまうという結果になつたのは、まことにお気の毒というほかない。

生霊の正体をみる

このような状態で、大正の初めには千里眼とか透視術に対する世間の関心は、パッタリさめてしまつたが、私の研究熱は、そういうことにかかわりなく、むしろますます燃えていつた。

これというのも、私は七歳くらいの時から山伏の群に入り、いろいろと不思議な生活を見てきた。たとえば武州三ツ峯の山頂から、天に向つて指をひろげて、出羽の羽黒山の山伏と通信をしたり、居ながらにして次に入山する者の数や日取りを予言したり、ふつうの常識では不可解なことが可能なのは、何か人間の霊力とか念力には、科学を超越した力があるものだということを、自分の眼を

通じて確信していたからである。

そのうちに私は易学の大家、高島嘉右衛門師の訪問をうけた。高島嘉右衛門は、私の透視術のうわさを聞いて興味をもち、わざわざ訪ねて来られたもので、私から透視についての体験をいろいろ訊ねると、

「易の方にも昔から射覆（せきふ）といつて、物を当てる方法がある。君になら出来ると思うから、一つ研究してみてはどうか」

と、いう。私は、お願いしますといつて、易学の手ほどきをうけることになつた。

高島嘉右衛門は、易学の大家として誰知らぬ者はないくらい有名だが、事業家としても大人物であつたことは、あまり知られていない。彼は今日の横浜市を発展させた大功労者で、横浜に高島台という地名があるのは、その屋敷あとでもあるが、横浜市の恩人としての名残りともいえる。私は彼が大正十年に亡くなるまで師事した。

また観相の方では赤竜子が有名だが、私は当時この赤竜子（初代）についても、看相術を学んだ。これは興味の上から、私の方から出かけていつたのである。

こうして居ながらにして事物の真相を看破する方法は、あらゆる研究と習練により、ぜんじ上達していつたわけだが、そのうち私は、遠隔の地にあるものを、ハッキリと映像だけでなく、音までも感じとれるようになつた。その一、二の例を話そう。

それは、後の話になるが、大正三年の春ごろ、私が十六歳のときだつた。父の友人の紹介で私を

訪ねてきた男があつた。失踪者の行方を透視してもらいたいという。そのころは福来博士も学界を退いておられたし、私も自分だけの研究としてやつていたものだから、何度もことわつたが、ぜひにと熱心にたのむので、余儀なくひきうけたものである。

私は静座、瞑目して、じつと観念をこらし、精神の統一を計つていつた。

そのうちに、初め、耳のあたりで聞えていた雑音が、だんだん聞えなくなつてきた。と、思うころ、こんどはゴウゴウと凄まじい音響と共に、なんだか停車場らしい場所が脳裡に浮かんできた。

やがて、そこに一人の女の姿が認められた。髪の毛の多い、眉毛の濃い、鼻が低くて口の大きい、白粉をつけているが、どう見ても美人と思えない女である。浅黄色の棒縞の着物に、茶と黒の腹合わせの帯をしめて、どことなく商売上がりと思われる小柄な女だつた。

その女は、古い信玄袋を手にして、紫色の風呂敷を小脇にかかえて、停車場前の旅館に入つて行くのであつた。

そこで私は、もとの精神状態にかえつたので、いま見た光景を話すと、その男は目を瞠つておどろき、

「その通りです。その女の姿や服装など、ピッタリです。して、その停車場というのは、どこでしよう」

と、いう。私も、そこまではわからなかつたから、もう一度瞑目し、精神を統一していくと、「千葉」の二字が、頭の中に浮かんできた。そこで、そのことを話すと、その男は喜び勇んで辞去して

いつた。さつそく千葉まで出かけて探すと、私の透視した通り、停車場前の旅館にその女が潜伏していたとのことで、あくる日、私の家へ礼を言いに来た。

この時の透視は、わずか五分くらいだつたが、体の疲労したことはたいへんなもので、こんなことはメッタに引受けられないと思つた。

ところが、私のうわさを伝え聞いて、家出人をさがしてくれとか、泥棒に入られたが、品物が出るだろうかとか、嫁とり、ムコとり、家相方角なんかまで相談に来る者が、ほとんど毎日のようであつた。

母は、ことわり役で、

「うちの伜は易者じゃありませんから」

と、追いかえすのに汗だくの有様だつた。

しかし、のつぴきならぬ知人の紹介とか、事情を訴えられて、どうにも断わるにしのびないというような人に対しては、たまに引きうけて透視術を行なつた。

そうこうしているうちに、大正五年の秋、私はひじょうにおもしろい透視の実験をした。

一日、私は友人の紹介で、五十年輩の品のよい婦人の訪問をうけた。その語るところによると、婦人には一人の娘があつて、去年の暮、ある人の世話で聟をとつた。ところが、それまで健康自慢だつた娘が、聟が来てからというものは、とかく健康がすぐれず、家の中がおもしろくいかないので、最近は憂鬱病にでもかかつたようで困つている。

医者に診てもらつたが、どこがわるいというでもなし、そこで、ある有名な易者にみてもらうと、おどろいたことに、「あなたの娘さんには、生霊がついている。これを除かんことには、病気は治らない」という。

そこで不動さまだの行者だの、いろいろの行者をたずねまわつて、生霊の正体というものをみてもらつたら、それは北の方の男の生霊だとか、南の方角にいる女の怨みだとかいつて、種々雑多の生霊があらわれ、そのため娘はかえつてなやまされて、いまにも気が変になりそうな有様だし、自分も生霊のことばかりを思い煩うようになり、毎日の家事も手につかない。

「こうして困りはてているところへ、ある人から、貴方が千葉の失踪者を透視されたという話をうかがいましたので、なんとか生霊の正体というものを見届けていただきたいものと、お願いに上がつたのです」

まことに突飛な話なので、私も驚いた。

「私もこれまでいろいろな透視はしたが、生霊の透視など、したことがない。それに第一、生霊の祟りなぞあるものかどうか、考えたこともないから」

私は、そう言つて断わつたが、婦人は、ただお願いしますの一点ばりで、涙すら浮かべている。

そこで、ともかく、その娘がなんのために憂鬱病にかかつたか、その理由を透視してみることにした。

最初、型のごとく静座瞑目して、観念を凝らし、除々に精神の統一を図つて行くと、しだいにあ

たりの雑音が消えて、しばらく恍惚とした状態が続いた。

と、思うと、突然私の脳裡に、三十前後の背の高い、頭は角刈りの粋がかつた男の姿が浮かんできた。ついでその男が、下町風の小ギレイな格子戸のはまつた家へ、はいつて行くところが映つた。格子戸の上の表札には、「木間」という二字が見えた。

この透視を終えて、もとの状態にかえるまでには、五分三十秒を要した。さつそく今見た話を婦人にすると、

「木間ですか」

「ええ、木間です」

私は紙に書いてみせると、婦人は、

「まア」

と、呆れ顔に、しばらく私の顔を見ていたが、やがて声をふるわせながら、

「それは木間でなくて、本間です。まア恐い恐い。では、やつぱりあの男の生霊だつたのです。それですつかりわかりました。その本間という男は、私の娘に最初結婚を申し込んだ男です。それが、少し都合があつて断わつたので、たいへん怨んでいるとの話を聞きました。……そうでしたか、あの男の生霊でしたか！」

婦人は、それとわかつて、長い間の謎がとけたように喜んで帰つていつた。

私が本間を木間と見たのは、透視力が足りなかつたのか、それとも表札の文字が薄れていたのか、

はっきりしない。

こういうことをやっているうちに、私は友人連中から生き神さまに祭り上げられる始末となったが、それは後の話で、項を改めて述べることにする。

アウンバラマの妖術

高利貸のアゴをはずす

話はだいぶ飛んだが、明治四十五年の四月、私は小日向台町小学校を卒業して、早稲田実業学校に入学した。この明治四十五年というのは、わが家にとって受難の年で、警視庁の大疑獄事件というのが起り、各署の署長以下、二十八人の警察官が一度に罷免になるという、警視庁始まって以来の大事件がもち上がった。

私の父もこれに連座して、免官の上、六カ月の禁錮を喰ったが、問題は贈収賄であった。父はいつも五人の諜者を使っていたが、これらはみな、強盗、窃盗、スリ、賭博などの前科者で、大がかりなこういう犯罪は、その社会で固めた慣習があるから、前科者を手なずけておくと、犯罪の検挙にも大へん都合がよかったのだ。

しかし、これにはまた、警官とボスとの間に不明朗なクサレ縁が出来たりして、こういう風習は

根本から一掃しようというところから、大疑獄事件となつたのであるが、私の父は他をかばつて、いさぎよく罪を買つて出たため、十二、三人の署長のクビがつながる結果となり、後々までもずいぶん感謝された。

それはいいが、家にたいして蓄えのないところへ、父が罪を着て収監されたため、収入の途は跡絶え、たちまち生活に窮してしまつた。

私は早実に入つたのはいいが、教科書が買えないので、友人から教科書を借り、ノートに全部写してしまつた。これがなかなか勉強になつた。同級生の中には、往年、剣劇の一座をひきいて華々しく活躍した明石潮君もいて、これにはだいぶ厄介をかけた方だ。金を出して買つた教科書は、数学の本一冊きりであつた。

警察の父の同僚は、この状態にひじように同情して、私たちに自活の道がたつよう、いろいろ面倒をみてくれた。

秋口になると大島から木炭を取寄せてくれた人があつて、これを売れば儲かるから売つて歩けといわれた。

他に方法がないから、私は仕方なしに木炭を車に積んで、売り歩いたが、これまではまつたくの坊ちゃん暮しでいたのだから、途中で友人などに出会うのが、自尊心をきずつけられるようで、とても堪えられなかつた。

私がまた、ひどく戦闘的になつたのは、このインフェリオリティ・コンプレッ

クス(自己劣等感)をカバーする意識が、いつの間にか働いていたものらしい。

第一に、担任の教師に反感をもつた。というのは、私がノートの代用教科書を使つているのを見て、

「藤田、お前、なぜ教科書を買わぬ?」

と、いう。私もヘソまがりだから、

「買う必要がありません」

と、いつた。

「なぜ必要ないのだ?」

「ちゃんと代用のがあります」

「それはノートじゃないか」

「ノートでも間にあいます」

「いかん。ちゃんと教科書を買え」

「買えるようになつたら買います」

その場は、それだけで終つたが、私はこの担任が癪でたまらなかつた。二、三日後、校庭でボール投げをしていると、この教師が廊下を通りかかつた。私はトッサにねらいをつけて、横ッ面に叩きつけた。

「貴様!」

教師は私を睨んだ。私も睨みかえした。それで一週間の停学をくつた。これが入学早々の出来事で、私は学校に来ると鬱憤ばらしに、気にくわぬ相手をみつけては上級生であろうがなかろうが、喧嘩を吹つかけた。まことに手に負えぬ暴力学生だつた。

その年の暮だつた。父は六カ月の刑を終えて、十月ごろ出所したが、なにを始めるにも差し当つての金が入用なので、恩給証書を担保にして、高利貸から金を借りた。暮の二十日ごろが約束の返済期限だつたとみえ、よく催促に来られて、父も弱つていたようだ。

大晦日の夕方、私が外から帰つてくると、父はまた高利貸にギュウギュウ脂をしぼられていた。剛腹で鬼刑事といわれた父であるが、金ができないばかりに、こんな下らぬ男に頭を下げているのかと思うと、私の胸は煮えくりかえつた。父をあわれと思うよりも、高利貸を憎らしいと思つた。

私は門口に待つていて、高利貸が出てきたところを、横ッ面に一撃くれて、アゴの骨を外してしまつた。

これはそのころから用い始めた、私の喧嘩の奥の手で、相手はたいていこれで真ッ青になつて、ペタンと座つてしまう。アゴを外されたままでは逃げ出しもならず、もと通りにしてもらいたい気持からしい。

あんぐり口をあけたまま、ダラダラよだれを流して、口が利けないのだから、こつちが一方的に言いたいことを言うには、これに限るのである。

「二度と来やがつたら、承知しないぞ」

頭を片手でおさえ、アゴの下からガクンと叩くと、顎骨のカスガイは元どおりおさまつてしまう。

高利貸は這うようにして、逃げ去つてしまつた。

彼は、どこかの交番に泣きつきに行つたようだが、警官はどこの交番でも私のことは知つているし、父に同情していたものだから、どこも取りあわず、あべこべにおどされたりして、その後は二度と現われなかつた。

恐るべき南蛮殺倒流

木炭の商いは、二カ月くらいやつて、やめてしまつた。父の知人が、私に絵や彫刻の技術があるのを知つて、木阪の下彫りや、写真を見て肖像画をかく仕事を紹介してくれたので、私はこれで学費や小遣いを稼ぎ出した。これは第一、私のプライドを傷けるようなものではないし、割のいい仕事だつたので、あんがい長続きした。

そのうちに父も、各警察署をまわつて捕縄術を教授するようになつたので、生活もどうやら前のように安定してきた。

十八歳で早実を卒えるまでは、前に述べたように「千里眼」や「透視術」で騒がれた時代だが、身体の発育期でもあつて、なにか常にメチャクチャにあばれたい衝動にかられていたらしい。

講道館には十三歳から通つて、十八歳のとき二段をもらつたが、実力は三段か四段あつたのではないかと思う。二段同士では負けたことがなかつたし、三段の者とやつても、私に勝てる者は、め

つたになかつた。
そのころは、二段、三段をもつていると、立派に町道場が出せた。また揚心流とか制剛流、関口流など、昔からの流派の看板をそのまま掲げて、町道場をひらいている者もあつて、東京中には、五、六十軒もあつたのではないかと思う。
私は学校で喧嘩をするだけでは飽きたらず、毎日、町道場をさがしては、道場あらしに出かけた。
これも最初から喧嘩を売るようなもので、道場をみつけると、武者窓から稽古ぶりを見ていて、
「なんだあの腰つきは、なつとらん」
とかなんとか、馬鹿にしたような笑い方をして、聞えよがしに悪口をいう。こちらは書生ッぽなので、たいがい腹を立て、「いつちよう揉んでやるから来い！」というようなことになる。
喧嘩腰だから、稽古もなかなか荒つぽい。これで私の実力は、ひじように鍛えられた。三軒に一軒くらいは、道場主に勝てないことがある。こんなときは、素直に、
「参りました！」
と、かぶとを脱いで、二、三日の間、稽古をつけてもらいに通う。入門というわけではないから、月謝はタダで修行することになる。
こんなことをして廻つているうち、下谷のある道場で、驚くべき老人に出会つた。
これは道場主の客分として滞在していた人で、私が二、三人の門弟を乱暴な技で投げとばし、つぎに道場主に一戦をいどむと、

「わしが相手をしよう」
薄よごれた紋付袴のまま、この老人が師範席から下りてきたのである。背は五尺そこそこの、瘦せひからびた、吹けば飛ぶような老人だつたから、なアに、大したことはあるまいと思つた。
しかし、向いあつてみると、眼光けいけい、白髯を胸まで垂らした能面のような顔には、何ともいえない威厳と余裕があつた。
（ひよつとしたら、こういうのが名人とか達人とかいわれる人じやないかな……）
と、ふと私の脳裡をかすめるものがあつた。
構えも、少し足をひらいて両手をだらりと下げているだけで、どういう柔術の構えでもない。
私は少し薄気味わるく思つたが、血気にはやつていたから、
（なに糞！）
と、ばかり、一撃に突きとばす勢いで、その両肩のあたりへ掴みかかつた。
すると、私の手が相手の体にさわらぬうちに、私の体は宙に一転して、息もつまるほど、畳の上に投げつけられた。どういう手で投げられたかもわからない。
私は、内心、舌をまいて驚きながらも、クルリと起き上がつて、すかさず飛びかかつていつた。が、また投げられた。
いろいろと技を変え、用心をしながら、（こんどこそは！）と思つて掛かつていくのだが、何回やつても同じことで、

「参りました」
と、私もとうとうおそれ入った。
「お前は力を頼みにしているからダメじや。力の勝負なら、体の大きい、力の強いのが勝つに決つとる。武術は力じやない、術じや。わかつたかな」
「はい、わかりました」
「しかし、お前は見どころがあるから、時どきここへやって来なさい」
老人は思いのほか親切で、労わるようなまなざしだつた。
私は、これこそわが師と仰ぐべき人物と思つたので、それから毎日のようにこの道場へ通つた。
これは橋本一夫斎という老人で、その特殊な体術は、南蛮殺倒流と称した。一夫斎の先師は薩摩の武士で、鳥羽伏見の戦争には、激戦の最中に刀が折れると、手刀で敵の頸骨をくだき、十数人をたおしたという豪傑であるが、一夫斎はそれにおとらぬ名人で、坐つたまま飛び上がつて天井を蹴り、クルリと一転して、またピタリと元のように坐るという妙技が得意だつた。
あるとき、花器に使うような、太い竹筒を持ち出して、
「藤田、これを手刀で割つてみい」
と、いう。私はカワラの十枚や十五枚なら何の苦もなく割れる自信があつたので、試みにやつてみたが、どうして竹というものは岩乗なもので、なかなか割れるものではない。
すると一夫斎は、まるでオカラでも潰すように、簡単にピシャリと挫いてしまつた。

これに驚いていると、径一寸（約三・三センチ）くらい、長さ三尺（約一メートル）ほどの青竹二十本あまりを一束にし、上下を三カ所くらいずつ、荒縄でギリギリ巻いたものを門弟に持ち出させて、
「この一本を摑み取つてみい」
と、いうのである。
私も、ずいぶん指先きは鍛えてあるつもりだが、これは指のかかる隙間もわずかであるし、従つて力が入らない。これを一本、摑み取るなどの芸当は、思いもよらなかつた。
ところが一夫斎は、
「やッ」
と、気合一声、ゴム製の棒でも引き抜くように、抜き取つてしまうのであつた。
手指、足指を強く鍛えるのは、南蛮殺倒流の特色で、流祖の第一世には、馬の尻の肉を摑み取つたという武勇伝がある。
一夫斎は一と月ほどすると、
「明日からまた、旅に出る。来年のいまごろまたやつてくるから、その頃また会おう」
といつて、あくる日から姿を消してしまつた。こうして一夫斎は、旅から旅を廻つていたようである。
つぎの年は六月から夏いつぱい居て、秋口になると東北の方へ出かけて行つた。
このようにして私は五年間師事して、南蛮殺倒流の皆伝をさずかり、第三世をゆるされることに

なつた。

一人三役の兼業

大正六年、十九歳のとき、私は早実を卒業して、早大の文科に入つた。私はそのころ、法律も学びたいと思つたので、早大文科に籍をおきながら、明大の法科にも入つた。

ところが、ちようどその年の春、教授連中に対する不満から、学生のストライキがあつて、私は体格も堂々としていたし、弁舌もたつというので、さつそくストライキ陣営の幹部級に迎えられた。

私は入学早々でストライキのいきさつもロクにわからず、ワアワアやつているうち、この問題は解決し、ストライキの首謀者たちは放校処分となつたが、私もその巻添えをくつて、入学して一週間目に学校を放り出されてしまつた。

そこで中央大学に入つた。第一学期は何事もなかつたが、九月の初めに臨時試験というのがあつた。そのころの臨時試験というのは、教師が問題を黒板に書いたものだが、どうも私のところからは、光が反射していて字が見えない。まわりの学生に聞いても、やはり見えないというので、

「先生、黒板の字が見えません」

というと、まだ若い教授で、

「見えんのは我輩のせいじやない」

と、まるで同情のない返事だつた。

私はグッと来て、教壇にかけ上がり、ボカンと軽く一発お見舞したつもりだつたが、若い教授はそのまま気絶してしまい、大騒ぎになつて、ここも退学を命ぜられてしまつた。同時にこのことから、早大に籍のあることも分つて、早大の方も放り出されてしまつた。

そこで私は、法律の方をあきらめて、日大の宗教科に入学した。日大の宗教科だけは無事に三年間つとめ上げて、二十二のとき卒業した。ここは仏教、神道、キリスト教と八宗兼学で、なんでもひと通りの知識は得られたから、私の将来にはいろいろとプラスになつた。

しかし、私は他の者のように、親のスネを噛つているノンキな大学生ではなかつた。

大学生となつた十九歳の年から、父の関係で二、三の警察署に柔道、剣道の教師として廻つていたが、そのうち報知新聞に、添田寿一氏の世話で、社会部記者になつた。

当時は朝刊だけだつたから、夜だけ働けばよかつた。朝は警察まわりの武道教師、昼は大学生、夜は新聞記者と、一人三役を兼ねていたから、毎日なかなか忙がしい。

新聞記者は、初めサツ(警察署)廻りを半年ほどやらされ、それから警視庁の記者クラブへ移つた。当時は日比谷記者クラブといつていたが、ここでも父の関係で仕事はしやすかつた。

新聞社も、「報知」のつぎには「日日」「国民」「大和」「中外」と、五社を廻つている。「日日」は小野賢一郎が社会部長のときで、主に宗教面を担当した。それも新興宗教とか「生き神様」の正体をあばき立てるようなことをジャンジャン書きまくつたもので、のちには自分が生き神様に祭り上げられるようなことになつてしまつた。

〝生き神様〟西田香峰

いまでもそうだが「生き神様」とか「教祖」といわれる元手いらずの商売は、消えては浮かび、浮かんでは消え、時の流れに生ずるアブクのようなものだが、おそらくわが国で大金を儲けた生き神様のハシリは、そのころ日本中に名をとどろかした西田香峰という男であろう。

西田は自ら梵名をアウンバラマと称し、雑司ガ谷に時の山県公の椿山荘よりも豪壮な邸宅を構えていた。つねに紫のコロモを着し、ダイヤモンドをちりばめた金の冠をいただき、われは如来、仏陀の化身なりと称して、傲然とかまえていた。

口から仏舎利を吐くというのが、アウンバラマ独得の秘術で、アメリカ帰りの法学博士というのが何人か、秘書のようになつてかしずき、十数人の書生が玄関にゴロゴロしていて、毎日来訪する多くの信者たちの応接に当つている。

仏陀の化身という評判がだんだん高くなつてくると、全国からいろいろな人間が集まつてくるが、一ばん信仰の厚い者と話していると、フッと口から仏舎利を吐いて、

「ホウ、お前には仏の加護があるぞ」

といつて、その仏舎利を、用意の桐箱に入れて与える。貰つた方は感激おくあたわずで、ありつたけの金をおサイ銭に奉つて、それを押しいただいて帰る。

彼はまた、五年先き、十年先きの予言をして、それが正確無比というので評判だつた。ことに名

士の死を予言することなどは、何月何日の何時何分まで当てるというので、これには誰もが恐れ入つていた。

ところが、彼はまことに朝寝坊で、朝早くから信者や新聞記者が詰めかけているのに、十時ごろやつと目をさまし、ノッソリと応接間に姿をあらわす。

応接間ではたいがいその日の新聞を話題にして、みんなが話し合つているわけだが、たとえば伊藤博文がハルピンで狙撃されたという記事が出ているとすれば、

「ははア、伊藤はやはりやられたか」

と、大きくうなずいて、書生に、

「おい、五年前の十月の日記帳を持つてこい」

と、命じる。

書生はしばらくして部厚な日記帳を、うやうやしく捧げてくると、アウンバラマはむぞうさにそれを受取つて、まず年号を調べる。

それには、ちやんと「明治三十八年日記」と表紙に書いてある。いちおうみなにそれを示して、十月の欄を繰ると、

「それ、この通り書いてある。……伊藤公の寿命は後五年ならん。すなわち明治四十二年十月二十六日午前九時、外地に於て兇変にたおるべし……どうじや。まさにこの通りであろうが！」

「ウヘッ！」

歴然としたためた文字を見せられて、来客や信者一同は、ただ唖然としてしまう。中にはナンマイダ、ナンマイダと、念仏を唱える者もあるという有様である。

彼の雷名は高野山にまで聞えて、賓客として迎えられた。大僧正や大和尚が、タタミのすり切れるほど坊主頭をすりつけて、大歓迎をした。アウンバラマは大へんなご満悦で、

「ホウ、お前の頭からも仏舎利が出るぞ。こちらからも出た」

と、しきりに仏舎利を取り出し、全山をあげて随喜渇仰せしめた。そして一と月以上も滞在して、めつたに開かれない宝物庫などに自由に出入りし、あべこべにおサイ銭をどつさり貰つて下山した。

私はある伝手からその仏舎利というのを見せてもらつたが、卵色で半透明の、ただの石ころにすぎない。仏舎利というからには、灰分、カルシューム性であるべきなのに、全然そんな気配もないのからして、まず、こいつはインチキだと睨んだ。

当時、私は「日日」の記者だつたが、そこで小野部長に、

「アウンバラマの正体を探るから、十日間の暇をいただきたい。あるいは三日か五日で片付くかも知れないが」

と、申し出た。

「君にならいい取組みだ。しつかりやつてきたまえ」

小野部長も、大いに激励してくれた。

妖術と忍術の闘い

私は幼少から十五年近く忍術の修行をしてきたが、これを一〇〇パーセントに活用するのは、まさにこの機会であると思つた。

時は大正八年、私が二十一歳の六月だつた。私はそのころ床屋というものに行かず、長髪を肩まで垂らしていたのを利用して、画家になりすまし、肖像画を描かしていただきたいという触れこみで、まず偵察を目的に乗込んだ。

十時ごろ起きるというので、九時に行つたが、すでに何台かの自家用人力車が、車寄せにならんでいる。応接間に通されると、二十人ほどの先客が、ズラリと居流れていた。

婦人客も二、三居たが、みな、身なりの立派な、相当年輩の人ばかりで、私のような書生ッぽは一人もいない。おたがいに顔なじみとみえて、「先生」が先日こういう予言をしたとか、こんなエライことをしたとか、絶讃のうわさばかりである。「先生」とは、むろんアウンバラマのことだ。

やがて十時を少しすぎるころ、燕尾服を着用した老紳士があらわれた。この男がアウンバラマかと思うと、そうではない。

「たいそうお待たせしました。ただいま、先生がお越しになります」

という前触れである。この老人は執事か秘書という者らしい。

まもなく二人の男を後ろに従え、悠々と巨軀をあらわしたのがアウンバラマこと西田香峰で、年

のころは五十あまり、ヤギ髯をたくわえ、金ぶち眼鏡をかけて、背は五尺四寸(約一・六四メートル)くらい、二十貫(約七五キログラム)はあろうという脂ぎつた男である。

来客一同は総起立、

「お早ようございます」

と、挨拶するのが、習慣のようである。

それからアウンバラマの処世雑談式の演説がある。結論は自己宣伝で、つぎに机上の新聞をひつくり返して、大見出しにパラパラと目を通す。

「ははア、ヴェルサイユでドイツとの講和条約が、やつと締結されたね。これは厄介だが一年はかからんと思つたよ」

と、のたまう。

第一次欧州大戦は、その前年の十一月十一日に終止符がうたれ、日英米仏などの連合国が、敗戦国ドイツを相手に講和条約がヴェルサイユで行われていた時である。

その日の新聞には、ようやく講和条約が成立したと、大見出しで出ていたのであつた。

「おい、山田、一昨年の日記を持つて来い」

アウンバラマが命じた。

「ははア、これだな……」

と、思つて見ていると、うわさのように書生が日記帖を三宝に乗せて、目八分に捧げてきた。

アウンバラマは悠然とこれを取り上げて、頁をめくつていたが、

「おッ、これじや、講和の調印成立は二年後の今月今日なるべしと、六月二十八日のところに書いてある」

トンと指で叩いて、得意気に周囲の客に示すのだつた。

「ほう、なるほど」

「いや、恐れ入りました」

などとみな、感服しているので、私も窺いてみると、「六月二十八日、晴、午後曇」と第一行にあつて、「欧洲戦線ますます激烈となる。本日の来訪者」誰々などとあつて、その日の行動が認めてあり、最後の方に「但し明年はこの大戦も終結となり、講和会議となるも講和の調印成立は二年後の今月今日なるべし」と、黒インキで、いかにもハッキリ書いてある。一日分を二頁ずつ使用してあるとみえて、なお五、六行の余白があつた。

私は次の頁を繰ろうとすると、

「これこれ、手を触れてはいかん！」

と、叱られた。

それからアウンバラマは仏間に引込み、一人々々個人面接をして、願いごとやら相談ごとに応じ、ご祈禱をしてやる。一人について二分か三分だが、これでみな、ありがたがつて祈禱料の紙包みを置いていくのだつた。

みなが帰つてしまうと、彼は私を顧みて、
「君はなんだつたかね」
「先生の肖像画を描かしてもらいたいので上がりました」
「そうか、じやア描いてもらおうか」
というから、私はさつそく大判のスケッチブックを取り出した。
「何分かかるか」
「五、六分です」
「五分は長い。三分でやつてくれ」
あとは、三分間内の問答である。
「君は本当の絵かきかね」
「絵かきに本当もウソもないでしよう」
「いや、絵を本業としているかどうかというわけだ」
「それは出来上つた絵を見たらわかるはずです」
「日日新聞の小野君は元気かね」
これには私も虚を衝かれた形だつた。しかし、そしらぬ顔で、
「元気ですよ」
「やつはわしをなんと言つている?」

「くわせ者じやないかと言つてますよ」
「ハハハハ、わしに会わんうちは、誰もがそう言つちよる。デスクにばかり噛りついとらんで、たまには出てくるように言つときたまえ。おお、もう三分じや。出来たか」
だいたいのデッサンが終つたのを見せると、
「うむ、こりや本業ハダシじや。わしは出かける約束があるから失敬するよ」
サッと席を立つて、行つてしまつた。
完全な敗北だつた。入れちがいに燕尾服の執事が、「御画料」と表書きした紙包みを、三宝にのせて入つてきた。
受取るのも癪だつたが、画家のふれこみで来たのだから、取らぬわけにいかない。懐中にねじこんで邸をとび出したが、どうにも残念でならない。
「御画料」の包みの中には、三十円はいつていた。いまなら一万円くらいの額である。無名画家のあんなスケッチに、これは大金に過ぎる。いよいよ、私の正体を見抜いての上でのことにちがいない……。
（どうしてわかつたか？）
私は敗北感に打ちのめされながら、重い足をひきずつてくるうち、ハッと思い出したことがある。それは、私がウカツにも、あの邸の近くまで、新聞社の自動車を乗りつけたことだつた。車には赤地に白いスジの入つた、一目で「日日」の車とわかる小旗が立つていた！　あれを書生が見ていた

にちがいない。

（ちくしよう、残念々々！）

もう表向きでは行けないから、いよいよ本格的の忍術でいくより外なくなつた。

天井裏からさぐる

私はそれから、昼夜の区別なく、西田の邸に探りを入れた。昼間は出入りの御用聞きに小金を握らせて、邸内の様子を聞き出し、夜になると裏塀をとび越えて、家の構造や間取りなどを調べた。大きな洋犬が二匹、庭の中に放し飼いになつていたが、こんなのを手なづけるのは造作なかつた。三日間の調べでわかつたのは、書生が十三人、女中が五人、妻君だかメカケだか正体の知れない女が二人、事務をとる年輩の男が二人、犬が二匹に猫が一匹。

家の造りは正面玄関、内玄関とあつて、大小しめて十九室、アウンバラマの居室は一ばん奥の裏庭に面した十二畳で、現役の大臣もこれだけの邸は構えていまいと思われるゼイタクなものである。

アウンバラマは十時ごろ起き出すと、来訪者と面接して、一人々々祈禱をして帰し、午後は秘書一人、書生二人の供をつれて外出する。行く先は実業家や政治家で、つまり、午前中宅診、午後往診というわけだ。帰つてくるのはたいてい夜の十時か十一時、それから一時間か二時間、居室にこもつて、十二時前後には寝る……という日常らしい。

私は三日目の夜、簡単な忍具を身につけて、十時ごろ邸の天井裏に忍びこんだ。古い建て方なの

で、だいたい、天井から天井へ渡れるようになつている。

私はアウンバラマの居室の天井裏に達し、キリでのぞき穴をこしらえた。となりは六畳の書斎になつていて、つぎが仏間である。この両室とも、のぞけるようにしておいた。

やがて十一時ごろ、アウンバラマが帰つてきた。

邸中は騒がしくなり、主人公の入浴、それから、遅い夕食になる。中年増の女二人を酒の相手に、二の膳つきの豪奢な食事で、みだらな冗談をとばしているところは、神さまがまつたくの俗人に還つた姿である。

それから小一時間たつて寝床に入つたが、いささか驚いたことには、酒の相手をしていた女二人が、最初、いつしよの床に寝ているから、アウンバラマの床は、他にあるのかと思うと、そうではない。女二人が寝ている間に、もぐり込んでいつたのである。これから先の痴態、狂態は、本書が発禁になるおそれがあるから差し控えるが、これが毎夜のことだとすれば、これだけは常人以上の精力ぶりといえるだろう。

私は皆の寝静まるのを待つて、天井から廊下にとび降り、客間、仏間、書斎としらべあるいた。昔は忍びの雁洞を用いたが、いまは懐中電燈というものがあるから便利である。

八畳の書斎――。

ここが秘密の根源らしく、私には、そんな臭いがした。隣室にアウンバラマの高いびきを聞きながら、私は廊下の障子をあけて、そつと忍び込んだ。

左右が書棚になつていて、正面に大机がある。私はまず問題の日記帖をさがした。これは机の近くの中段の棚にあつた。背中に「明治二十五年」というのから、年号順にズラリと三十冊ほどならんでいた。いちばん新しいのは「大正七年」で、現在使用している「大正八年」は机上にあつた。

私はこれを開いて、第一頁の一月一日から目を通してみたが、不思議なことに六月のこの日まで、予言らしいものは一行も書いてなかつた。五年前の「大正二年」、十年前の「明治四十三年」というところの分には、毎日のように色々と書きつけてある。

机の横には三尺四方くらいの金庫があつた。私はこれを五分間で開けてしまつた。私には、鍵などを必要としない。中には百円札、十円札、五円札、一円札などで、ざつと三十万円くらいあつた。たいへんな財産である。

当時は「一万円貯金法」とか「一万円ためるまで」とかいう本が出ていたくらいで、一生かかつて一万円ためたら、人生、成功の部類とされていたが、このアウンバラマは大実業家くらいの産をなしていたわけである。

中仕切の上段に、きれいな小箱があつたので、出して開けてみると、黄色い半透明の小石がたくさん入つていた。これが商売のタネであるところの「仏舎利」であろう。「仏舎利」のストックというわけである。

私は泥棒ではないから、調べるだけ調べると、札束も「仏舎利」も、もと通りにおさめて、金庫も前のように閉じておいた。

夏の夜は明けやすい。私は、そろそろ退陣することにした。

外に出ると、もう、あたりは仄の明るくなつていた。私は塀をとびこしてから、黒の覆面や履物を普通のものと取りかえた。

たまに牛乳配達の車や、新聞配達が、人気のない静かな朝の通りを威勢よく走つているばかりである。私はしばらく行つて、廊下に降りる天井板を、開けたままにしてきたことを思い出した。

戻るときにまた、利用するつもりだつたのでそのままにしておいたのだが、帰りは雨戸を開けて出てしまつたからである。忍び込みは当分の間、続けなければならぬが、天井をあのままにしておいては、どうもまずい。

私は、出来るならば元通りにしておきたいと思い、また引き返して行つた。

塀をおどり越えて、築山の裏に出たとき、私は意外なものを発見して、ハッと息をのんだ。

インチキ妖術スッパ抜き

それは朝寝坊として有名なアウンバラマが、寝巻き姿で庭を歩いていたからだつた。

築山のかげに身をひそめて見ていると、彼は、朝の散歩というよりも、なにか一つの目的をもつた足どりで、庭をよこぎり、門の方へ進んで行つた。

そして、新聞受に突込んである数種の新聞を抜きとると、サッサともと来た方へ引返していくのだつた。

裏庭に面した彼の居室の雨戸が一枚あいていて、彼はそこから上がると、中からふたたび雨戸を閉めてしまつた。これは調べる必要があると思つた私は、また、忍びの用意をととのえて、先に出てきた雨戸のくぐりから、邸の中へ忍び込んだ。そして、廊下の突き当りの天井……そこの板を一枚、先刻開け放しにしておいたのだが、そこから天井へ這い込み、アウンバラマの居室の上へ忍び寄つた。

天井を歩くにも、十五貫なり十八貫なりの体重がかかるのだから、普通に歩いたのでは、どうしてもミシリ、ミシリと音がする道理である。そこを、音を立てぬように歩くのが忍術である。これを稽古するには、唐紙の上に紙を張り、そこに水をまいて、紙が破れないように歩く。これも練習を積み重ねることによつて、まつたく指あともつかぬように歩けるものなのである。別の言い方をすれば、体重をゼロにして歩く練習で、これを卒業すれば、ミシリともコトリとも音を立てないで、天井が歩けるわけだ。

さて、用意ののぞき穴から下をのぞいてみると、巾広の大きな蒲団には、例の二人の女が寝ているだけで、アウンバラマの姿はなかつた。つぎに書斎の方をのぞいてみると、「先生」一生懸命になつて新聞を読んでいる。

五種類くらいの新聞を、たんねんに読み終ると、しばらく机の上に両肱をついて考えにふけつている様子だつたが、やがて、書棚に手をのばして、一冊の本を抜き出した。

それは「日記帖」であつた。私の見ておいた見当では「明治四十年」ごろのものらしかつた。そ

れを机上にひろげると、中ほどの頁をさがし出してペンを執り、余白のところへ何やら五、六行、書き足した。そして、インクの乾くのを待つて、日記帖を元の位置に戻した。

これで、アウンバラマの予言の正体はわかつた。なんのことはない、その日の新聞をみて、五年前、十年前の日記帖に書き足していたわけである。黒インキを用いていたのも、これならば、ちよつといま書いたのも、五年前に書いたのも、区別がつきがたいからだ。

アウンバラマは読み終えた新聞を、元の通りにたたみなおすと、それを持つて席を立つて行つた。どこへ行くのだろう。音の気配では、雨戸をあけて、また庭へ降りていつたようである。時間は、まだ六時前であつた。

五分も経たぬうちに、彼は居室に戻つてきた。眠りこけている女たちの寝床に潜りこむと、ふたたび痴態を演ずること前夜の通りである。

主人公の朝寝癖が公表されているせいか、六時をすぎても、書生、女中どもは、一人も起きてくる気配はなかつた。

私はまた、悠々と天井裏を渡つて外に出た。

念のために門の新聞受を見ると、五種類の新聞は、さいぜん配達が入れた通りの形で置いてあつた。

私はこの日、思わぬ収穫を得たが、なおも確証をつかむため、三日間忍びこんで、アウンバラマの巧妙なカラクリを、すつかり見届けてしまつた。

彼の予言というのは、その日の新聞をみて、何年か前の日記帖に書きつけ、あたかも何年か前に見抜いていたごとく、人々をたぶらかしていたものなのである。

また、側面からも彼の経歴などを洗つたが、生まれつき手先きが器用で、若いころはドサ廻りの奇術師の一行に加わつたこともあるというくらいだつた。仏舎利を吐くというのは、この奇術の応用で、自分の口から出したり、相手の頭や、体から出したように手品をつかつていたのだ。もちろん、この小石が仏舎利とは、よくも吹いたもので、実は当時の日魯漁業の社長が、北海道のみやげといつて、稚内あたりに産する瑪瑙石を送られたものを利用していたのである。

これを、相手が金持ちらしいと睨むと、

「あなたは信仰心があついから、仏の加護がある」

というようなセリフで一つ与え、小石ひとつで莫大なおサイ銭を物にしていたのだ。

また彼は、客と対談中に、とつぜん手をあげて目をつぶる。相手が面喰らつて、キョトンとしていると、

「ただいま、釈尊から、尊いインスピレーションがありましたから、ちよつと失礼する」

サッと座を立つて、書斎に引込んでしまう。そして二、三分も経つと、墨痕も生々しい文字を、半折の紙いつぱいくらいに書いて持参する。

たいていの客にはなんの文句だかわからぬが、よほど学問のある者には、これが深遠な仏典の一節であることがわかつて、

「こういうむずかしいお経を、たちどころに書いてくるとは大したものだ……」

と、驚嘆する。

これで相当な学者や、一山の高僧といわれた連中も、煙に巻かれたものだが、それも彼の演技の一つで、前もつて八、九分通り書いておいたものに、三字か五字、墨をなぞり、いま書いたばかりのように見せかけていたものだつた。

私はこれを五日間の連載でジャンジャン書きまくり、アウンバラマの正体をすつぱ抜いた。これには彼も堪まりかねて、夜逃げを計画していたところを御用になり、詐欺罪でぶちこまれることになつたのである。

喧嘩八段

ボスを叩く

新聞記者時代は、私が喧嘩に強いということと、警察に顔がきくということで、東京中の不良……といつても右翼がかつた暴力団であるが、そういう連中の、殆んどといつてもいいくらいの者から「先生、先生」と立てられていた。

不良にいじめられている人は「藤田さん、なんとか一つお願いします」と、たのんでくる。「よし来た」で、私が一と言、口をきくと、「藤田先生からのお話なら」といつて、すぐに問題は解決するのだつた。

それはいいが、不良の方で警察に挙げられたりすると、

「先生、うちの野郎がパクられましたが、先生のお顔で一つ……」

などと頼みに来られるのには弱つた。

しかし、広い東京なので、新顔の暴力団とか、流れ者の不良など、私を知らない者もだいぶ居るわけだ。

あるとき知人の紹介で、Kという、さる名門の邸の家族が訪ねてきて、

「お邸の学習院に行つている坊ちやんが、些細なことから暴力団にいんねんをつけられ、まつわりつかれて困つております。先生のお力で何とかお助け頂きたいもので……」

と、菓子折などを持つてきた。

相手を訊くと、麻布六本木の疋田仙八とかいう、あまり聞いたこともない男である。私はさつそく引受けて、出かけて行つた。

途中から麻布署に電話をかけて、疋田仙八とはどういう男かと訊いてみると、

「半年ほど前から五、六人の書生みたいなのを使つて、三百代言のようなことをしているが、オドシ専門の暴力団で、巧みに法網を潜つているから警察としても手を焼いている。なにかあつたのですか」

というから、

「そのオドシにかかつて迷惑をしているんだが、助けを求めにきたので、これから出かけるんだが、三、四十分もしたら、引つくくりにきてもらいたい」

と、連絡しておいた。

疋田仙八の家は、麻布の高台にある古めかしい洋館だつた。

「K氏のことで話があつて来た」
というと、応接間に通された。
人相のよくない男が出てきて、私をウサン臭げに睨みながら、
「いくら持つてきたか」
と、ドスの利いた口調である。
「金なんぞ持つてこない」
「話をつけにきたんじやないのか」
「話をつけにきたんだ、こんごいつさい、無条件でK氏から手を引いてくれ」
「なにをッ、貴様はいつたいKのなんだッ」
「おれは藤田勇だ、お前が疋田仙八か」
「待つとれ！」
その男は、恐ろしい顔をして室を出て行つた。
まもなく体の大きな、頬に古傷のあるのが売物らしい、いちだんと人相のわるい男が入つてきて、ドアを後ろ手で締めながら、
「野郎、きいたふうなセリフをぬかしたそうだな」
と、いうより早く、私の左の頬に平手打ちをくわしてきた。
こんなのを避けるのは造作もないことだが、私は暴力の場合、こちらから先に手を出さないこと

にしていたので、だまつて打たしておいた。
すると、いい気になつて、こんどは右から張つてきた。それも殴らせておいた。
「やい、お前みたいな若造の出る幕じやアないんだ。トットと失せやがれ」
こんどは拳骨を固めて振りおろしてきたから、サッと除けて、こつちから横面の顎骨のところに一撃をくれた。アゴ外しの一撃である。
アゴを外されると、男はびつくりして立ちすくんでしまつた。そこへ、ご丁寧に水月の当て身を一発くれてやつたから、ウーンと体をエビのように折つて倒れてしまつた。
この物音に、子分どもが短刀やバットを持つて、ドッと乱入してきた。どんなに多勢でも、私は数では驚ろかない。多勢がいつしよでは、互いに邪魔になるから、決して打てないものなのである。
まして、こちらが地物を利用して身構えたら、せいぜい二人くらいしか、一度には掛かつてこられない。それを一人々々、片付けていけばよいのである。
私はそのころ「柔道五段、喧嘩八段」といわれたくらい喧嘩は名人芸で、相手を倒すことにかけては神速だつた。この時も、親分をまぜて六人をノシてしまうのに、ものの五分とはかからなかつたようである。
そこへ顔見知りの巡査部長が、四、五人の部下をつれてやつてきた。全部、アゴの骨を外した上、気絶させてあるものだから、
「これはいつたい、どうしたんですか」

「K氏のことで話があつて来た」
というと、応接間に通された。
人相のよくない男が出てきて、私をウサン臭げに睨みながら、
「いくら持つてきたか」
と、ドスの利いた口調である。
「金なんぞ持つてこない」
「話をつけにきたんじやないのか」
「話をつけにきたんだ、こんごいつさい、無条件でK氏から手を引いてくれ」
「なにをッ、貴様はいつたいKのなんだッ」
「おれは藤田勇だ、お前が疋田仙八か」
「待つとれ！」
その男は、恐ろしい顔をして室を出て行つた。
まもなく体の大きな、頬に古傷のあるのが売物らしい、いちだんと人相のわるい男が入つてきて、ドアを後ろ手で締めながら、
「野郎、きいたふうなセリフをぬかしたそうだな」
と、いうより早く、私の左の頬に平手打ちをくわしてきた。
こんなのを避けるのは造作もないことだが、私は暴力の場合、こちらから先に手を出さないこと

にしていたので、だまつて打たしておいた。
すると、いい気になつて、こんどは右から張つてきた。それも殴らせておいた。
「やい、お前みたいな若造の出る幕じやアないんだ。トットと失せやがれ」
こんどは拳骨を固めて振りおろしてきたから、サッと除けて、こつちから横面の顎骨のところに一撃をくれた。アゴ外しの一撃である。
アゴを外されると、男はびつくりして立ちすくんでしまつた。そこへ、ご丁寧に水月の当て身を一発くれてやつたから、ウーンと体をエビのように折つて倒れてしまつた。
この物音に、子分どもが短刀やバットを持つて、ドッと乱入してきた。どんなに多勢でも、私は数では驚ろかない。多勢がいつしよでは、互いに邪魔になるから、決して打てないものなのである。まして、こちらが地物を利用して身構えたら、せいぜい二人くらいしか、一度には掛かつてこられない。それを一人々々、片付けていけばよいのである。
私はそのころ「柔道五段、喧嘩八段」といわれたくらい喧嘩は名人芸で、相手を倒すことにかけては神速だつた。この時も、親分をまぜて六人をノシてしまうのに、ものの五分とはかからなかつたようである。
そこへ顔見知りの巡査部長が、四、五人の部下をつれてやつてきた。全部、アゴの骨を外した上、気絶させてあるものだから、
「これはいつたい、どうしたんですか」

と、部長もあきれ返つていた。
巡査がバケツに水を汲んできて、一人々々にぶつかけると、みんな息を吹きかえしてきたが、アゴが外れているので、ただ「アウ、アウ」というばかりである。
部長は、私が先に二つも殴られているという話をきいて、
「先生は正当防衛ですよ、なにしろ奴らは兇器を持つていますからね、現行犯の暴行罪でしょつぴいていきましょう」
それにしてもアゴが外れていては困るというのを、すぐに入れてやるのも効果が薄いと思つたので、
「警察に行つてから、入れてやりましょう」
ひどいことになつたもので、疋田仙八ほか六人の連中は、白昼、口をあけつぱなしにして街頭をひいていかれた。

キモをつぶした博徒の親分

この疋田仙八が私に怨みを抱いて、山谷(さんや)方面に大きな縄張りを持つている博徒の親分、「鈴源」こと鈴木源造のところに泣きついた。この「鈴源」というのは、私を昔から先生といつて立てている「山辰」こと山田辰三郎と、かねていがみ合つていた。
この「山辰」が、よく私を引き合いに出すものだから「鈴源」の方では私を敵視していたところ

へ、疋田仙八に泣きつかれて、「よしきた」と大きいところを見せ、
「なアに、藤田勇なんぞという若造、すぐにも腕の一本もへし折つて、ひどい目に会わしてやる」
と、大見得を切つたという。
この噂を「山辰」がきいて、私の耳に入れたから、私もムッとなつた。そんな噂くらい、聞き流しにしてもよかつたようなものだが、毎日、喧嘩の一つ二つしないことには、夜、安眠できないくらい血気にはやつていた私のことだから、むしろ私は勇躍して出かけて行つたようなものである。
火鉢の出ている頃だから、なんでも寒い時だつた。「鈴源」の家に行くと、広い土間には、子分どものものらしい下駄が、所狭いまでに乱雑に脱ぎすててあつた。
奥へ通されて、鈴源と向いあつた。
「話に聞くとお前さんは、おれの腕の一本くらい、へし折つてくれると言つたそうだが、ひとつ折つてもらおうじやないか」
私は彼の鼻先きに、グッと右腕を突き出した。むろん折らせる気はない。向うが手を出したら、一挙に叩き伏せる構えだつた。
鈴源も、私の気魄を感じとつたものらしく、急に笑顔をつくつて、
「藤田さん、それはなにかの間違いでしよう。私はそんなことを言つた覚えはない。誤解しないで下さい」
「じやア訊くが、疋田仙八に泣きつかれて、おれに復讐するのを引受けたという噂は、どうだ」

「いや、それもウソです。疋田みたいな、あんなゴミみたいな野郎、わしが相手にするもんですか」
子分どもは二十何人かいたようだが、私の物凄い見幕に、みんな総立ちになつて、腕まくりをしたり、拳骨を固めたりして、廊下のところに人垣をきずいていた。
（親分に無礼をしたら、ただでは帰さんぞ）
という、一種のデモである。
「よし、それなら誤解として、聞き流すことにしよう。それはそれとして、お前のところは客人が来ても、茶や菓子は出さんのか」
火鉢にはカンカン火が起つて、鉄瓶がグラグラ煮立つていた。
私は火箸で真赤な火を挟み上げると、これを口に放りこんで、二つ三つ、立て続けにガリガリと食つてしまつた。そして、こんどは鉄瓶の煮立つた湯を、口のみにガブガブと呑んでみせた。
これには鈴源はじめ子分一同、さすがにドギモを抜かれたとみえ、互いに顔を見合わせてキョトンとしていたようである。
「いや、これは粗相をして、失礼しました」
鈴源は、やはり親分だけに、ハッと我に返つたように、ていねいに頭を下げたが、この勝負、完全に私の勝である。
「これからもあるから、気をつけろ」
私は捨ゼリフを残して、立ち上がつた。子分どもがサッと左右に分れて、道をつくつた。しかし、

燃えるような敵意を含んでいることは、ピンピンと私の胸に響いて、よくわかる。
みんな私の後ろから、ゾロゾロとついて来たが、決して儀礼的な見送りでなく、隙があつたら打つてかかろうとしている魂胆であることは、見え透いていた。
土間を見ると、私の下駄が揃えてないだけでなく、きたない下駄が半分乗つかつている。私はまた、癪にさわつて、子分たちを睨みつけた。
「やい、やッこ！　客の下駄くらいは、ちやんとそろえておくもんだ。なんだ、このきたない下駄は！」
私は、私の下駄の上に乗つかつていた駒下駄をとり上げると、まん中を拳骨でポカッと叩いて、まつ二つに割つてみせた。
「文句があつたら、いつでもこい。お前たちの頭もこの通りにしてやるから」
暴には暴、力には力をもつて報いるほかないのが、この社会の鉄則である。

自分の太股の肉を喰う

私が千束町に来かかると、後から誰かに跟けられている感じがしていたが、とうとうそこで呼びとめられた。
「旦那、旦那！」
ふり返ると縞の着物に茶の博多帯、それに雪駄という、やくざ風の男で、小腰をかがめながら近

づいてきて、
「お初にお目にかかります。私は鈴源の弟分で、梅吉というケチな野郎でございますが、どうかお見知りおき下さい……」
と、型どおりの挨拶をして、
「じつは先ほど、陰ながら御様子をうかがつていましたが、旦那の胆ッ玉のでつかいのには、たまげてしまいました。ついては一つ、お近づきの盃をいただきたいものと思いますが、この辺でどうでしよう。御機嫌なおしに一杯、お付き合い願えねえでしようか」
と、すこぶる丁重な物腰である。
しかし、その眼つきの冷たくて鋭い、険をふくんだ人相から、こいつ油断がならないと、私は見てとつた。
だが、これを拒絶するのは、かえつて弱味のように思われるかもしれぬし、それも癪なので、
「よし、付き合おう」
何気なく軽く受けて、近くの飲み屋に入つた。
夜はおそく、他に客も少なかつた。二、三本飲んでいるうちに、「藤田先生」から「藤田さん」になり、だんだん言葉もぞんざいになつてきた。
女中が、もう火を落すから、料理の注文があつたら今のうちに……と言つてきた。
「料理なんぞ、いらねえや」

と言つておきながら、少しすると鍋を持つてこい、肉が喰いたいのと言つて、女中を手子摺らしている。
懐中にはドスをのんでいるらしかつた。なにかキッカケがあつたら、私を刺そうというのだろうが、こちらに隙がなく、だんだん時間が経つていくので、内心いらいらしているに違いなかつた。
「おい、梅吉！」
私は、とつぜん高飛車に出て、彼の名を呼び捨てにした。
「お前、そんなに肉が喰いたいんなら、おれの肉を御馳走してやろう。お前、懐に持つているドスを出してみろ」
梅吉は、すつかり気を呑まれて、催眠術にでもかかつたように、懐に手を入れると、細身の白鞘を取り出した。白鞘といつても、黒鞘といつた方がよいくらい、手垢でよごれたものだつた。
しかし、鞘を払つてみると、何度も人の血を吸つているらしい曇りがあつて、いかにも切れそうである。
私は袴の膝をグッとまくり上げて、自分の右の太股に短刀を突き刺した。グルリと一とえぐりして、径一寸（約三・三センチ）くらいの肉を切りとると、それを短刀の先に突き刺し、血だらけのまま、彼の皿の上に乗せてやつた。
「さア、ちつとばかりで物足りんだろうが、おれのまごころがこもつているんじやア、これ以上の物はないつもりだ。遠慮せんで食つてくれ」

「いや、いや、たくさんです」
梅吉は顔をまつさおにして、立ち上がると、
「先生、お見それしやした、どうぞおゆるし下さい」
と、二度も三度も平グモのように頭を下げて、逃げるように外へとび出していつた。

私は傷口にサッと酒を注ぎかけると、キリキリと手拭でしばつた。傷をしても私は人が痛いと感じるほど痛くない。不死身（ふじみ）といわれたのも、そのせいかも知らない。とにかく、このくらいの傷では、ビッコを引くようなことはないのである。

これで、重ねてドギモを抜いたためか、その後、鈴源一家からは全然私に手出しがなかつたばかりでなく、山辰一家の方にも折れて出て、仲なおりができた。

しかし、その夜の場合、せつかく私は自分の股の肉を切りとつたのに、梅吉が逃げてしまつたので、この処置にはちよつと考えた。

このままにしておけば、店では気味わるがつて、ゴミ箱の中にでも捨ててしまうだろう。そしたら野良猫か犬の餌になるだけだ。わが分身をみすみす野良猫の餌にするのは、我慢できないことだし、これはふたたびわが腹中に納めるにしかずと思つた。

そこで、ほとんど空になつていた牛鍋の中に入れると、しばらくして黄色い泡を立てて煮えてきたから、一と口に頬張つて食べてしまつた。気のせいか、あんまりいい味のものではなかつた。自分の肉を食つたという人は、めつたに無かろうと思う。

真ッ赤な火が食べられるわけ

ここでちよつと一言しておきたいのは、私が真ッ赤な炭火を喰つたり、熱湯を呑んだり、自分の股の肉片をえぐり取つたりしたことについてである。

現場を見ない人は、そんなことができるだろうかと疑いを持つかもしれないが、これはやはり忍者として鍛練の結果、出来ることなのである。

前述したように、山伏の修業に、火渡りの術、探湯（たんとう）法というものがある。火渡りの術は松割木、または木炭を、長さ二間、巾五尺くらいにおきならべ、その四隅に竹を立て、しめ縄を張りめぐらし御幣を立て、四隅から火を放つて炎々と燃えているあいだ、行者は「火祓詞」や「火鎮祝詞」を上げて祈禱を行う。

さて、木炭がことごとく真赤になつたころ、行者の助手は棒をもつてそれを万遍なく叩きつけて平らにする。ことに人の渡るべきまんなかの路筋は、入念に叩きつける。それから方々に塩をまく。特に人の渡るべき路筋の入口には、たくさんの塩を積んでおいて、渡る人はその塩を両足の裏でよく踏みしめさせ、十分に湿しておいてから渡らすのである。

こうして行者は、まず火に対して九字（くじ）を切り、つづいて空に「淼」という字を書き、つぎに火に向つて「賦」の字を書いて、最後の一点だけを自分の足もとに打込む。そして大海の印（いん）をむすび、

「オンアビラウンケンカンマンボロン」

という呪文を五唱しながら素足で小きざみに早く渡り、参拝者をつづいて渡らせる。こうして火の上を渡つてもヤケドをしないというのが火渡りの術で、古来からマカ不思議の術とされてきたのだが、事実は決して神秘でも不思議でもない、あたり前の物理現象にすぎないのである。

なぜなら元来、松炭は他の炭に比べて火力が弱く、また消えやすい。その上に塩をたくさんまくから、いちだんと火力を減じ、火傷をするほどにはならない。しかし、なんにしても火の上を渡るのだから、皮膚には、ある程度、熱く感じるわけだが、そこは行者のおごそかな修法、呪文などがあるから、凡人にも一種の精神力が働き、大丈夫だという信念をもつて渡れば、耐えがたいほどに熱くは感じないのである。

つぎに探湯術というのがある。これはグラグラと煮えたつ湯の中に手を突込んでも、ヤケドをしない不思議な術である。

これを行う行者は、まず塩水で手を洗い清め「臨兵闘者皆陳列左前」という九字の呪文をとなえ、指頭で空中に四本の縦線をかき、その上に五本の横線をかいてから、

「さらさらと沸く湯なれども、立寄れば、池の清水と早くなるべし」

という呪文を唱し、さて、おもむろに、グラグラと沸きたぎつている湯の中に手を差込むのである。

この探湯術は、富士山とか御嶽山とかの高い山で行われるが、そこがミソで、高山は空気稀薄で

気圧が低いから、平地で百度から百二十度の火力を要するものが、わずか七十五度くらいで沸騰する。さらに手を清めると称して塩や水をつけるのは、一つのトリックで、塩は熱の力を吸収する力の強いものであるから、熱をある程度、皮膚面でさえぎる効を生ずるのである。だから、ヤケドをするには至らないのだ。

私もこの火渡りや探湯術は、何回もやつてそのコツはよくのみこんでいる。馴れれば塩をまいたりする必要はない。ことに口中にはツバキがあるから、まつかに焼けた炭を口中に入れるとジュッという。ジュッというのはツバキが気体に化するときの音で、この気体が舌の皮膚面と木炭との間を紙一重にも足りないが遮断することになる。このとき、火を入れたら、すぐ口を閉じることがコツで、これで火が消える。口を開け放しでフーフーやつていてはいけない。こうして消えた木炭をガリガリやつて呑んでしまうのである。

むろん、ヤケドの一歩手前くらいの熱さを感じる。熱いのは熱いが、何クソという剛毅不動の精神力をもつてすれば、平気でやつてのけられる。

探湯術の場合も同様で、要は習練と胆力なのである。

私は少年の頃から人の驚くような大怪我をしても、泣いたり喚いたりしたことがなく、不死身といわれた。皮膚が鈍感なのかというと、触覚などは人一倍敏感で、痛覚は立派に働いているのである。

だから、痛いのは痛いのである。だが、いつも、

「なにクソ!」

という精神力で克服してしまう。痛くなんぞあるものかと思えば、痛くない。「心頭を滅却すれば火も亦涼し」の、あの境地なのである。

これは後からも述べるが、昭和七、八年ごろ私は軍の秘命を帯びて、満州に行ってきたことがある。馬に乗り通しだったので、人差指と中指を折りまげたくらいの大きな痔が出来てしまった。そうして日本に帰ってくると、あくる日、陸軍の戸山学校で、拳法の型を演じることになっていた。どうもこの痔が痛くて痛くて邪魔になって仕方がない。そこでその前夜、家の者が寝静まったとき、一人で痔の手術をしたことがある。

それは新聞紙を四、五枚、座敷のまん中に敷いておいて、鏡で痔のイボを確かめながら、出っ張っている二つを剃刀で切りとってしまった。えらい出血だったが、すっかり血止めをするまでに小一時間ほどかかった。

こうして翌る日、戸山学校へ時間通り行って、無事、役目を果したが、人が聞くと、ずいぶん無茶だとか、よく痛くないものだとかいう。しかし、痛いのは痛いのである。ただ精神力で、なにくそッ、と克服してしまうまでのことなのである。

幽霊屋敷の探険

大正八年に日大宗教科を出たが、私はそのまま相変らず、警察の武道師範と新聞記者を兼業しつ

づけた。

そのころになると、いつも家には三人、五人くらい居候になってゴロゴロしている者がある。弟子にしてくれという者がたくさんあっても、私としては道場を持っているわけでもないから、ことわっていると、それでは道場を建てましょうかという者が出る状態で、なんとしても大塚の家は狭くて困った。

そこで私だけ家を一軒もつことにしたが、当時は今とちがって、東京中に貸家の多い時代だ。家を探すのに苦労はなかった。しかし、家賃を出して借りるのは馬鹿々々しいから、タダで大きい家に入る工夫をした。といっても、家賃をふみたおそうというのではない。そのころの古い東京には、化物屋敷とか幽霊屋敷とかいって、長いこと人の住まない家が、たまにあったもので、こういう家は家主の方で、タダでもいいから住んでもらいたがっていたものである。

初めに候補に上がったのが、下谷根岸にある門構えの大きな邸で、初秋の夕方ちかく、私は二人の書生をつれて検分に出かけた。

近所のうわさでは、ここは三代つづけて主人公が首をくくっており、その後、幽霊が出るというので、何人か借り手はあったが、二、三日すると、早々に荷物をまとめて逃げ出してしまうというのだった。

黒板塀をまわした門があって、風雨に朽ちているため、建て付けもガタガタだった。敷地は二百坪ほどあって、二階が三間、下が五間ほどの古い造りである。

持主も、あきらめて手入れをしないとみえ、家のまわりは雑草が茫々と茂り、幽霊屋敷というには、いかにもふさわしい状況であつた。
雨戸と格子が二重になつている玄関をあけると、ガマ蛙が二匹ノソノソと這い出してきた。締め切つてあつた温気と湿気で、タタミはボコボコである。書生に全部の雨戸をあけさせ、外の空気を入れたが、カビ臭くてどうにもやりきれない。
台所はナメクジの巣で、太くて背中に縞の入つたやつが、ゾロゾロと行列を作つている。化物屋敷というが、これでは化物の方で退散しそうなヒドい家だ。
長い年代に、時どき建て増しをしたらしく、廊下で継ぎたして一段高くなつた部屋や、低くなつている部屋があつた。三代の主人が縊死（いし）したというのは、一段低くなつた部屋に通じる廊下のカモイのところで、その部屋の向うは裏庭になつていた。
三人とも同じ場所で首を吊つたという場所に立つて、その縄をかけたといわれる鴨居を見上げていると、ふと私は、なんともいえないイヤーな気がしてきた。
だいぶ陽は西に傾いて、天井の隅には夕闇が色を濃くしてゆき、家全体が陰気な感じだが、ここに立つていると、なんとなく気が滅入（めい）つてきて、地獄の底にでも引込まれていくような感じがしてくるのだつた。
と、突然、私が立つている右側、つまりその家とすれば東側の壁の上の方に、ボーッと人影があらわれた。それも、天井から吊り下がつているように、頭を下にした逆様（さかさま）の人影なのである。

「あッ」
と、思つて見ている間に、それは右から左に移動して行つて消えてしまつた。
（これが幽霊というやつかな……）
と、思いながら、私は二人の書生にも見せておこうと、彼らの名を呼んだ。
二人は西側の台所の外あたりにいたが、私に呼ばれて、玄関の方に廻つた。
と、そのとき、また幽霊があらわれ、しかもこんどは二人連れで、さつきとは反対に、左から右に、ツ、ツーと行きすぎて消えてしまつた。
（は、はーん）と、私は、ようやく納得するものがあつた。
「先生、どうしました？」
「なにか出ましたか？」
山崎、長谷川という二人の書生がやつてきたので、
「出た出た。逆立ちになつて、天井を歩く幽霊が出おつたよ」
「ほう、変つた幽霊ですな」
「あのへんの壁に出るから、気をつけてくれ。おれは外から調べるから、出たら出たと声をあげるんだ、いいか」
私はそう言つて、玄関から外に出た。左手に台所へ通じる道がある。そこを進んで行つて、ある地点に来ると、

「先生、出ました！」
と、二人が声を揃えて叫んだ。
「どういうふうに現われて消えていくか、言つてくれ」
私は、そう言つて、台所の方へ歩いていくと、
「先生、幽霊は右から現われて、左に消えました」
そこでつぎに、逆もどりしてくると、
「先生、こんどは左から現われて、右に消えていきました」
これでいよいよ幽霊の正体が、ハッキリしてきたわけである。
書生たちの立つている廊下の西側は、白壁になつていて、あちらこちら崩れおちている。ここに小さな穴が出来ていて、夕陽が地平線にかたむくころ、この道を通る者の逆さ像が、廊下の向うの壁の上に映し出される。それが幽霊の正体だつた。
そこで私が試みに羽織を脱いで、この辺りと思われる壁の一部をふさぎ、前の通り歩いてみて、
「どうだ、また出たか」
と、言つてみたが、
「いいえ、出ません」
ぜんぜん幽霊は出て来ない。このことを書生たちに説明すると、「なアーんだ」というわけで大笑いだつた。

それから裏庭に廻つたが、敷地の一隅に高さ一間ほどの饅頭形の小山があつた。築山にしては場所といい、形といい、合点がいかないので、雑草をおし分けてしらべてみると、文字の風化してしまつた小さな碑のようなものが埋つていて、明らかに古い塚であることがわかつた。
塚の右側には、直径二間ほどの池ともいえる水溜りがあつて、落葉が水面を覆い、一人の書生はうつかりして、中に踏み込んでしまいそうになつたが、水は腐敗して悪臭を放つていた。
私がさいぜん廊下に立つていて、気持がわるくなつたというのは、ここから発生するメタンガスが、自然に座敷の中へ流れ込むようになつていたからと思われる。これでは幽霊はともかく、衛生的によろしくないので、借りることは断念した。

「生き神様」顚末記

「東京三変人」の二位

つぎは巣鴨に、あまり大きくはないが、土塀に囲まれた昔の武家屋敷があつた。ここには髪をふりみだした若い女の幽霊が出るというので、誰も借り手はなく、何年も建ちぐされになつていた。

しかし、総ヒノキの土台のしつかりした建築なので、手入れをすれば、結構住めそうである。家のまわりを調べてみても、前の家のように湿気はなく、衛生に害もなさそうだし、当分ここを借りることにきめた。

すると、たちまち門弟とも子分ともつかぬ連中が、十五、六人も集まつてきて、朝から晩まで相撲をとつたり、柔道の稽古をしたりで、ドッタンバッタン、大へんな騒ぎである。

しかし私は、誰でも門弟にしたわけではなく、学問は高等学校卒業以上、柔道は初段以上、体重は十八貫以上というのを資格にして、人物もわるくないという人間だけを家におくことにした。

だから、中には六尺三寸、(約二・七メートル)三十五貫(約一七一キログラム)という、相撲取りにしてもいける堂々たる体格のが居たし、二十五、六貫というのはザラだつた。こういう連中が集まつて飯を炊き、武道を鍛えるあいまには、酒をのみ詩吟をどなるというのだから、さしもの幽霊もシッポを巻いて退散したとみえ、二、三年住んでいたが、その間、ぜんぜん現われなかつた。

こうなると物足りないので、私は部屋ごとの白壁や障子、唐紙に、幽霊の絵をかいたり、水死体や轢死体の絵をかき、大いに気分を出したもので、他から来た者はたいてい気味わるがつて、早々に退散していつた。

大正十年ごろは新聞社をやめて、武道師範専門になり、東京の憲兵隊本部と警察を廻つた。

そのころになると、私の趣味はいよいよ幽霊に凝つて、黒紋付の紋は全部ガイ骨にし、羽織の紐の結び目に小さなドクロをぶら下げていた。腰にはガマ口をぶら下げていたが、これは本物のガマの腹わたを抜いたもので、それに髪は総髪にして肩まで垂れ、腕の力を強くするためといつて、三貫目(約一一キログラム)の鉄の棒をついて、いつもガラガラドシーンと歩いていたものだから、道ゆく人は目をみはつたにちがいない。それで雅号を「妖怪庵幽霊山人」と称していたので、当時の新聞では「東京三変人」の一人に数えていた。

この「三変人」の第一は「平凡山我楽多寺」の和尚で三田林窓、これは三十年来、坊主でありながら性(セックス)の研究に打ち込んできたという男。二番目が私の「妖怪庵幽霊山人」。三番目が「阿呆庵カラス山人」これは石田という私の弟子で、朝から晩まで瞑想にばかり耽つており、人がみた

ら馬鹿だか利口だかわからぬが、やはり一ぱしの哲学者であつた。

憲兵隊司令部で、柔道や当身の術を教えた中には、後年（大正十二年）大杉栄を殺した甘粕大尉や、永田鉄山を刺した（昭和十年）相沢中佐などがいて、あの事件が新聞に出たときには、

（とうとうやつたな！）

と、思つたものである。

イカモノ喰い大会

そのころは世間をアッと言わせるような、奇想天外なことばかりやつていたが、大正十年に小石川のお寺を借りて催した悪食の会というのは、大いに時の新聞を賑わしたものだつた。

当時、「蒙古王」といわれた佐々木照山という豪傑がいたが、これは私の兄貴分で、私はいつしよに「雄弁会」というのをこしらえていたほか、よく二人で相談しては、痛快な行事を企画し、いろいろ実行に移した。

どうも日本人は島国根性で、肚が小さい。もつと大いに食つて、体力、気力を養わなくてはいかん……というような趣旨から、「牛飲馬食の会」というのを計画したり、酒を何分間に何升呑むかという「大酒コンクール」を開催したりしたものだが、こんどは「イカモノ喰い」の大会をやろうということになつた。

そしてこれを大々的に新聞に広告し、参加者をつのつたところが、東京だけでなく関東の近県か

らまで、意外に多勢のイカモノ喰い選手が集まつてきた。

いまでも覚えているので奇抜なのは、線香を三束食べたやつがいるし、ボーフラや糸ミミズのいるドブドロ（ドブロクにあらず）を一杯……といつても洗面器に一杯呑んだ者もいた。金魚を五匹丸呑みというのがいるかと思うと、青大将一匹を丸呑みにした者もいた。もちろん、みんな生きたやつである。

また、山椒魚を一匹というのもいて、尾つぽを持つて、あばれているやつをペロッと口の中に入れたが、あいつは爪があるのでノドに引つかかり、目をシロクロして一時は危なかつた。しかし、出すよりも楽だというので、とうとう呑んでしまつた。

青大将を呑んだやつはなかなか要領がよくて、まず口に入れたときに、ガブッと蛇の頭を噛みつぶして、あばれないようにして呑み込んだ。

いろいろと変つたものが出た中で、第一等賞はドジョウ三匹の丸呑みということになつた。ドジョウ三匹は山椒魚や青大将にくらべて楽なようであるが、腹に入つてからが、これが一番つらいのである。

ドジョウはなかなか死なぬし、青大将を呑んだやつの要領で、まず頭を噛みつぶせばよいのだが、ヌルヌルしていて、これはできるものではない。腹に入つてからも、いつまでも生きていて暴れる。胃潰瘍などの病気のある者だつたら、胃袋を突き破られてしまうから一番危険だ。そういういろいろな条件を考慮した上で、一等にしたのであつた。

このときの参会費は一名五十銭であつたが、競争が終了してから、出された御馳走というのがふるつていた。

まず、ネズミの天ぷら、マムシの腹子のツクダ煮、青大将のブツ切りのお汁、ミミズの塩辛、芋虫の三バイ酢、それに御飯はヘビメシという珍品ぞろいで、大いに舌ずつみを打つたというわけ。

当時はそんなことをして愉快がつていたのだから、まことに天下泰平だつた。

院外団「国策断行会」設立

巣鴨の幽霊屋敷の方は、だんだん門弟の頭数がふえて、三十名以上になつてしまつた。

明治の書生気質が、なお盛んなころだから、口をひらけば政治の腐敗を嘆き、天下国家を論じて、悲憤慷慨したものだ。そこで一つの結社を作り上げたのが「国策断行会」という、一種の院外団で、もちろん思想は右翼、行動は実力主義というグループだつた。

さつそく当時、右翼団体の代表的勢力であつた国粋会からの呼びかけがあつて、私は国粋会の顧問、相談役となり、たがいに密接なつながりをもつようになつた。

そのころ、私は後藤新平伯と、ひじような近づきになつていた。伯とは、もともと新聞記者時代からの面識であるが、あるとき偶然の話のきつかけから、伯の奥さんの先祖、安場家と、私の家の先祖といくらかのつながりのあることがわかり、より一層ちかしくなつた。

「じやア、君とは親類なわけだ」

と、いうわけで、それ以来、私も親しく出入りするようになつたし、私の透視術や心霊的な能力を買つて、よく政党や政治の動きの見透しの予言を聞きに、私の梁山泊をわざわざ訪ねてきた。

実によく気のつく人で、なにか金のかかりそうなことがあると、だまつていても金一封を届けてくれた。私を政界、財界の有力者に紹介してくれたのも後藤伯で、そのころ同姓で藤田謙一という商工会議所の会頭をつとめていた人がいたが、この藤田謙一とは星ケ丘茶寮に特に一席を設けて握手させてくれた。

そこで財界の人も、私のところに予言をききにくるようになる。政界で顔の売れた政客も、よく門前に車を停めるというふうになつてきたので、私の取り巻きの連中が、

「先生、これはいつそ神様を商売にした方がいい」

と、いうことになつた。

私も二十三、四の若気の盛り、野心もあつたし悪戯ッ気もあつたので、それも面白かろうと、看板を上げたのが「国本教会」というやつである。この参謀長となつたのは、鈴木栄二という男である。

この男は元来が薬剤師だが、私の門弟中でも第一の策士で、なかなか実行力もあつた。二十五、六貫の堂々たる押し出しと、巧みな弁舌の持主であつた。金集めが上手で、今日の日本薬剤師会というのをこしらえたのが、この鈴木栄二なのである。いまでは小川友三などが薬剤師会でハバをきかせているが、この小川は鈴木栄二の子分で、私からは孫分に当るわけだ。鈴木はそのころ高田商

会や三共製薬に行つて、河内山宗俊ばりに尻をひんまくり、当時の金で五万、十万とあつめ、薬剤師会というものを初めて創つたのだから、とにかくこの社会の大功労者である。
　この鈴木がお膳立てして、私を生き神様に祭り上げたのだが、それには巣鴨のいまの家では貧弱すぎる。もつと大きな幽霊屋敷はないかと探したあげく、板橋の縁切り榎の近くに手ごろなのを見つけた。

赤いハカマのエロ幽霊

　こんどの幽霊屋敷は、二十三室という大邸宅で、昔の小大名の下屋敷だつたというだけに、構えも立派だつた。
　私の部屋は奥の十二畳で、神様の部屋だから、グルリと注連縄を張りめぐらしてある。隣が十二畳、十畳、八畳とあつて、そこには子分の中でも四天王、八天狗といつた五段、六段の猛者連中が寝泊りすることになつていた。
　ところが、こんどの幽霊屋敷は、なかなかしたたかな幽霊がいるとみえて、最初の晩から、この猛者連中が一人々々、夜中になると代るがわる、うなされるのである。あくる朝になつて、
「ゆうべ、うなされていたのは誰だ」
と、訊ねると、そのご当人は、恥ずかしそうに頭をかいて、
「先生、九字を切つて下さい」

という。
「なにがあつたのだ？」
「いや、それはちよつと……」
　ただニヤニヤ笑つているだけで、白状しない。鈴木栄二もやはりうなされた口で、わけも言わずに、お修祓をしてくれとかいつて、言葉をにごしているのだつた。
　どうもおかしいと思つているうちに、私は神様になつてからも、貴衆両院の守衛たちに柔道や捕手術の指導に行つていたが、あるとき衆議院の控室で、湯浅凡平とか関直彦というような人々から、
「君のところでは幽霊が出るというじやないか」
「緋の袴をはいたベッピンの幽霊が出るというぞ」
などといろいろ言われた。
　外部に知れているのに、当の主人公たる私が知らんではいられない。さつそく帰つて四天王の連中を追求すると、まず鈴木が頭を掻きながら、
「実は、これは口外をしてはいかんと、彼女に言われているんでね」
「彼女ッて誰だ？」
「緋の袴のベッピンだよ」
　話はこうである。
　私の隣の十二畳に、壁の一部が大きくヒビ割れたところがあるが、真夜中になると、そこから緋

の袴をはいた御殿女中風の女がモウロウとあらわれてくる。それが実に美人なのである。

この美人の幽霊は、初めに寝ている者の蒲団のまわりを二、三回まわる。まわりながら顔をのぞいて、三回か四回まわつたときに、いきなり馬乗りになつて、首をしめてくる。それが苦しくもあれば、また気が遠くなるほどいい気持でもある。

この女は首をしめながら、一つの物語をする。実際には喋らないのだが、その女が喋つているように、なんとなくこちらに通じてくるのだそうである。

その女の語るところによると、彼女は或る大名の側室で、輿入れの時は何本かの金の延棒を持参金にもつてきた。ところが、この大名はお局ばかりを可愛がつて、いつこう自分を顧みてくれない。負けん気とみえて、彼女は折あるごとに抗議した。

これをうるさく思つた大名は、彼女をこの下屋敷に追つ払つて、禁足同様にしてしまつたため、彼女はとうとうここで悶死してしまつた。

それが身の上話だが、さてこの邸には、自分の所有である金の延べ棒が、何本か隠してある。この邸に末長く住む者には、これを与えるから、「他言は無用であるぞよ」というのだそうだ。

そして毎晩のように首を絞めに来て、だんだんには夫婦関係にまで及ぶという。

「だから首を絞められるのは苦しいけれども、いまに金持ちにしてくれるというので、楽しみにしていたが、おれは喋つちまつたから、残念ながらもう資格はなくなつたよ」

鈴木はとうとう白状して、ニヤニヤ笑つていた。

この女は、こういう死方をしたので、嫉妬の鬼と化したものか、

「この邸内にはもちろん、近所には夫婦者の住むことをゆるさん」

とも言つたそうで、そのせいか知らぬが、近所は「後家町」といわれるくらい、未亡人ばかりが住んでいた。また近くにある大榎が、いつの世からか知らぬが、「縁切り榎」などと呼ばれるようになつたのも、この邸の幽霊に何か関係があつたのではないかと思われるのである。

虎の門事件と後藤新平邸ナグリ込み

「国本教会」の大看板を門柱にぶらさげ、神殿を神々しく飾り立て、一切の準備をととのえて、事前運動よろしく、いざ開店のふたをあけてみると、私の神童、千里眼の時代から名が通つていたので、千客万来の大繁昌であつた。

上は政界、財界の高官貴顕より、下は裏店のおかみさん連中まで、朝からドシドシと詰めかけてくる。神様である私は、御託宣を与えるのに大汗であつた。ただ口先三寸、元手いらずでおサイ銭はジャンジャン入つてくるのだから、こんなにボロイ商売はない。

その間も私は国粋会や右翼団体に顔を出して、いよいよいつぱしのボスとして巾を利かしていたが、神様になつてから満一年目ごろ、忘れもせぬ大正十二年十二月二十七日であるが、突如、虎の門事件というのが勃発した。

それは今上陛下が摂政宮でおわしたとき、第四十八議会の開院式に臨まれるため、虎の門にさし

かかつた御乗車をめがけて、二十五歳の青年アナーキスト、難波大助がステッキ銃を発射した事件である。

犯人は直ちに逮捕され、即日、山本内閣は引責総辞職し、湯浅警視総監も免官となつたが、右翼団体の非難は内務大臣であつた後藤新平に集中し、

「後藤新平を斬れ」

という声は、押えようもない勢いとなつて盛り上がつた。

私が国粋会の本部に行くと、壮士の連中が日本刀を持ち出し、抜刀して素振りをくれたり、すぐにも出発するのだと、自動車をいいつけている。

幹部の連中は、私と後藤新平の関係を知つているので、私を見る目もなんとなく遠慮がちだつた。ここに私は、赤城山における板割の浅太郎みたいな役割におかれたわけだ。

「よし、後藤新平はおれが斬ろう！」

私はそう言つて、日本刀をつかむと、まつさきに自動車に乗り込んだ。

「ヤア、先生が行つてくれればありがたい」

壮士連中は、大いに意気軒昂となつて、自動車を七、八台連らね、桜田町にある後藤邸へ乗込んでいつた。

後藤邸へ着くと、私は真つさきに抜刀のまま、玄関へ駆け上がり、そこにあつた金屏風を十文字に叩き斬つた。

これをきつかけに壮士の一隊が、どつと玄関から抜刀して躍りこもうとしたが、その瞬間、

「危いぞッ」

と、私はどなつて、表へとび出した。

壮士連中は、なにがなんだかわからぬが、とにかく危険が迫つたと感じて、いつせいに引きあげてしまつた。

あとで、これと入れちがいに警官隊が、後藤邸が危いというので、トラック何台かに分乗して駆けつけたことがわかり、誰一人、捕まらずにすんだものだから、

「さすがは神様だ」

と、私は大いに面目をほどこしたものだつた。

ところが、このとき私の「危いぞ」は、後藤伯の顔を思い浮かべた瞬間、なんの考えもなくトッサに出た叫びであつて、警官隊のことなど、なに一つ頭になかつたのである。

後藤邸では、伯のお母さんが亡くなつた直後の、悲しみに沈んでいたときであり、金屏風一枚を台なしにしただけで、だれ一人、怪我する者もなく、何事もなかつたといつて、これまた大喜び、伯からは直筆で、

「小生を御庇護下され、有難く感謝」云々という感謝状を頂戴した。

一石二鳥というが、このときばかりは板狭みになりながら、両方に顔を立てるような結果になつた。

なお戦後の人々のために、国粋会というものについて、ちよつと説明しておくなら、これは大正八年十月、関西の老侠西村伊三郎が、広く仁侠の風を伝唱する目的をもつて創設を主唱し、時の内務大臣床次竹次郎、警保局長川村竹治、古賀廉造、青山広吉、篠信三郎などの斡旋によつて発会式をあげたものである。
　のち大正十年に至つて、大日本国粋会総本部と、大日本国粋会関東本部との二派に分れたが、全国各地に支部があつて、日本古来の義理人情を重んじ、強きをくじき弱きを助けるという侠客道を基本として組織されたものである。
　大日本国粋会の命名者は、杉浦重剛翁で、後々には暴力団の代名詞のように思われるに至つたが、当時の思想団体としては、右翼華やかな時代だつたので、もつとも権威のあるものだつた。
　私はここの幹部連中の後押しもあつて、国本教会という看板をかかげ、その教祖、つまり生き神様となつたわけだが、さて神様というものは大変えらいものであり、かつまた、大変に窮屈なものでもある。

神様商売繁昌記

　私は透視能力を評判されて、生き神様に祭り上げられたのであるが、私はあくまで人間であり、人間は全能でないから、一から十まで何でも見透すというわけにいかない。はなはだ頼りない神様であるが、いよいよ神壇の下の円座に端然と坐つて、神慮をうかがいにくる人々と接する段になり、

初めてわかつたことは、来る人々が自分で自分のことを、みんな喋つてくれるから、こつちは居ながらにしてなんでもわかり、判断もつくということであつた。
　それに重大なことであると、私が頼みもせぬうちに、例の四天王、八天狗といつた連中が、総務という肩書で、その旺溢する俗智により、ちやんと答案を作つてくれるから心配はいらぬ。
　最初は、私も愉快であつた。覇気満々、血気さかんな白面二十四歳の書生が、一躍して神様とあがめられ、修繕を加えてデッチ上げたとはいえ、神殿づくりの相当な建物の奥殿十二畳の間に、祭壇をもうけ、しめを張り、その前のワラで作つた円座の上に、白衣を着け長髪をさばいて端坐し、みずからは神なるがごとくに誇るのである。
　総務あり執事あり、書生二十数名あり、玄関番がひかえていて、みだりに人を通さない。総務の方では、どんな御托宣をするのか知れないが、神慮を求める者が日増しに多くなつてくる。まつたく大したものである。
　一般俗人、市井の頼りない者ばかりが、迷信的にやつてくると思つたのに、あに図らん、堂々たる大官、大臣、時めく実業家、政党の領袖などまでがやつてきて、神様にお伺いを立てる。
　本名を並べることはしないが、本人または相当な代理者をもつて神慮を伺う者が、あんな人までと驚く地位にいる人物に少なからずあつて、私も意外の感にうたれた。
　政界の異動、財界の変動、株の高低など、私にそんなことの適確な判断ができるはずのものでないのであるが、そこは重宝なもので、一般の売卜者とちがい、神様の前にくるこれらの亡者は、ま

ず、自家、自党の内情を詳細に申し上げたのち、神慮を伺うことにするのであるから、間違いのない政界、政党の真相を、居ながらにして知ることが出来る。それが、その場で即答しなければならぬというのでもない。
　彼らは自家の内情を詳しく物語って、そのもっとも機微な、ある一点、分れ目の大事なところだけを、右か左かと伺いを立てるのであるから、ほとんど自問自答の形である。私はこれをだまって聞いていると、なんとでもよい加減に、ボロを出さない程度の返事をすることができる。あるいは数日中、ゆっくり神慮を伺ってお返事するなどという手もある。
　そうしているところへ、こんどは反対の政党人がきて、また自党の内情真相を逐一、神に報告し、右か左かの岐路の判断を乞うということになるから、私にしては両政党の内情が手にとるごとくにわかる。これをプラスマイナスすると、差引き残りの判断は、必然と出てくるものなのである。
　なんとも変な、滑稽なことで、売手と買手が肚を割って各自の思わくを語って行くとしたら、中に立つ者は、十分に甘い汁を吸うことができると同じ道理である。
　神様の前ではウソを言うことはならぬとしてあるから、わざわざ費用をかけて神慮を伺いにくる者が、心にもないデタラメを言うことはない。いずれもセッパつまって、苦しいときの神助けを乞いに来るのであるから、クドクドと愚痴をならべ、他人にはめったに口外せぬことまで打明けておしゃべりする。
　これを聞いている私には、およその判断はつくのである。まるきり当人にはわからないことを聞

きにくるのでなく、わかり切ったことの分れ目に迷っているのであるから、私としては尤もらしい、どっちつかずの受け答えをすることは造作もない。かつ、その人の弱点をつかむことも出来る。中世ごろのローマ法王のお役得らしい真似は、いつでも出来るのである。
　こうして毎日のサイ銭が、少いときで三百円、多いときには四、五百円にも上がったということだった。

三日やったらやめられぬ

　私の評判が高くなると、各社の新聞記者たちが「板橋の神様」の正体を見とどけようとしてやってきた。
　そのころには、こっちはだいぶ功を積んで、敵味方双方の極秘情報をつかんでいるのだから、頃あいを見計らって機微な消息を逆襲的に聞かせてやると、彼らはびっくり仰天し、さすがは神様の御托宣であると、目を瞠ってしまう。
　大隈侯が坐して天下の形勢を知り、世界の知識を吸収し、前客の談を受売りして、後客の心胆を驚かしたと同じことに、神様の知恵は、居ながらにして他から集まってくるのだから、それが透視であり、神秘であるごとくに見え、聞く者はこれを神意なりとして実行しないと、神罰があたるように思う。
　板橋の神様がよく当るのではない。来る者が持札をさらけ出して見せて、おのずと当てさせてく

れるのである。こうなると、大官の、重役のといつても、みんな馬鹿に見える。そして自分は、ほんとうにエライ神様になつたような、一種の夢遊病者みたいな気分にさえなるのである。

「おれは神様だ。ほんとうにエライ神様だ。世間の者が貴賤老若の別なく伺いを立てにくるとは、なんと大したものではないか」

と、いう気になつて、まことに愉快なことに思われた。すこし馴れてくると、この神様商売は大変気楽なもので、がんらい神意というものは、ハッキリ具体的に示されるものでなく、神学的に漠然と、隠語のように出るのが古今東西の例なのだから、どうでも抜け潜りができる。

一般の俗人が神様に伺いを立てにくる場合をみると、老若によつてだいたいきまつている。

老人は割合の上から少なく、その用件というのも、男女間の関係などはまれで、多くは子孫のこととか、財産相続問題などに関している。不安な顔つきをしてくる者は、娘が行方不明になつたとか、家屋地所の問題で困つている場合などである。反対に嬉しそうな顔で来るのは、子女の結婚について、どちらに決めようかと迷つている場合などだ。

若い者の場合をみると、心配そうな顔のときは前途の不安、学校の試験の成績に関すること、就職問題、恋愛問題などで、家庭の事情から相当複雑な事柄もある。なにかあわてて来る者は「失せ物」の判断で、時には易者から「板橋の神様に行け」といわれたと言つてくる者もあつた。

私が祭壇の前の円座に坐つて、だまつてその人達の顔を見ていると、だいたいの見当がつくのである。

「君は何々で来たように思うが……」

というと、彼はたちまち口を切つて、詳細に説明する。どつちの意味にもとれるような受け答えをしていると、だんだん共鳴して問わず語りをするようになる。

「おお、そのことは君の顔に現われている」

というと、神様の明察は恐れ入つたものだという顔をする。十中の二、三が当れば、彼らはドギモを抜かれて驚嘆し、他の七、八が外れてもそれを問題にしない。

「神も未来のことは適確にわからんものだ」という世間一般の概念らしいものがあるので、まことに私にとつては都合がいい。なんらか不安を感じ、心の迷つている者が神の托宣を求めようとするのは人情の常で、正直でむしろ愚直な者ほど、神様の寵児なのである。つまり亡者は招かずして付いてくるから、易者の場合よりも、ずつと仕事はやりやすい。これらの亡者にむかつて、

「君は世間から剛情者といわれるが、じつは大へん柔順な気質なのだ」

というと、その人は喜んで、ありがたく私を礼拝する心になり、自分の思つているところを正直に言う。それだから私の判断が当るわけだ。私が当てるのではない。向うから当てさせるのである。相手の持ち札を見てしまつたら、こつちの持ち札も、まちがいなく決まるといつたものである。

人を見て通有性の一部をとらえ、そこから出発して、あとは辻ツマを合わせ、相手の気にいるようなことをいいくるめるのが、神様のコツである。

不正直者とみても、

「君は正直だから」
といえば、相手は喜ぶ。さらに、
「その正直な心根のために、いつも縁の下の力持ちをして損をするダケだ」
といえば、彼はわが意を得たというように喜んで、さすがは神様だけあつて、人の心の奥底まで見透しておられると感心する。きわめて通俗的な精神分析を行えば、誰でも神様くらいはつとまるのである。

易者にくらべて百倍もエラく見える神様になり、判断の仕事は大へん楽なのであるから、三日、乞食をしたらやめられぬというが、いちど神様になつたら、これこそやめられない愉快な商売である。そこで、つい調子に乗つたり、ハメを外して尻尾を出して、失敗する者もあるわけである。

もし私が、もつと意気地なしで臆病か、もつと無学で、せいぜい小学校程度の教育しかうけていない人間で、したがつて自己反省の能力のない者だつたならば、モットモットえらい神様になれたろうと思う。が、しかし、神様という商売は私には適していなかつた。

「生き神様」逃げ出す

私は神様に祭り上げられて、最初の一、二年は愉快だつたが、やがて、人生に対する悲哀をつくづくと感じ出した。

私の神様生活が、あまりにも馬鹿々々しくなつたのである。私の毎日していることが、あまりに

もナンセンスであり、それに窮屈であり、退屈であつた。檻の中に封ぜられたというか、ガラス張りの中に入れられたというか、こういう生活には飽き飽きしてきたのである。

第一に私は神様であるから、なるたけムダ口をきかないようにしていなければならない。がんらい私は話好きの方だから、冗談ひとつ飛ばすことができないとあつては、一種の刑罰を課せられているほどの苦痛を感じる。

親が訪ねてきても、すぐ飛んで出て面会するわけにもいかない。早くとも三十分は待たせてからでなければ、自室へ招じ入れる都合がつかない。

（生き神様時代の著者）

思つたことも軽々しく口に出して言えない。一言一行ことごとく束縛される。便所へ行くときも、五、六人の書生がついてくる。神様であるが故に、俗人のように屁をひつていい気持と笑つているような不謹慎な真似をしてはならない。便所の中で、音を立てて屁もひれないとはつらいことである。

外出のときも同じことで、豪勢に執事や書生が十人近くもついてくる。焼芋を

かじりながら歩いた書生時代の真似はできない。たまには、かじってみたいと思うが、オイソレと買うわけにもいかず、道で友達に会っても、ちよっとその辺で一杯ということもできない。

なにか吉例とか、富豪の邸宅へ招かれて、豪奢な御馳走の席にのぞむ場合でも、宴たけなわとなり、これからがカミシモを脱いで、大いにくつろごうという段になると、神様である私だけは除け者にされる。

「若い者の乱雑なさまは、お目障りでございまする」

というような按配で、私は宝の山に入りながら、手を空しうして帰らなければならぬ。

途中から一人ぬけ出して、勝手なところへ行かれないでもないが、白衣長髪のカンバンがどこにも知れているから、すぐに新聞ダネになるだろうし、神様の人気と信仰をぶちこわしてしまう結果になるから、それもできない。まことに不都合千万な生活である。

私がこういう生活にイヤ気がさしてきたについては、もう一つ大きい原因があった。

これより先、神様のご威光がさかんになるにつれて、書生も多くなり、社会的にも大きい勢力を張るようになった。政界人の間にも、警察方面へも私たちの力がのびていって、だんだん無理押しがきくようになる。したがって、世間ではわれわれ一党をはばかり、一歩をゆずる形である。

大勢いる書生たちは、私の威力をカサに着て、しだいに傍若無人の振舞いをするようになり、昨今の暴力団にも似た傾向を生じた。「板橋の神様」は、社会的に世俗の権勢をにぎることとなったのである。

それだけ、ともすれば書生共の行動には、ゆるしがたい悪癖さえともなうので、私は内心はなはだ苦しい。神様の弟子が不良暴挙を行い、一歩まちがえば不正行動におちいらぬともかぎらぬ。これでは私の一分が立たない。神様も三年つとめて、窮屈なだけでもやりきれなく思っていたところへ、こんな書生共の目にあまる不良ぶりは、私をして二重にイヤ気を催させたのであった。

私は思いきって、生き神様の円座を捨て去りたいと思った。しかし、そうと打ち明けたのでは、総務や執事の方では承知しまいし、書生共も、いわば木からおちた猿になるので、どうしても引きとめるにちがいない。私は人知れず板橋の神壇を去って、一時、身をかくすよりほか方法はあるまいと考えた。

折も折、私の書生共が、とんでもない事件をひきおこした。それは大正十三年一月のことであるが、この連中が帝国ホテルに剣舞を寄贈するといって、白鉢巻に抜刀という勇ましい姿でとび込んでいったのである。

彼らとしては、大震災に見舞われ、幾多の難民が生活に苦しみ、帝都の復興もまだ緒につかないというのに、帝国ホテルだけは震災をまぬがれて、一部富豪子弟の享楽場となり、彼らにとって唯一のダンス場でもあった。

書生共は、こういう時勢に、西洋かぶれの青二才どもが、男女相擁して踊るとはなにごとか、踊りなら日本精神の剣舞というのがある。これをタダでお目にかけよう……と、大いに悲壮がって、私にだって褒められようくらいの考えからやったものらしいが、私はカンカンに立腹して大目玉を

くわした。

帝国ホテルは享楽的男女の遊戯場であるかもしれぬが、同時に外人の大ぜい集まつている所である。彼らはこういう行動を日本人の野蛮主義としか見ないだろう。日本精神の発揚もけつこうだが時と所によりけりで、しかも、私にことわりなく、「国本教会」の看板をかざして抜刀して闖入するとは何事だ、と、頭ごなしにどなりつけた。

熟慮は前々からしてあつた。さなきだに飽きあきしていた神様の座を去るには、これが好機と考えたから、それから二、三日の後、大阪の国粋会に打電しておいて、ひそかに板橋を脱出し、東京を去つて行つたのである。

貫禄十分

世界一の怪力に勝つ

私は腹心の書生三人だけをつれて、東京駅を立つた。梅田駅に着くと、国粋会が幟や旗を十何本も押し立てて、壮士連中がホームに溢れるほど並んでいる。何事かと思つたら、私が打つた電報をみて、さつそく出迎えにきたのだということなので驚ろいてしまつた。

そのころ、大阪の国粋会の会長は、野田栄次郎といつたが、この人の紹介で、富田屋という旅館にひとまず落付いた。

私は、まつさきに床屋を呼んで、数年間、神様のシンボルだつた長髪を、バッサリと刈つてもらい、俗人に還つた。

当分はどこにも顔を出さず、ひつそりとしている覚悟だつたが、なにもしないでいるというのは退屈なので、この機会を利用し、茶道と華道を学ぶことにした。

板橋の神殿を出るとき、当時の金で三十万円くらいあつたが、私は八万円ほどを旅費にとつて、あとは総務はじめ書生の連中が分配するように残しておいた。だから大阪では、一流旅館の大広間を占領していても、当分は食つていけた。

私が毎日暇があると思うものだから、国粋会の幹部連中が、よく遊びに来て、大阪見物に案内してくれた。

ある日、新天地に行くと、劇場に、

「世界一の力持ち、露人ケンテルの実演」

という大看板が出ていて、木戸口ではさかんな呼込みをやつており、大入満員の客をあつめている。

「ケンテル来たる」ということは新聞にも出ていたので、一つ、どんなものだか見物しようじゃないかということになつた。

ケンテルは世界一の怪力を自称するだけあつて、体重四十二貫、六尺有余の大男、いかにも普通ではちよつと真似のできぬようないろいろな技を演じていた。

まず当時の二銭銅貨、これを歯でくわえて、ギュッと半分にねじ切つてしまう。五寸釘を手でちよつと板に打ち込んでみせたり、同じく五寸釘を五、六本合わせて、縄のようによじつてしまったり、太い鎖を胸に巻いてプスンと切つてしまつたりする。

また鉄道のレールを肩に担いで、曲げてしまつたり、そうかと思うと、大の字に寝ていて、人を

満載したトラックで腹の上を轢(ひ)かせたり、反対の方向に進む二台の自動車にロープをつけ、それを両腕に通しておいて、走り出すのを止めてみたりして拍手喝采を博しているのだつた。

「さすがに大したもんだ」

「とても人間技(わざ)とは思えん」

同行した国粋会の連中が、帰り途、しきりに感心しているから、

「あんな真似は僕にだつて出来る。世界一というのは、いささか広言(こうげん)だ」

と、私が言うと、

「いくら神様だつて、あの真似はちよつと……」

どうも私の言葉を信じない様子である。

私も若かつたし、そうなると少々意地にもなつて、同行者の一人に、

「よし、じゃア、僕がケンテルに挑戦するから、君、ひとつ行つて話しといてくれ。ケンテルのする通りのことをやつてみせるから、その時はロシヤ一とかヨーロッパ一とかいうならいいが、世界一はやめろ。時間は明日の午後二時に出かけて行くと言つてくれ」

その男は、引き返していつたが、しばらくすると戻つてきて、

「承知しましたよ。興行主に会つて話してきましたが、その方が客も大勢来るだろうと、とても喜んでいました」

という返事だつた。

興行主の方では、どうせケンテルが負ける気遣いはないと思つたものだから、さつそく宣伝に抜け目なく新聞社に知らせる。あくる日の朝刊各紙には、
「世界一の怪力と生き神様の一騎打ち」「鉄腕勝つか、忍術まさるか！」
などと、三、四段の段抜き記事で、デカデカと書き立てた。
その日は約束の時間を見計らつて出かけたが、劇場は立錐の余地もない超満員。興行主の思わくは適中したわけである。
いよいよ力くらべということになつた。
ケンテルは、前にも述べたような大男、私も当時は二十二三貫（約八六キログラム）はあつたが、背丈も小さいので、舞台に並んでみると、大人と子供くらいの違いに見えただろう。
最初に五寸釘を素手で、一寸板に打ち込むのは、私にもワケなく出来た。何本かを指の先で縄のようによじるのも、指先で天井の桟をつかんで渡つたり、手刀の鍛錬で功を積んでいる私には、たいしてむつかしくなかつた。しかし、三度目の二銭銅貨を歯で二枚に喰いちぎる芸当は、半分にカシワに折りたたむまでは出来ても、残念ながら二つにしてしまうまでには至らなかつた。
それから鉄道のレールを肩にかついで曲げるのも、体力の差というか、これだけは私にできなかつた。
トラックに人を満載して、腹の上を轢かせたり、二台の自動車をロープで引き止めたりは、私にもできた。

一と通り力くらべは終つたが、これでは私の方が点数が少ないことになる。そこで、つぎには私の方からプランを出すといつて、書生にコップ二つと煉瓦二個を取寄せさせて、
「こんどは内臓の力くらべだ。おれがこのコップを食うから、お前も食つてみろ」
と、まずコップをパリパリと食べてみせた。するとケンテルは、びつくりして、いそがしく手を振りながら、
「おれはコップを食う人間など、見たことがない。まして自分でコップを食う真似なんかできない」
と、あつさりカブトを脱いだ。
「つぎに煉瓦はどうだ」
私は煉瓦をガリガリ、噛りはじめた。三分の一くらい食うまで、目をパチクリさせて見ていたケンテルは、
「もうたくさんだ。これもおれには出来ない。おれの負けだ」
と、大きな手を差しのべてきた。この力くらべは、こうしてけつきよく、私の勝ちとなつたのである。

神様、関取に負ける

やはりその頃、雷の海という相撲取りが、内田良平氏の紹介状をもつてやつてきた。東京相撲の三役、小結で、六尺一、二寸（約二・四二メートル）もあるかと思う堂々たる体軀を、紋付羽織袴で

包み、威儀を正してきたのは、なかなか立派だつた。

紹介状には「これを何とかよろしく頼む」とあつたので、頼むというからには、稽古をつけてくれというのだろうと思つた。

ちようど大阪場所の始まる四、五日前だつたから、私のような変り者を訪ねて、少しでも研究を積もうという考えのようだつた。

私も相撲は大好きで、祖父にも奨励されたし、子供のときから四十八手を仕込まれたもので、十五、六になると、祭の余興には、大人の草相撲にとび込んでいつたものだ。大人とやるときは、四つに組んでは不利だから、パッと飛び込んで前袋に頭突きをくれる。たいがいこれで大人はひつくり返つてしまつた。四つに組んでも、三度に一度は勝つた。青年になると、草相撲の大関とやつて負けなかつた。

そのくらい好きな道だつたから、本職の相撲取りに教えを乞われると、悪い気はしない。また神様になつたような気持である。

「それじやア、君がどのくらい力があるか、僕がここに坐つているから、力いつぱいに押してみたまえ」

「へい」

雷の海は、私の両脇の帯をつかんで、ウーンと力をいれたが、私はビクともしない。何度やつても動かないので、

「やあ、こりやア、いくらやつてもだめだ」

と、あきらめてしまつた。

これは、実は私が力が強いからではなく、相手の体を、いくら力を入れても効果がないような姿勢にさせておいて、押させているのだから、私はちつとも動かない理屈だつた。

「じやア、こんどは僕が押してみる」

私は雷の海を坐らせておいて、グつと腰を下げ、ウーンと押すと、四十二貫（約一五七・五キログラム）の巨体が、ズルズル、ズルズルと退がつていつた。

「やあ、恐れ入りました」

「こんどは立つて、押しくらだ。僕を押してみたまえ」

このときも前とまつたく同じ方法で、力の入らないような押し方をさせるのだから、いくら雷の海が力んでもムダなわけである。しまいには、羽織を脱ぎすて、袴の股立ちをとつて、力いつぱい押してきたが、やはりいけない。

「よし、こんどは僕の番だ」

「ようがす」

雷の海、がんばつていたが、世界一怪力のケンテルをへこませたくらいだから、四十二貫ぐらい動かすのは、大した苦労じやない。

「こりやア、かなわん」

雷の海、不思議そうな顔をして、
「じゃア、もう一ぺん、わしに押させて下さい」
というから、また押させたが、相変らず玉の汗を流しても動かない。そのうち私がちょいとひねると、ズドーンと巨体はひつくりかえつて、
「いや、降参しました」
と、そのまま畳に手をついた。
私は彼があまりに素朴なので、ひじょうに好感がもたれ、本当のことを話した。
「これは実をいうと、力じゃないんで、術なんだよ。だから、はたして君が土俵の上で応用できるかどうかは、よく考えなければならんと思う」
「いや、術ならなお結構です。ぜひ一つ、稽古をつけて下さい」
小結に稽古をつけてくれといわれ、私も考えたが、今の調子でやれば、三役でも小結でも、コロコロ転がすのはワケはあるまいと思つた。
「さつそくですが、明日の朝からお願いします」
というので、引受けたが、格好な砂場がない。すると、一緒についてきた国粋会の男が、宿屋の近くのだれそれという親分の家に砂場があるから、と交渉に行き、話はすぐにきまつた。
つぎの日になると、まだ夜の明けきらぬうちに、雷の海は〆込(しめこ)みをちやんとしめて、自分の取つておきの〆込みを担いでやつてきた。

「お願い申します」
というので、私も、彼の〆込(しめこ)みを借りたが、腹の大きさの違いというのは大変なもので、私には十廻りくらいあつた。
なにがし親分のところでは、雷の海と東京の神様の稽古相撲があるというので、夜明け間もないというのに、子分どもや近所の見物が黒山のように砂場を取り巻いていた。
ケンテルとの力くらべ以来、大阪でも私の名は早くも売れていたから、私が出かけていくと、
「やア、神様だ、神様だ」
目ひき袖ひき、ささやきあつて、いよいよ群衆は人垣を厚くしていく。
さて、砂場に上がつて、「やッ」とガップリ四つに組んだが、とんでもない、こんどは雷の海、大地に根ッ子が生えたように、押せども引けどもビクともしない。柔術の手も、忍術の相手の力を無効にする術も、トンと通用しないのである。
雷の海の方は、悠々たるもので、グイ、グイと押してくる。私はズルズルと、どこまでも押されて行く。
「神様、どうした！」
群衆からは野次がとび、弟子どもは、
「先生、しつかり！」
などと声援するが、どうにも施(ほどこ)すべき術(すべ)がないのである。

そのうち、相手が小手投をうつてきたのを辛うじて除けたり、外したり、どうやら無様に投げられることだけは逃げ切つたが、稽古をつけてやるどころか、さんざんの態たらくで、
「やつぱり関取は砂場の上じや強いよ。僕も板の間か、畳の上か、地べたなら自信があるけれども、砂場じやアいけない」
と、けつきよくきれいにカブトをぬいでしまつた。やはり餅は餅屋というが、相撲取りは土俵の上では強い。公衆の面前で大失態を演じたのは、このときが初めてであつた。

朝鮮人のナグリ込み

翌る年の正月のことである。築港の塩湯で、大阪地方にいる朝鮮人が、積極的に日本人と融和を図るという目的から、相当に有力な団体が生まれた。その発会式が三月にあつて、国粋会の大幹部に懇切な招待状が来た。ちょうど正月早々のことであるし、東京の頭山満翁と黒竜会の内田良平翁から、代理出席を求めて来られた。私がどうせ大阪にいて、暇だろうから頼もうくらいの軽い計らいだつたかと思う。
会場は、あまり立派ではないが、三階建の大きな建物で、三階が畳敷きの大広間になつており、発会式はそこで行われたのだが、寒中のことなので、大火鉢に火をカンカン起して、あちらこちらに配置し、朝鮮人の男女数人が、それを取り囲んで、まずは和気あいあいのうちに会が始まつた。
ところが、会長の李なにがしが、開会の挨拶を始めたとき、とつぜん出入口の方が騒がしくなつ

たと思うと、数十人の朝鮮人の一団が、棍棒や短刀をもつて乱入し、たちまちあび叫喚の大乱闘となつてしまつた。
今日でも朝鮮は南と北に分れて反目しているが、そのころでも、一方が親日と出れば片方が反日を主張するというように、どうも相和せない傾向があつて、この時も反対派の団体が、なぐり込みをかけてきたのであつた。
李会長は青くなつて、
「先生、逃げて下さい」
と言つたが、なまじ席を立つと、いきり立つて斬り合い、殴り合いをしている大乱闘の渦に巻き込まれる惧れもあつたので、じつと坐つて成行きを見ていたが、火の入つた火鉢をボンボン投げるので、あちらこちらから火が出て、ボウボウ燃えはじめる。女どもは哀号々々と泣きさけぶ、えらい騒ぎになり、そのうち消防車が、サイレンを鳴らして何十台か駆けつけて、梯子車から放水をはじめる。アゴ紐の警官隊がかけつけて、片つぱしから検束を始めるという始末になつた。
このとき二、三人の私服が来て、私の両肩をつかんだ。
「検束だ」
といつて、私をねじ上げようとするから、
「なぜおれを検束する。あわてるな」
私はその手を振り払つた。

「こいつ、抵抗するか」
向つてくるので二、三人を投げつけたが、警官が大勢応援にかけつけて来たから、ここで暴れても怪我をさせるだけだと思つて、
「お前たちに言つてもわかるまいから、行つて署長に話してやるが、あとで吠え面かくなよ」
と、その場は連行されることになつた。私を乱入組の主謀者とでも勘ちがいしているのか、何と言つても耳を藉そうとしない。たくさんの朝鮮人といつしよに、トラックに押しこもうとしたから、
「こんな物に乗せるんなら行かんぞ」と、私も立腹してどなりつけると、「いや、自動車が用意してある」と、警察の乗用車を持つてきた。
警察署に行くと、留置場に連れて行こうとする。
「無礼をするな、署長を呼べ。おれは国粋会の藤田勇だ。おれをこのままで置くと、署長のクビが飛んでしまうぞ」
私が大声にどなつたので、警察の方でも、半信半疑に思つて、国粋会本部に電話をしたようだ。
それから急に、態度が変つてしまつた。
「藤田さんですか、ちよつと電話に出ていただきたいそうです」
「誰からか」
「野口会長が出ています」
電話口に出てみると、

「どうした、神さん」
という声は、国粋会本部の野口栄次郎会長だつた。彼は私を「神さん」と呼んでいた。
「いま、そつち(警察)から電話があつて、藤田勇という人物は、国粋会とどんな関係かといつてきたから、警察の者がそれくらい知らんのかと呶鳴りつけてやつた。いま迎いの自動車をやるが、えらい目に会いましたな」
ということだつた。
警察では、それから急に態度が馬鹿丁寧になつて、
「どうか、すぐにお引きとり下さい。あなたがここにいらつしやると、われわれが困りますから」
というから、私は署長があやまらないうちは帰らんというと、
「署長は年賀に廻つていて、方々に電話しているのですが、連絡がとれません」
私を連行した司法主任や刑事部長が、手をつくように謝罪する。そのうち国粋会から自動車が来たので帰つてきたが、翌る日、さつそく署長が果物かごなどを持つて、あやまりにやつてきた。文字通りの平身低頭である。そのころ国粋会が、この方面にどのくらい力を振つているかという実体を、まざまざと見せられたような気がした。
私個人としては痛快であつたが、冷静に考えると、国家権力が民間団体の前に、卑屈ともみえるほどの態度をとるのは、なにかその間に純粋性を欠いている。このとき私の胸奥をチラッとかすめるものがあつたが、これがやがてしだいに成長し、後年、私が国粋会を離れる結果ともなつたので

ある。

土佐の国粋会騒動

大阪にいる間、もう一つぶッつかった事件は、土佐に国粋会支部を設置する問題が起つて、その組織に私が出かけた時のいざこざであつた。

土佐には鬼頭亮之助と、竹島三之助という二人の親分が勢力を張りあつていて、どちらも支部長になりたがつていた。

鬼頭の方が、いささか強力で子分も大勢あり、土佐でその名をいえば、泣く子もだまるといわれていたが、神戸のピス憲と兄弟分だとかで、評判はあまりよくない。そこで、いろいろと事前運動はあつたが、私は鬼頭に支部長をもつてゆく気はしなかつた。

そこへ土陽新聞の記者で、樺島という男が来て、土佐の事情通ぶりを発揮し、この一件については力になりたいというので、君は鬼頭と竹島のうち、誰を推すかと訊ねると、竹島がいいという。

それなら僕と同意見だから、何かと力になつてもらおうということになつた。

私は浜口雄幸、富田幸次郎、大石大などの紹介状を持つて高知市に乗込むと、土陽旅館という宿屋の二階全部を組織事務所として借り受け、支部建設の準備にとりかかつた。

すると、鬼頭亮之助から高知市第一の料亭兎月園に招待状が来た。僕はまだ準備も出来ていない今日、行くわけにいかぬから断ろうとすると、樺島が、

「いや、これはぜひ行つた方がいい。土佐に来て鬼頭のご機嫌をそこねると、仕事がやりにくいから」

と、急に弱気なことを言い出した。そしてさらに、

「僕はやつぱり鬼頭に支部長をもつて行く方がいいと思う」

と、いい出した。

「それでは最初、大阪で言つていた意見と、まるで違うじやないか」

「しかし、いろいろ考えてみると、竹島では具合の悪いことがあつて」

などと、あいまいな言を弄して、しきりに鬼頭を推そうとする。私はとうとう「君の干渉は受けぬ、出ていつてくれ」といつて、事務所を追い出してしまつた。

樺島は以前、社会主義者だつたといわれた男で、いまは右翼がかつたことを言つており、要領のいいオポチュニストのようだつた。この時も鬼頭から金でもつかまされて、急に意見を変えたものらしい。

私が鬼頭からの招待を蹴ると、急に彼ら一派が圧力を加えてきた。私の旅館に仕事を手伝いに来ている若い者に「藤田を刺してしまう」とか「藤田を生かして帰さん」とか脅し文句をいいふらし、人相のわるい子分どもが旅館のまわりを、三人、五人と肩を並べて、うろつき廻るようになつた。

そこへまた、樺島がやつてきて、

「藤田さん、私はあなたの身の上を思つて言うのだが、あなたが危い。鬼頭には命知らずの子分が

三百人もいるから、どうか考えなおして下さい」
と、半ば脅迫的なことを言う。
「鬼頭がおれに喧嘩を売るというなら、いつでも引き受ける。土佐くんだりに来て、国粋会を代表しているおれが、そんな脅しに乗ると思うか」
私はそういつて、樺島をまた追い返し、すぐ大阪の本部に長距離電話をかけた。
「鬼頭が喧嘩を売るというから、大至急で兵隊(壮士たち)を廻して欲しい。ハジキ(拳銃)は有るだけ持たせ、機関銃も用意してくれればなお結構、竹槍は二、三百本……」
宿屋の一階では、不穏な空気があるというので、県の警察やら特高が大勢たむろしていたが、私の電話を聞いてびつくり仰天したらしい。このことは直ちに鬼頭の方へ、筒抜けに通じたようだ。
すると例の樺島が、またやつて来た。
「なにしに来た」
「最後の決意を聞きに来た」
「最後も最初もあるか、この野郎」
私は樺島を組敷いて、二つ三つ殴りつけた。樺島がヒーヒー泣きながら、
「人殺し、助けてくれッ」
と喚めくので、警官がとんできて、私の手を押えた。その隙に樺島が逃げ出したから、私は後を追いかけた。

階段をころげるように降りていつたが、外に出た様子がないので、私は一階の各部屋を調べて歩いた。
すると樺島は、女中部屋の押入れの中に潜(もぐ)つていたので、また引きずり出して殴りつけた。
「勘弁してくれ、許して下さい」
と、ワアワア子供のように泣きだした。
「よし、命だけは助けてやるが、鬼頭のことは二度と持ち出さぬか」
と、いうと、
「鬼頭には行つて納得させます。その代り、竹島のことも立てないようにして下さい。もし鬼頭を押えて竹島を出すと、後々までもめて、収拾がつかなくなります」
と、いう。それも一理あると思つたので、樺島を引き起して、
「それでは貴様、これから何でもおれの言うことをきくか」
「ききます」
「じやア、笑え」
「そりや、ちよつと無理で」
樺島は、そう言いながらも涙だらけの顔をゆがめて、笑つてみせた。
こうして高知の支部長は、双方にまつたく関係のない町道場の主、北村という、講道館五段の男に持つて行くこととなり大騒動になろうとした事件は、どうやら無事に落着したのであつた。

脳溢血と神経痛の治療に成功

大阪にいる間は、この他、指圧療法施術者の組合を作ったり、易者の組合を組識するのに骨を折つたり、かなり忙がしく動きまわつて、東京―大阪の間を往復していた。が、昭和三年に上京して、神田の小川町に居を構えて、落着くことになつた。

そのころ私は心霊研究からさらに発展して、神経系統の作用や組織の研究に取組み、殊に脳溢血については三千のデータをあつめており、すすめる人もあつて、これで学位をとるつもりで研究をつづけていたのである。

私の研究は皇漢医学を主としたもので、医者が見放した重症でも、高血圧とか神経痛は、私の手にかかると立ちどころに治つた。これを伝え聞いていろいろな人が私を訪ねてきたが、大橋秀一という人物と深く交際するようになつたのも、それがきつかけであつた。

大橋秀一は明治四十一年に帝大医学部を出た新進の医師であつたが、自分の愛児をエキリで死なしてから、現代医学に自信を失なつてプッツリと医師を廃業し、事業家に転向した。もともと三井財閥の一族であつたから、事業家としても忽ち成功し、日本で最初にフォード車の輸入をするなどして、相当の成績をおさめていた。

私と知り合つたのは、彼の親戚で、やはり三井の重役をしていた者が、重い神経痛にかかつて、あらゆる療法を試みても効果がなかつたというのを、私が一回の手当でケロリと治してしまつた。そ

れから私を訪問するようになり、たちまち親交を深めたのであつた。

この大橋と意気投合したすえ、私たちは研真会というものを創つた。これは形而下、形而上、一切の真理をきわめようという、遠大な理想を掲げたものだが、大橋が最高学府を出ながら近代医学に失望し、古来の皇漢医学に救われたという現実を直視し、私の趣旨に双手をあげて賛成したものであつた。

メンバーには例の蒙古王、佐々木照山をはじめ、革新クラブの長老大竹貫一、清瀬一郎（戦後、文部大臣）、頭山満、若槻礼次郎（後の首相）などが、さつそく参加した。さらに大橋が三井の一族であるところから、財界の大立物がこれに加わり、大倉喜八郎、根津嘉一郎、馬越恭平、大川平八郎、早川徳次などの連中とも、親しく交わるようになつた。

すると当時の政治家は、みんなピイピイして、私が金持とつきあいが多いものだから、衆議院の控室に顔を出すと、

「藤田さん、どうだろう、ちつとどうにかならんか」

と、金の相談をもちかけてくる。私はそのころまだ警察署の武道教師や陸軍戸山学校の教官をしていたほか、前の「神様」などの延長で、人事百般の相談をうけ、おサイ銭が上がつていたから、前記の富豪たちに相談するまでもなく、そのくらいの金は、どうにかなつた。

だから、実際は貧乏していたのであるが、見る者からみれば、私が当時の大政治家、大実業家から信頼をうけ、別懇にしていたから、私は今に日本の大立物になると思つていたらしい。

横須賀の市長をした安藤重起など、
「藤田君は、当然もつと金と力の上に、アグラのかけた人間だ」
といつたが、私ももつと金と俗智を働かし、政客や財閥を利用して自分を立てようとすれば、いくらでも出来る立場にあつたが、性分というか、そういうことを好まぬたちだから仕方がない。人生の幸福とか男子の本懐とするところが、地位や名誉や金儲けにあるなどとは思わないのである。
そうかといつて他人に節を屈したり、お情けを蒙つたりするほど貧乏もしていなかつた。必要なだけの金は大地から水が湧くように、おのずから身についていたのである。
そういうわけで、藤田に頼めば多少の金は、いつも何とかなると、当時の代議士連中から妙な信用を得て、よくヒソヒソ話に引つ張り出された。
あるとき、一ノ瀬斧太郎という退役中将が、
「藤田君、二千円ばかり、何とかならんか」
と、私の宅へ来ての相談だつた。私も、すぐには出来なかつたので、二、三日待つてくれれば、何とかしようと引受けた。
すると、一ノ瀬は、
「金が出来んと家に帰れんので、その間、置いてくれ」
と、私の家に泊りこみ、朝は家の廻りの掃除をしたりして、居候をきめこんでいた。この一ノ瀬という中将は、士官学校時代、蔣介石の面倒をみたことがあつて、蔣介石は師の礼をとつていた。

日露戦争のとき、チフスを患つている最中、渡河作戦が始まつた。間断のない猛烈な下痢だつたが、馬上にたれ流しで、ザブザブ河の水で洗いながら、敵陣に突込んだという勇将である。
昔から子飼いの連中が大勢代議士になつていて、よく衆議院に顔をみせているうち、私と兄弟分のつきあいをするようになつたのである。

香典を使い込む代議士

この一ノ瀬が暫くすると、今日は衆議院の閉院式があるからといつて、家を出ていつたが、どうも浮かぬ顔であつた。
そして、夜になつても帰つて来ない。どうしたのだろうと思つていると、夜中の二時ごろになつて、一ノ瀬が交通事故で重傷を負い、築地の林病院に入院している。すぐ来てくれと、電話がかかつてきた。
びつくりして飛んでいつてみると、一ノ瀬は日比谷公園裏の交叉点で、電車にはねとばされたとかで、脳内出血のため、もう意識は不明だつた。私が行つてから、まもなく息を引きとつてしまつた。
私も金のないところだつたが、遺骸は自宅にひきとつて、葬式を出すことにした。一方、電車が轢いたのだから、葬式代を電気局に出させようじやないかということになり、湯浅凡平と関直彦が交渉にいくと、家族もちなら、七百円以上千円まで出すが、そうでないから四百円しか出さないと

いう。

私はこれを聞いて憤慨した。人ひとり殺しておいて四百円とは何ごとだ、そういう無礼をいうなら斬込みをかけてやると、私は壮士たちに支度を命じると、家にかけつけていた清瀬一郎、大竹貫一、小泉又次郎らの長老が、まあ、まあ、といつて中に立つことになり、その種のケースとしては最高の七百円を出させることで納まつた。

私が葬儀委員長で、関直彦、大竹貫一、小泉又次郎らの人々が委員で葬式を出すことになつたが、それが大変な葬式になつた。というのは、死んでからわかつたのであるが、一ノ瀬は大隈重信の従弟で、鍋島侯とは親類だつたのである。それに、閑院宮殿下のお付武官をしていた関係から、近衛師団から一個中隊の儀杖兵がきて、捧げ銃をする、現役の各大臣が全部、顔をならべて焼香に来る。代議士連中は、受付やら会計やらを引受けてとびまわつてくれたので、私は大して動かずにすんだが、それだけに費用もえらくかさみ、すべては借金でその場をしのいだ。

しかし、香典もだいぶ集まつたわけで、これは係になつた衆議院の代議士たちが、いずれ整理してから持つてくるというので、そのつもりでいたが、何日たつても音沙汰がない。

こちらから衆議院に出かけていくと、みんなコソコソと姿を消してしまう。どうもオカシイと思つていると、あとからわかつたことは、その連中が、赤坂や烏森で芸者をあげ、その香典をみんな使つてしまつた、というのである。

とんでもない奴らだと憤慨したが、使つてしまつたものは戻るわけでもなし、みんな、頭を掻き

掻きあやまるので、私も不問に付することにしたが、それ以来、その連中は私に頭が上がらぬことになつた。この中には、先の大臣や今の大臣、自民党幹部などもいる。むしろ愛すべき若気の至りというべきで、実に愉快な時代だつた。

拳骨の連鎖反応

そのころ書生や居候は、いつも七、八人から十人くらい家にゴロゴロしていたが、夫婦者の居候にころげこまれて面喰らつたことがある。

海軍退役大佐で小田中誠一郎という人物がいた。これが神奈川県から代議士に出るというので、もと部下だつた菅野留五郎という、やはり退役の海軍少尉かで、そのころ横須賀で風呂屋を経営していた男から借金し、選挙運動に打つて出たが、みごとに落選してしまつた。

菅野は退職金やら風呂屋でコツコツ溜めた金を使われてしまい、私のところへ泣きつきにやつてきた。一杯呑んでやつてきたので、喋つているうちに脱線し、そのとき同席していた児玉という私の門弟に、

「おれは柔道三段だ、お前なんか若いくせにだらしがねえぞ」

とタンカを切つて、頭ごなしにサンザン悪口を言つた。すると児玉が私に、

「先生、私は生まれてから、こんなに侮辱されたことはありません。聞けば柔道三段とかで、たいそう腕自慢のようですが、殴つていいでしょうか」

と、改まつて言うから、
「よし、やりたけりゃ、やれ」
と、私も別にとめなかつた。
すると児玉がとび掛かつていつて、私の目の前で大格闘になり、菅野がコテンコテンに殴られてしまつた。
あくる日、菅野が顔を腫らし、頭にコブをこしらえてやつてきて、
「先生は薄情だ、私があんなにヒドイ目にやられているのに、知らん顔をしていた。くやしい」
といつて、いきなり私に武者ぶりついてきた。そこで暴れさせないように、両手でグッと頭を抱えこんだところ、こんどは私のヘソに噛みついた。私はそのころ体重二十貫ほどあつて、腹が出つ張つていたから、歯を立てやすかつたのだろう。
「痛い、この野郎！」
私は菅野の首筋をつかんで、畳にゴリゴリ顔を押しつけた。菅野がヒイヒイ泣くので、ゆるしてやつたが、顔の半分が擦りむけて、血が滲んでいた。
菅野は、きのう児玉にやられ、今日は私に痛い目にあつて、散々だつた。
「先生、私は生まれてこんな目にあつたことはない。これというのも思えば小田中のためで、あいつには虎の子の金を使い込まれてしまつた上、こんなことになつて我慢がならん。これから小田中をやつつけに行きます」

「おお、いいだろう。それで胸がサッパリするんなら」
「先生も一緒に行つて下さい」
「助太刀をしてくれというのか」
「いや、助太刀なんか頼まないが、見届けてもらいたい」
そういうので、一緒に出かけた。
小田中は「自由通信」という小さな通信会社につとめていて、赤坂の事務所に夫婦して寝泊りしていた。行くと通信のガリ版刷りをしていた。
菅野は玄関にとびこむなり、
「やい、小田中、出て来い、話がある」
と、勢いこんでどなつたが、小田中は昔の上官の貫禄で、
「何だ、ちつと待つとれ」
と、悠々とガリ版をゴロゴロやつている。
「小田中、貴様のためにヒドイ目にあつたんだぞ、こんちきしよう」
菅野は、金のことなどを口ぎたなく罵りながら、ふみ込んでいつて、いきなり拳骨で小田中の頭を殴つた。二人は取つ組合いになつて、上になり下になり、折から雨が降つてきたが、その庭の上まで、ころげおちて、泥まみれになつての殴り合いだつた。
どつちも五尺五、六寸の上背のある大男で、腕力自慢だつたから、なかなか勝負がつかず、着物

はズタズタに破れる、あつちこつち擦り傷や引つ掻き傷で血だらけになる。両方ともグロッキーになつてしまつた。

私は、両方を引き離して、

「もう、やめえ、それだけやつたら、どつちも気がすんだろう」

と、仲直りをさせたが、小田中は昔の部下に殴られたのだからどうも内心釈然としないようだつた。そして形を改めて言うには、

「藤田先生、今日になつて菅野留五郎に乱入されるとは、自分としてまことに心外でした。思うにこの原因は似鳥（にたどり）にあるようだ」

似鳥というのは、彼と一緒に仕事をしている自由通信の社長である。

「私はこんどの選挙に出たつて、当選の自信がないから、いやだといつたのに、似鳥のやつが大丈夫だ大丈夫だとしきりに言うので、立候補する気になつたのだが、案の定落選した。菅野に借りた金も返せんようになつた。それでいて似鳥は何もしてくれない。私が今日、菅野に殴られたりしたのは、考えてみれば似鳥のせいである。私はあいつをぶん殴つてやりたいと思うが、先生、どうでしよう」

「そりや、君が殴りたいと思つたら、殴つたらいいだろう」

「私が似鳥（にたどり）を殴つたら、ここに居られなくなります」

「こんなところやめたつて、どうにかなるだろう」

「そうですか」

といつていたが、その晩、十二時ごろになつて、雨戸をドンドン叩くやつがいる。

こんなにおそく、誰だろうと思つて戸をあけてみると小田中の夫婦で、似鳥（にたどり）を殴つてきたという。

こうして二人で転げこんできて、丁度一年、私の家に居候していた。

生き神様を廃業して大阪にとび、そこで数年間、いろいろな事件に遭遇したり、建設的な仕事をしたりした私は、いつのまにか三十をいくつか越しており、人間的にも、この頃は、だいぶ貫禄がついてきたらしい。「忍術家の藤田」といえば、政治家の間にも、ちつとは知られるようになつたのである。

現代戦と忍術

満州事変の真相調査

昭和六年九月十八日、突如、満州事変が勃発した。数年前から満州には、ただならぬ妖雲をはらんでいたが、この年に入つて六月二十七日、中村大尉の虐殺事件があり、さらに七月、万宝山事件が起つて、支那側の挑戦的態度は露骨化してきたが、九月十八日の夜には王以哲軍下の支那兵が、柳条溝の満鉄を爆破する暴挙に出たので、わが奉天独立守備隊は、同夜のうちに北大営を攻撃し、戦火はたちまち全満に及ぼうという形勢になつた。

九月十九日、新聞の号外をみていると、私は、陸軍省軍務局長の小磯国昭少将から急な呼出しを受けた。行つてみると、三浦真将軍が先きに来ていて、「やア」といいながら、ニヤニヤ笑つていた。

呼び出された用件というのは、西園寺公からの特別の指令により、満州で起つた事件の発端から

現状を、三浦と私とで詳しく調査して来いとのことである。待遇は勅任二等で、将官並みということだつた。

この三浦真という人物は、一等卒から陸軍少将になつた人で、日露戦争では中尉で第二師団（長は西中将）から出征し、遼陽会戦のヤマといわれた。有名な弓張嶺の夜襲には、多門二郎（静岡県の生れ、後第二師団長、昭和九年没）と共に参加した。

多門は弓張嶺のふもとで、敵弾に頬を貫かれて倒れたが、三浦は頂上に駆けのぼつて露軍に突入し、たちまち数人を叩き斬つた。

敵の将校らしいやつが、拳銃を向けたので、大上段にふりかぶつて斬りおろそうとしたとたん、急に両腕が動かなくなつてしまつた。

それを、思い切つてふりおろすと、体がにわかに軽くなつて、縦横無尽に斬りまくり、十三、四人をことごとくケサがけに斬つたとき、とつぜん自分も後ろから右肩をやられた。

ふりむいてみると、原田という少尉である。とにかく真つ暗な中の乱戦なので、敵味方の区別もつかなかつたらしい。

右肩を斬られて、どつかとそこに坐りこんでしまつた。原田少尉は、まちがいとはいえ上官を斬つたので、びつくりして介抱したが、三浦は、日ごろ自分が教えていた通りの斬り方をしたので、叱るどころか褒めたという。そのうち気を失なつてしまつた。

夜襲は成功して三浦は野戦病院に収容されたが、左乳の上に、鍔元からボッキリ折れた露兵の剣

が突き刺さつて、剣先が三寸も背中に抜けていた。
看護兵たちが抜きとろうとしたが、どうしても抜けないので、背中の方から剣先を石で叩き、やつと抜いたという。思うにロシヤの将校を斬ろうと大上段にふりかぶつたとき、露兵が上官の危機とみて、銃剣を投げた。それが胸に突き刺さつたので、急に両手が動かなくなつたものらしい。それを無理にふりおろしたので、鍔元からボッキリと折れ、また急に身軽になつたのである。それからまた、十三、四人を斬つたというのだから、えらい精神力である。
原田少尉に斬られたのは、わりに軽傷であつた。というのはその頃の軍装は、右肩から風呂敷包みのように雑のうを背負つていて、その中にカン詰があつた。それが激戦の最中、ズリ上がつて肩のところにあつたから、刃がそれに当つて軽傷ですんだのだ。
ところが胸の剣は、心臓から一寸五分ほど上を貫いていて、ひどい重傷の上、呼吸も止まつていたから、てつきり戦死と判断し、屍体置場に移された。それから三日後に火葬に付されることになつたが、火葬の前は形式的に脈をみるのが儀礼となつていた。
ところが軍医が脈をとつてみると、かすかながら脈をうつている。「生きてるぞ」ということになつて、病室にまた逆もどり、いろいろ手当を加えた結果、奇蹟的にいのち拾いをしたという。かれの勇名は天聴に達して、胸から抜きとつた剣は、のちに、皇居内の振天府に保存されることになつた。
少将で退役になつてからは、実戦で鍛えた武道を戸山学校で教えていたが、私が同じ武道教官だ

つたし、すこぶる気が合つて、それで私を兄貴と呼んでいた。
夜が夜中でも、気が向いたら訪ねてきて、玄関から、
「兄貴、いるか」と、どなる。
「いるぞ」というと、五尺六寸の巨体を揺すつて、ドカドカと上がつてくるのだが、豪放らいらく、ユーモアにも富んでいて、あるとき例の調子で上がつてきたが、
「今日は供がある、副官をつれてきた」
「誰も居ないじやないか」
「いや、今ごらんに入れる」
袴と着物の前をまくつて、取り出したのは銘酒の一升瓶であつた。
「どうだ、腹で燗をしてきたから、フクカンじやないか」
そういう冗談を言つて笑いとばす一面もあつて、なかなかの快男児であつた。

「夕日と拳銃」の伊達順之助との再会

私たちは軍の輸送船で、神戸を立つた。軍旗を奉戴してある隣室という、最上等の部屋を与えられて大連に着いたが、着くとすぐ新聞記者のインタービュウがあつた。このとき迂闊にも写真をとられたのは、第一の失敗であつた。
大連には川島浪速がいた。川島浪速は清朝の末裔、粛親王と義兄弟で、溥儀の身辺を世話したり、

川島芳子の仮親となつたり、満州浪人の大御所的存在であつた。

ここに行けば事件の真相がわかるはずと、二人で訪ねると、川島浪速はもう老齢で耳が遠く、筆談でなければ通じなかつた。

このなかで川島は、甘粕正彦（大杉栄を殺害してのち満州に渡つた）と中野某が、溥儀を満州皇帝に擁立しようとしているが、溥儀は人質みたいなもので可哀想だ、日本軍の工作は、いささか度が過ぎていて、これではかえつて日本の将来に禍いを招く結果になるのではないか、と悲観的な意見を述べていたが、いまからみれば卓見といわねばならない。

奉天に行くと、関東軍司令部から板垣征四郎（高級参謀）、土肥原賢二（奉天特務機関長）、石原莞爾（作戦参謀）の三人が、駅まで出迎えに来ていて、大和ホテルに案内された。大和ホテルが軍司令部になつていた。そこで前記の三人が、事件の発端からその後の経過について詳しい報告をしてくれた。しかし、この時の報告では、柳条溝の爆破は、あくまで支那の正規軍の仕業ということだつたので、私たちはこれをそのままに受取つていたのである。

これが関東軍の謀略で、関東軍みずからのデッチ上げと知つたのは、よほどたつてからだつた。しかし、打ち続く排日侮日に、とうとう勘忍袋の緒を切つて、ここに張学良征伐のキッカケを作つたいきさつは、東京裁判でこそ侵略の烙印をおされたけれども、関東軍の首脳とすれば、一片の私心があつたわけでなく、止むに止まれぬものがあつたと受取れるのである。

そもそも満州の軍閥というのは、ことごとく緑林（馬賊）の出で、暴力を振つて金ができると、

私兵を養い、自分を守らせる。この私兵がだんだん組織的になつて、大きい勢力になつたのが張作霖とか馬占山、または王徳林といつた連中なのである。

日本から出かけていつた満州浪人たちは、はじめ張作霖を助けてこれを大成させた。張作霖も初めのうちこそ、その恩義に感じて日本の言うことをきいていたが、だんだん力が大きくなつてくると、言うことをきかなくなつた。それだけでなく、力を過信して尊大になり、日本軍と戦えるくらいの気持で、日清、日露の戦役により、同胞の血をもつて購つた満州の既得権益をも侵すようになつたから、気の荒いのが張作霖を暗殺してしまつた。

そのせがれの張学良が、少し足りない上に坊つちやん育ちと来ているから、日本を目の仇とするようになつたのは、已むを得ぬといえば已むを得ぬようなものである。

それから日支関係が険悪になつて来たのだが、川島浪速翁が言つたように、出先き軍部の、中央を無視したやりすぎが、将来の禍根となつて、国家百年の計を誤る結果となつたのは事実である。

この一事をもつてしても、軍部の統制がすでに乱れていたことは明らかで、これが後に五・一五事件や二・二六事件の因つて来る源となり、さらに軍閥が天下の権を握つて無謀な大戦に突入するような事態に立ち至つたのだ。

大和ホテルの一室を宿にした翌日、ボーイが、御面会人ですといつて、名刺を見せた。「陸軍少将・張宗援」とある。

「知らんな」

「向うでは、よくご存知です」
と言つている間に、ドアの向うに長身の堂々たる軍服姿の巨漢が現われて、ヌッと入つてきた。
「伊達だよ、順之助だ」
と、名乗つたので、やアやアということになつた。伊達順之助は「夕日と拳銃」という小説にも書かれたが、宇和島伊達の御曹子で、少年時代は私と同じ小石川に住み、暴れんぼ仲間として一方の雄であつた。十六、七の頃、ピストルで人を射殺し、満州に逃げて馬賊の群に投じ、そのころ相当の勢力を張つていたが、張宗援という支那名を使つていたのは知らなかつた。
「君が出てきたという知らせを聞いたんで、さつそくとんできたんだ」
と、伊達順之助の張将軍はひどく懐かしがり、奉天第一の料亭「粋山」でたいへんな御馳走になつた。「夕日と拳銃」にも書いてあつたように、彼は拳銃の名手で、酔うとピストルをぶつぱなすくせがある。その夜もいい機嫌になつてから、天井の隅の三角の柱を狙つて、一発ぶつぱなした。
さすがに狙いは外れていなかつた。私にも一発ぶてというので、伊達の拳銃を借りて同じところを撃つた。

首に十万元の懸賞

それから敦化、長春、ハルビンと巡遊したが、ハルビンには今度の事変で鬼部隊長とうたわれた多門二郎が、師団長で羽振りをきかしていた。同行の三浦真は前述のように多門二郎とは日露戦争

(昭和7年3月，打虎山にて。左から三浦真，嘉村竜二郎，著者)

以来の親友なので、翌日、さつそく師団司令部に訪ねていつた。
ちようど部隊の大部分は、王徳林軍の討伐に粛々として出かけて行くところだつた。
多門師団長は、こんどの討伐には自分もみずから行くはずのところ、二人が来たというので、わざわざ時間をこしらえて待つていたという。自室にドテラ姿で二人を迎え、さつそく酒宴となつた。
飲むほどに酔うほどに、三浦は「おれが一つ唄う」という。多門はあわてて「いや、おれは今日まで昼も夜も、軍服のボタン一つ外さない厳正さでやつてきたのだ。師団長の部屋から酔つ払いの唄声がしたというのではまずいからやめてくれ」
という。三浦はトラになつていて、
「そんなら貴様唄え」
「おれは駄目だというのに」
「それなら藤田、唄え」
という荒れ方に多門二郎も手を焼いて、近くの料亭にお忍びで出かけた。それからまた痛飲したが、ホテルに引揚げる段になつて、三浦は芸者を三人連れて行くという。
「三人では数がちよつと多すぎないか」

多門が笑つていうと、
「将軍は乗替え馬が必要じや、アッハッハッハ」
三浦は豪快に笑いとばして自動車を命じ、大和ホテルへ引揚げたのだが、ホテルに着くと、三人の芸者のためにわざわざ一室をとらせて、翌朝帰し、自分は一指も触れなかつた。そして私に言うには、
「これでいいんだよ。多門は鬼部隊長などといわれ、固くなりすぎているんで、ちよつと活を入れてやつたんだよ」
と、これもまた、友情の変形というものであろう。
それから中村大尉事件の真相を調べるため、チチハルに出て洮南に向つたが、この辺からは護衛なしで、私たちは支那服を着用し、敵地を通る洮昂線に来た。
ここは馬占山の勢力範囲で、沿線には銃を持つた支那兵が大勢ウロウロしている。
汽車が昂々渓にとまつたときであつた。ふと客車の中を向うの方から、日本語で、
「藤田さんと三浦さん、居ませんか!」
と、大声に呼びながら来る者があつた。
(おッ、ここだ!)
と、危なくノドまで出かけたが、瞬間、電光のように脳裡をかすめるものがあつて、私は三浦に(返事をしてはいかん!)と、目顔で合図した。

それは大連に着いた翌日のこと、角田という昔の門弟が、支那正規軍の中佐の服を着て現われ、挨拶に来たわけだが、そのとき、
「先生、きのう新聞記者とのインタービュウで、写真を撮られたでしよう。もうそれが前線に廻つて、あなた方二人の首には六万元から十万元の懸賞金がかかつていますよ」
と、知らせてくれたことだ。日本人のいない満州の奥地で、日本語を聞くだけでも懐かしく、まして自分の名前を呼ばれたりしたら、ウッカリ返事をしたくなるのは人情だが、それと気がついたのは、私にまだ運があつたといえよう。
気をつけて見ると、客車の出入口には二、三人ずつの支那兵が、銃をかまえて見張つている。私たちの名を呼びながら近づいてきたのは、便衣の支那人で、拳銃を忍ばせているのは一目で見当がついた。全然見たこともない男だつた。私たちは、つとめてトボケた顔をしていたので、たいして気にもとめず、われわれ二人の前をすれすれに通りすぎて行つたが、いささか薄氷を渡るという思いだつた。
洮南では出先特務機関と連絡して、中村大尉遭難の真相をさぐり、四平街から錦州に来ると、ここは戦闘の第一線で、数日前まで馬賊の巣窟だつた場所を日本軍が占領し、連隊本部が設けられていた。連隊本部には、関東軍司令部の方からあらかじめ通知があつたとのことで、連隊長以下将校多数参集し、恩賜の酒やビールでひじような歓迎をしてくれた。ここで私たちは、初めて敵弾の洗礼をうけたのだつた。

馬上に悟る死生観

錦州に着いたのは厳冬の頃となつていて、市街は一面の銀世界だつた。その夜は吹雪になつて、連隊長の次の部屋に寝せられたが、底冷えがひどい上に、酒やビールをたくさん飲んだせいか、たびたび小用を催しては目を覚ました。

室の外には不寝番の衛兵がいて、ドアをあけるとサッと敬礼する。あいにくと仮兵舎なので、便所は別棟になつていたが、そこにも番兵がいて捧げ銃をする。

捧げ銃は、十歩離れたら銃をおろしてもいいわけだが、便所は七、八歩のところにあるものだから、私が用を足している間、ずつと捧げ銃をしている。吹雪の真夜中、小便をしているのに、後ろで捧げ銃をされていると思うと、思い切つて小便も出切らないのか、どうも若干残つているようで、床に帰つてしばらくすると、また催してくる。

これには困つた。仕方がないから、また出かけて行く。また捧げ銃をされて、恐縮しながら用を足すということを、何べんか繰返した。

そんなことで熟睡もできず、ウツラウツラしていると、耳なれないラッパの音を聞いた。ペラペラ、ペラペラ……と、日本軍のラッパにくらべると薄っぺらな、頼りのない音である。続いてパリパリ、パリパリと豆を煎るような銃声に混つて、ボーン、ボーンと迫撃砲の音も聞えてくる。

すると、廊下にあわただしい靴音がして、隣室の連隊長に報告する副官の声が、手にとるように聞えてきた。

「敵の正規兵およそ何大隊襲撃、前線は苦戦……」というような内容だつたが、連隊長は「よし、直ちに何々方面へ向つて出動」と、命令を下した。

間もなく参謀が来て、

「直ちに出動です。ここにいると危険ですから、司令部と一緒に行動を願います」

と、いう。

消燈した中で出発というのだから、私らも大あわてだ。

「藤田教官殿、この馬に乗つて下さい」

と、持つてきてくれたのが特別大きい馬で、アブミの長さを調節する暇もなく乗つかつたが、足が届かない。すぐに出発である。

馬は、両股で挟むようにして乗るものだから、アブミはどうでもいいようなものの、凍つている大地に鉄蹄がツルリ、ツルリとすべるので、乗りにくいことお話にならない。

そのうちに前面から、一斉射撃を浴せてきた。ピュウ、ピュウ、ピュウと、雨あられの形容そのままで、耳もとをかすめる弾など、灼けた鉄の棒のように熱く感じる。思わず馬の首にしがみついてしまつた。

東の空は白々と明けてきて、弾はいよいよ激しくなつてくる。私たちは連隊長はじめ幹部数名、

護衛の兵隊十名、みんなで二十人足らずのひとかたまりで、敵の好目標となつたらしい。
　私もこのときばかりは、いよいよ駄目かと思つた。一瞬々々、こんどはやられるかと、正直にいつて、全身冷汗ものだつた。
　と、このとき、ふと思つたことは、こんなに弾がくるのなら、二尺や三尺、頭を上げていようが下げていようが、命中するときは命中するだろうということ。同時に、ゆうべ司令部の歓迎の席で、副官たちから、
「藤田教官殿は、大そう度胸のある方だと聞いていますが、度胸を練るにはどうすればいいでしょうか」
　などと質問され、私が酔つたまぎれに、それはこうしろ、ああしろなどと演説をぶつたことが思い出された。それは陸軍戸山学校の教範に「剛勇」の実例として三浦将軍の話があつたし、同時に「鍛練」の実例として私のことも出ていて、若い将校連中には、三浦や私が武人の典型的人物のように映つていたらしい。
　それを思い出したから（これはいけない、どんな格好をしていても、当るときは当るんだ。馬の首にしがみついたまま死んだのでは、武人の典型もクソもあつたものじやない。どうせ死ぬのなら、見苦しからぬ態度をしなければ……）と、気がついた。
　それから私は馬上に頭を起して、グッと胸を張つた。あたりを見まわすと連隊長を始めとして、若い将校たちはもちろん、三浦も、みんな馬の首にしがみついている。

　そこで私は、大声で叱咤した。
「おい、見苦しいぞ。支那のヘロヘロ弾に敬礼するなんか、みつともないと思わんか」
　すると、横にいた副官が、
「藤田教官殿、頭を上げてはいけません、危いですぞ！」
　と、しきりに注意する。
「なアに、当るものならどんな格好してたつて当る。当らんときには当らんよ」
　私は、つとめて平然と、あたりを見わたしたりしながら、馬を進めた。
　そのうち日本軍の進軍ラッパが鳴つて、突撃にうつり、飛んでくる弾もだいぶ数が減り、音もビューン、ビューンと尾をひいて聞えるようになつた。
　前進基地に落着いてから、このときの話が出て、「藤田教官は無茶だ」という者、「いや、さすが藤田教官、あんなに弾がくるのに平然としていた、大したものだ」という者と、賛否さまざまだつたが、実際のところ、こちらは平然どころか大いに肝を冷やし、命をあきらめた上の棄鉢だつたのである。
　しかし、このときの経験で、どんなに弾が来ても、よくよく運のわるい奴には当るが、たいがいは当らぬものだ、当らぬものならビクビクして、見苦しい態度をとるものではない……と、しみじみ悟つたわけである。それから後もたびたび敵弾を潜つたことがあるが、いつも錦州の経験を思い出して、うろたえるようなことはしなくなつた。

満州から帰ると私は、葉山御用邸近くの旅館に一週間ほど閉じこもり、実地踏査の報告書をつくつて、小磯少将に提出した。

その後は従前どおり、陸軍戸山学校と、警視庁特高課の者に、実地に即応した武術を教えた。それは主に武器を持つた敵を素手でたおし、あるいは捕縛する武術で、南蛮殺倒流に私独自の発明を加えたものである。

このほか私は、忍術が映画や大衆小説にさかんにとりあげられ、ほとんど誤り伝えられているのにかんがみ、昭和十年「忍術秘録」という本を書いた。そして機会あるごとに、ジャーナリズムの要求に応じて、忍術の実体を紹介し、大衆に正しい認識が得られるよう努めたのである。

蔣介石暗殺の密命

昭和十二年、戦火は満州から支那大陸に拡大する形勢を示してきた。満州事変は昭和八年三月の熱河作戦によつて、いつたん終結したが、蔣介石は反満抗日を国内統一の旗じるしとして、しばしば協定を破り、失地回復を叫んで軍事行動を起し、戦雲は刻々大陸の空を覆つてきた。

この背後にはアヘン戦争以来、支那全土の植民地化を狙うイギリスはじめ西欧諸国、日本の強大化に焦心するアメリカ等の手が動いて、国際情勢はいよいよ複雑微妙なものがあつた。

一方、満州事変に成功した軍部は、騎虎の勢いを駆り、外交手段を手ぬるしとする実力一辺倒で押しまくろうと、意気当るべからざるものがあり、今から思えば日本の危機は、この辺から本舞台

に踏みこんでいつたわけだ。

この間にあつて、私はアメリカの情勢を詳しく調べる必要があると思つた。それには頭を丸め僧形で渡米する計画を立てていたが、その前に一度、台湾をみておきたいと思い、昭和十二年の初夏、軍から一等パスをもらい、台湾旅行に出かけた。

基隆に上陸して台北、台中、台南と次第に南下し、台湾の最南端ガランピから船で高雄に向う途中、大陸では芦溝橋事件が勃発し、私は軍からの至急電報で、急ぎの呼び出しを受けた。同年の七月七日であつた。

陸軍省に行つてみると、満州、上海、蒙古方面に散らばつている少尉以上中佐までの特務機関の特別教育を、現地でやつてもらいたいという依頼だつた。

つまり、これは後で述べる東京の中野学校のようなものを、新京とハルビンの二カ所に設けたいから、すぐに赴任して欲しいというのである。さつそく引受けて私は満州に渡り、そこで二、三百人の将校たちに六カ月間、諜報連絡、暗号解読、変装術、忍込法、暗殺法などの教育をした。

翌る年、日本に帰つてくると、国家は、いわゆる非常時態勢に入つていて、目黒の海軍大学の裏に「国民精神文化研究所」という、教育者再教育の機関が出来ていた。ここの所長は紀平正美博士で、私は講師の一人に推され、日本精神の講座を担当した。集まつてくる人たちは全国の中学校、高等学校、専門学校の校長、教頭というような老齢の教育者で、皆、従三位とか正三位とかの位のある人たちばかりだつた。

大陸の戦況は、勝報につぐ勝報が伝えられたが、実際にたたかつてみて、支那大陸の奥のふかさと広さには、今さらあきれかえるばかりだつた。重慶の山奥に脱れた蔣介石は「日本軍は大陸の線と点を占拠しているにすぎぬ」と放言し、軍部を口惜しがらせたが、広漠とした大陸には、事実、何百万の兵隊を投入しても、完全占領は不可能だつた。

北京と南京には、それぞれ親日臨時政府が樹立されて「蔣介石を相手とせず」の近衛声明を実行しているはずであつたが、徹底抗戦を呼号する重慶を無視することは、事実上できないのだから始末がわるい。

昭和十四年二月、私は参謀本部から呼出しをうけた。

広い豪奢な参謀総長宮（閑院宮元帥）の部屋に、本多少将と私だけが向いあつて坐つた。少将の表情は、いつになく真剣そのもの、彼は鉛筆をとつて小さなメモにスラスラと書いて、私に示した。極秘の筆談である。

「蔣介石の暗殺をお願いいたし度し」

これを見て、さすがに私も驚いた。考えてみると、なるほど支那軍は蔣介石の私兵のようなものであるから、御大将を消してしまえば、事変も一挙に解決するかもしれぬ。しかし、それにしても、とんでもない御用を持ち掛けてきたものだと思つた。私は諾否の返事をしないで、

「特に小生に御依頼さるる理由如何」

と、たずねた。

すると『重慶』という二字を書いて、

「ここを地上部隊で占領するのは、地理的に殆んど不可能です。飛行機の着陸場はないし、空軍でもダメです。小数部隊の潜入ということも考えられますが、ここに行くには、どこから行くにしても、大きな橋が三つか四つあつて、これがまた、最大の関門になつている。ここを単身潜行していけるのは、藤田さん以外にないと思い、お願いした次第です」

と、いうことである。

私も事の重大さに、しばらくの間、瞑目して考え込んだが、皇軍百万の精鋭をもつてしても難しとするところを、一人の藤田西湖に期待をかけてくれるのは、これこそ忍術の真価をみとめてくれての上のことであり、私としても男子の本懐と申さねばならぬ。『正忍記』に、

「行難き所も能く忍び、道なけれども能く帰る。是れ名人の忍びなりというべし。その術甚だ深し」

とあるが、これこそ忍者の本領とするところだ。私は熟慮の上、少将の依頼を引受けることにした。

「おう、やつてくれますか。おたのみ申します」

少将は両膝に手を突いて、半白の頭を丁重に下げた。

「ついては申すまでもなく、これは極秘中の極秘で、軍部の中で承知しているのは参謀総長以下数人と、この本多だけです。先生も奥さんにお洩しになるのは致し方のないこととして、御親戚のどなたにも知らせないで、ごく内密にさつそく明日にも出発して下さい。もし先生の御旅行を知つて

近所の人が見送つて来るという場合は、東京駅からまず北海道に立つて下さい。北海道から飛んでも、勿論、軍で最大の便宜を計りますから、一ヵ月くらいで帰つてこれようと思います」

そのころは出征兵士の歓送がさかんで、隣組の連絡が緊密だつたから、長い留守を秘密にしておくわけにいかなかつた。そこで近所に知れたときは、北海道へ一、二ヵ月の予定で出かけたことにしておくように、手筈をととのえておいた。

それから、予定に変更のないかぎり、北京へは何月何日の何時何分に着くから、プラットホームに出迎える出先機関の者に目じるしとなるよう、胸に小さな日の丸のマークをつけること。外套をぬいで左手で持つていることなど、いろいろ細かい打合せをした。

私は一等パスをもらい、身軽な国民服で、あくる日指定の時間に東京駅へ行つた。東京駅は出征兵士の見送りで、何十組もの旗の群が、歓呼の声をあげて沸きかえつていた。

私には家内一人だけが送つてきたが、ホームの階段を上がつていくと、私服に黒いトンビを着た老人が近づいてきて、

「ごくろう」

と、あたりをはばかるような、低い声である。沢田参謀次長であつた。それから本多少将、鈴木中将と、みな私服にトンビの目立たぬ服装で、将官級ばかりが五、六人、それもひとかたまりにならずに一人々々、近づいてきて、ねぎらいの言葉をいうのだつた。

土肥原将軍の反対意見

朝鮮まわりで北京に着いたのが二月の終りごろ、大陸は厳冬の中にあつた。

土肥原中将がここの司令官で、東京からどういう指令を受けていたのか知らぬが、私を迎えると、

「ちつと日本とは陽気がちがうが、ゆつくり遊びにきたつもりで二、三年もいるんですな。そのうちには馴れますよ」

私は、土肥原は何を勘ちがいしているのかと思つた。よく問いただしてみると、私の北支へ派遣された使命は、「特務機関の育成及び白兵戦闘の指導その他」ということである。

参謀本部から私の受けた依頼は「その他」のなかにかくされている。これは私の本当の使命を、参謀本部が土肥原にも内密にしているのか、それとも単に機密の洩れるを惧れて、通信文に伏せてあつたのか、その辺の判断に私はいささか迷つた。

ともあれ、当分、体をやすめて様子をみることにした。

そのころの戦況は、五月の徐州大会戦の前哨戦ともいうべき台児荘（だいじそう）の会戦が始まりかけたときで、北京方面は王克敏（おうこくびん）を首班とする北京臨時政府のもと、表面は比較的安穏の状況下にあつた。

干学忠や孔祥熙（こうしょうき）などの大邸宅は接収されて、ホテルやキャバレーになつていたが、これらはすべて日本の特務機関によつて経営されていた。私はその豪華な一室を与えられ、りつぱな自動車も一台与えられた。

軍の首脳部や支那の要人たちと交際しているうちに、私は戦争の意外な舞台裏に気がつきはじめた。結論すれば、蔣介石軍を徹底的にほろぼすのは、日本にとつてかえつて不利になるというのである。たとえ重慶に敗走していても、蔣介石はなお国の内外で中国の代表者であり、中国人の信望もあつめている。もし蔣介石軍が力を失えば、第一に中共軍がその潜在勢力の総力をあげて台頭してくるのは必至で、同時に各地で内乱が続発する危険が多分にはらまれているというのだつた。

私は判断に迷つたすえ、この方面の最高司令官である土肥原中将に会つた。そして私が参謀本部から依頼された秘密の任務を、やつと打ちあけたのである。

すると土肥原は、サッと色をなして、

「蔣介石を殺すなんて、とんでもない。参謀本部の連中は何も実情を知らんで、ああしろ、こうしろと勝手なことを言つてくるが、実際にいくさをしているのはわれわれなんだからな。参謀本部が正しい情勢判断の上での命令なら、むろん一も二もなくお受けもしようし協力もするが、そういう見当ちがいなことを言つてこられては、現地軍として納得できんな。絶対に反対だ」

と、憤激しながら言うのだつた。

蔣介石の対日長期抗戦というのは、国内の民心統一のお題目であつて、いつたん掲げた看板は下ろすわけにいかない。この混乱に乗じて中国共産党が次第に力を得てきた。初めは蔣介石のひきいる国民党と、いわゆる国共合作の運動もあつたが、この運動が進むにつれて国民党の勢力範囲は共産党に蚕食されてゆく形勢に、蔣介石は驚いて急に共産党幹部に弾圧を加えようとした。ここにおい

て毛沢東、朱徳らは、にわかに矛を逆まにして、武力抗争をはじめたが、この背後にはソヴィエトが無制限の援助をしているからなかなか強い。いわゆる十九路軍とか第八路軍がそれであつたが、これらが帝国主義打倒の旗じるしで、日本軍の背後をも衝いてくる。

つまり中共軍は、蔣介石にとつても日本軍にとつても共同の敵であつた。ことに北支派遣軍司令官である土肥原中将にとつては、支那軍より中共軍の方が、武器も精鋭であるし、統制もとれ、手強い相手で、防共の見地よりすれば、むしろ蔣介石と手を握つて、東洋赤化の魔手を払いたいという気持だつたのである。

「ソ連の世界赤化の野望を考えると、日本と支那が戦つていることなどは、兄弟牆にせめぐということわざ通り、まことに愚なことだ。まして蔣介石を倒したら、ソ連の膨大な戦力を背後とした中共軍を、日本が一手に引受けなければならないことになつて、最後には世界戦争になる。日本は満州事変から今日まで、これだけ国力を消耗してきたのに、そのまま世界戦争にとびこんだら、どうなると思います？」

土肥原中将の意見は、いかにも理路整然としていて、憂国の気慨にみちていた。

ここにおいて、私がゆくりなくも思い出したのは、私が日本を出発する少し前、満州から帰任してきた石原莞爾将軍が、関西における軍、官、民共催の歓迎会の席上で、述べた言葉である。

「今次の支那事変をひきおこしたのは、まことに遺憾のきわみである。これはわが軍首脳者の無知と横暴のなせるわざであり、もし日本に正義なるものがあれば、直ちに軍を還せ。そして芦溝橋事

件の責任者を厳罰に処すべきである」
青天の霹靂ともいうべきこの恐るべき放言に、並いる者ことごとく顔色を失なつた。この舌禍により石原将軍は、その後、軍からは狂人扱いにされ、要職を解かれるに至つたが、私も当時は将軍の発狂説を疑わなかつた。
しかし、現地に来て真相を知つてみると、同じ陸軍部内でも大本営と現地軍とでは、まつたく戦争そのものにたいする考え方がちがつているのである。とくに蔣介石にたいしては、正反対の見解をもつている。私は啞然としてしまつた。

日本軍から宋美齢に贈つたダイヤ

さらに調査をすすめていくと、まことに意外な、というより驚くべき事実が、次々と判明していつた。第一に蔣介石軍の参謀の中には、日本の軍人が加わつて重視されていた。名は大橋、階級は大佐であるという。うわさによれば蔣介石軍の参謀長であるともいうことだつた。
第二に不思議な事件は、蔣介石夫人の宋美齢に、日本軍の某方面から、当時の値段で五十万円ほどもするダイヤが贈られているということだ。このほか、日本軍と戦つているのは蔣介石の直系軍ではなく、将来の禍根となりそうな軍閥であつて、蔣のためにも損はなく、日本軍のためには面子の立つ……という、馴れ合いの戦さとも考えられるようなことであつた。
蔣介石をたおすことが、事変を一挙に解決するカギであると信じたので、大本営の依頼を引受け

たのであるが、現地の情勢をくわしく知つてくると、私の信念もぐらつかざるを得ない。
もし私が軍人で蔣介石暗殺の命令をうけたのなら、私個人の考えや判断のいかんにかかわらず、使命を遂行することが忍者の義務であるが、私は軍人でもなければ、命令を受けたのでもない。それは「依頼」を受けたにすぎないのだ。現地に来て、蔣介石を殺しては日本のために不利ということがハッキリわかれば、自分の考えでそれを取りやめたところで、私は誰からも文句をいわれる筋合いはないのである。
私はその後、白兵戦闘の指導やら、特務機関員に暗号解読法を教えたりして、春から夏を送つた。夜襲戦闘の訓練に、白昼、黒い眼鏡を用いて実効をあげたが、この方法は私が初めて考え出したことである。
五月から徐州大会戦が始まり、私は第一線へもしばしば、飛行機で飛んだが、徐州から所用で開封に向うとき、エンジンの故障で低空を匍うように、松林の上をスレスレに飛んだことがある。このとき密林の中から突然、小銃の一斉射撃を浴びた。開封に着いてから調べると、翼と胴体に七発命中して穴があいていたが、下から射たれるというのは気味のいいものではない。正直のところ命のちぢむ思いがした。
九月に入つてから、少し体の調子をこわしたので、蔣介石暗殺を断念した私は、土肥原将軍に辞表を提出して、こつそりと内地に帰つてきた。
依頼を果さなかつたわけだから、大本営にも顔を出さなかつた。ところが、靖国神社の秋の大祭

のとき、参拝に行くと、そこでバッタリ大本営の連中に出会つた。
「あッ、藤田先生じやありませんか」
「いつお帰りで？」
「北京では如何でしたか？」
などと矢つぎ早やの質問である。
「やア、帰つたばかりでね、明日にも行こうと思つていたところだつた」
私は約束をはたさなかつたのだし、いささか格好のわるい思いで、さつとその場を去つてしまつた。あとから聞いた話であるが、参謀本部では、
「藤田はこんどは帰れまい」
と、うわさしていたそうで、靖国神社の雑踏の中に私を見出したのは、意外だつたにちがいない。
それでも行かないでいると、五、六日たつて参謀本部から電報が来た。
「明日お出でありたし、午前十時おむかえに参上」
という意味のものだつた。
重大使命をスッポカして、知らん顔して帰つていたので、何か文句を聞かされるのではないか、いずれにしても一度は顔を出さねばなるまいと思つた。
あくる日、時間通り自動車が来たので出かけていくと、村田という参謀大佐が玄関にとび出してきて、

「よく来て下さいました。先生が今日お見えにならなければ、行き先をつきとめて、飛行機ででも迎えに行く手筈でした」
といいながら、下にもおかぬ物腰で一室に案内した。
どうもわからない。文句を言うにしては馬鹿ッ丁寧すぎると思つていると、いきなり、
「御起立をねがいます！」
と、私を睨みつけていう。
私は、大佐風情に命令をうけるおぼえはないので、何だと思つた。
「ことわる。私は何の必要あつて起立しなけりやならんのだ」
「極めて重大なことをお伝えしなければなりませんので、これは小宮からのお願いなのです」
「そうか、じやア……」
何かわからぬままに、起立すると、
「実は昨日宮中におきまして、御皇族会議がありました。その席上、閑院宮殿下から、藤田はどうしているかとの御下問がありました。北支から帰つておりますとお答え申上げたところ、藤田のことは束縛しないで、軍とは相変らず緊密のつながりをつけておくよう、不即不離の関係におけとのことでした。それから本日、先生を賀陽宮殿下の御殿にお連れ申すようにとのことで、そのためお出でを願つたのです」
皇族のことを口にする場合、一斉起立というのが当時の軍のならわしであつた。それで私も起立

を要求されたわけである。

私はその場から、ただちに賀陽宮邸に伺候した。それから次に述べる中野学校の教官をつとめながら、一週に二日ないし三日、日をきめて一年間通いづめた。

御用向きについては発表をさし控えるが、一年間、高貴の方に接して、野人の私もだいぶ行儀作法についてはおのずから訓練されて身につくようになつた。

中野スパイ学校の実態

日本陸軍秘密戦士の養成所として、知る人ぞ知る中野学校のことは、終戦後十年ほどしてポツリポツリ、世間にも片鱗が知られるようになつたが、私が初めてここの教官を依嘱されたのは、その前身である「後方勤務員養成所」といつた頃からである。

陸軍で防諜の必要が叫ばれだしたのは満州事変以降のことで、特に二・二六事件はこの傾向を助長した。わが国の特高警察や外事警察が設置された目的もここにあつたが、わずかに鑑識業務が近代科学を採用した程度で、組織にも設備にも、なんら見るべきものはなかつた。

牛込区（現在の新宿区）若松町にある陸軍軍医学校と騎兵第一連隊との境界付近に、二百坪あまりの木造二階家が建築されたのは、昭和十二年の春であるが、この目だたない建築こそ、わが国初めての科学的防諜機関の庁舎であつた。

この機関は陸軍省兵務局長に直属するもので、秋草俊少佐（のち少将、当時対ソ諜報のベテランとして有名）を長とし、福本憲兵少佐以下十数名からなる組織だつた。

しかし、この機関の仕事は国際電信電話の秘密点検、外国公館の信書検閲、私設無電局の探知、テープレコーダーを利用する会話の窃取など、秘密戦としては消極的な防諜の面にかぎられていた。

当時の陸軍として秘密戦を担当していたのは、参謀本部の第二部で、諜報以外の秘密戦を担当していたのは、第二部第四班に属する二、三の参謀将校だけであつた。

第二部長は、のちにフィリピン攻略軍の軍司令官になつた本間雅晴中将で、その下に第四から第七までの四課があり、それぞれ対ソ、対独伊仏、対英米、対支、および用兵地誌の情報を担当していて、謀略、宣伝担当の第四班は、これら有力な課の間にはさまつて、ろくな仕事もできぬ実情にあつた。

昭和十三年の春、この第四班が独立の課に昇格して第八課となつた。この課の受持は総合的な国際情勢判断、謀略、宣伝の三部門で、初代課長には支那通として当時令名の高かつた影佐禎昭大佐が任命された。

この第八課の第一着手で、華々しい成功をおさめたのは汪精衛工作である。当時、重慶政府で蔣介石につぐ有力者であつた汪精衛を、われわれの陣営に引抜く工作であるが、この工作の端緒をつくつたのは、日本側では当時上海にいた犬養健、西茂顕、松本重治の三人であり、中国側では重慶政府の日本課長薫道寧、亜州局長高宗武、周仏海らだつた。

第八課はその後、唐川安夫大佐、臼井茂樹大佐、武田功大佐などを課長に迎えたが、日支事変が長期戦の様相を呈するに及んで、諜報部要員を養成する必要に迫られ、昭和十三年の春「後方勤務員養成所」と称するものの設置案が、急速にまとまつた。

秘密戦要員の養成所をこのように呼ぶのはオカシイが、当時やかましかつた防諜上の要求にもとづいたものにちがいない。

この養成所は臨時軍事費支弁の臨時機関で、参謀本部第二部長に属し、さきに言つた秋草中佐が初代の部長になつた。校舎は最初九段下の牛ケ淵にあつたが、十四年の初頭、中野電信隊の敷地に移され、名称も中野学校と改名されたのである。

ここには全国の連隊区から、素質の優秀な青年将校があつめられ、近代戦に適応したスパイ術が授けられる。新しい言葉でこそスパイだが、昔流にいえば忍術に他ならない。

昔から伝統の甲賀流忍術は、ここに新時代の創意と工夫が加味され、堂々と国家のお役に立つこととなつたのである。

したがつて中野スパイ学校の教育も、高度な政治工作から、単なる殺人や建造物爆破方法などに及ぶ広範囲なものであつた。後には戦争そのものの複雑化と、兵器科学の発達につれて、教育も専門化されてきたが、一応の主眼は万能スパイの養成であつた。

校内での特に変つた設備といえば、二階一室の資料室であつた。各国兵器の展覧会場といつてもいいくらい、世界各国のあらゆる種類の航空機、艦船、戦車、砲火器などの精巧な模型が陳列され

ていた。これらをことごとく記憶するのも、学科の一つであつた。

さて生徒の方は、まずこの学校に入校と同時に、名前のない人間になつてしまう。ちよつと囚人のように一人々々番号が付せられ、教官の方からも生徒同士でも、番号で呼ぶ。そして一歩でも校門を出ると、お互いは絶対に話し合つてはならず、全然見知らぬ人間を装うことを強要される。

彼らの服装は背広であつた。なるほど背広ならば娑婆では目立たないかもしれぬが、軍服ばかりの校内ではその反対である。そこで一般の兵たちの好奇心をそらすためには、民間技術者の教育という口実が使われていたし、接触を禁じられていたから、少しも怪しまれず、まして、生徒のすべてが、つい先日までは陸軍大学校生徒、あるいは各方面の軍部で将来を嘱望されていた青年将校だつたことに気づく者はいなかつた。

では、どうして彼らが集められ、スパイ学校の生徒になつたのか？　昔の忍者は、自分の身分を明かした者はいうに及ばず、「彼は忍者らしい」と噂をしただけの者でも、これを殺害して、ひたすら秘密を守つたといわれるが、同様の秘密保護の手段が、この学校にも適用されていた。

中野学校の黒幕、総帥ともいうべき地位にいたのは、陸軍参謀本部のHという少将だつたが、彼が生徒を選ぶときの条件は、陸大生なら成績五番以内の者、現役将校もこれと同じく秀才の部類で身体の頑健はもとより、気力、胆力、衆にすぐれた者、かならず独身者であり、将来もなんらかの都合によつて妻帯を望まぬ者か、容易でない者、なるべく係累の少ない者……であつた。

右の条件に適した者が候補にのぼると、H少将は、なじみの赤坂の料亭に呼び寄せる。ただ何の

とりとめもない話をしたり、相手をおだて上げたりして、盃を交すだけである。

最初のうち、若い将校の方としては、一面識も、何の直接関係もない大本営参謀の少将閣下、しかも某方面の黒幕とうわさされている人物のお召しというので、不安な気持を抱くのは無理もないが、宴を共にして時がたつにつれ、少将の巧みな話術と豪快な飲みっぷりに、次第に釣りこまれて盃を重ねてしまう。一週間後、ふたたび呼び出される。こんどは芸者をはべらせての歓待で、やはり個人的なつきあい以外の話は出ない。

このような宴会が、その後も度かさなっていく。呼ばれる方は、なんのために自分だけが饗応をうけ、目をかけられるのか不審でもあるが、けっきょくは秀才といわれる者の共通の癖といってもよい自尊心の満足に理由を見付けて、将来の栄達の手掛りと快楽とを同時に獲得している好運を、いささかも疑わぬような心情に馴れてくるのである。

赤坂一流の芸者と枕を共にする夜がつづき、ときには反省して紅燈の歓楽から遠ざからねばと思うこともあるが、自ら求めているのではなく、拒みきれない少将からの呼出しなのである。

学校や所属機関でのうわさや成績が、かんばしくなくなってくるのは、どうしようもないことであった。後日分ったことでは、彼らに愛をささやいた芸者たちも、真情からではなく、少将の命令でそうしたのだといわれる。

彼らの成績が低下し、上官から忠告を受けるようになったころ、はじめてH少将が彼らを饗応した意図が明らかになる。少将は大本営参謀本部に彼らの上官を呼び、彼らの身柄を他に移す旨を通

達する。

彼らの上官は少将の胸中を窺い知ることはできないが、いちおう部下のために弁護するものの、軍には命令という絶対的なものがある以上、承服せざるを得ない。陸大生は退学、現役将校は転勤という形がとられ、同時に彼らは軍人でありながら、どこの機関にも軍籍がないという陰の存在者となるわけだ。

彼らは参謀本部からの通達により、身廻品をたずさえて、指示された場所に行く。本人にも家族にも、一週間程度の出張だろうと推測できるほかは、何のために、どこへ行くのかなど、一切わからない。指定場所からさらに中野通信学校に行く。

こうして集められた生徒は、一期に約二十名が標準とされた。彼らは名を名乗りあうことも、一身上の話を交すことも許されない。自分と他人との区別は、ただ決められた番号だけなのである。

教育期間は一期六カ月、その間の起居は校内の宿舎であった。外出は極度に制限され、家庭への立寄りはもちろん禁じられ、通信も断たれる。家庭では毎月陸軍省から届けられる給与によって、本人がどこか遠くへ行き、まだ生命に別条がないことだけを知るばかりである。

担当はスパイ技術

中野学校の教育科目は、性格の陶冶、学科および術科の三大部門にわかれ、性格の陶冶としては秘密戦士として当然そなえらるべき徳性、つまり、積極性、不屈性、剛胆、細心、機敏などと訓練

し、とくに物欲、名誉欲、生への執着などの欲望から超脱して、エンの下の力持ちたることに甘んずる心境に達することを目標とした。

学科、術科の方も急速に整備されて、終戦時ごろには次のような編成をとっていた。

校長
- 本部――庶務、教務、付属機関（医務室、図書室）
- 教育部（学科）
  - 精神教育
  - 秘密戦……秘密戦一般、諜報、宣伝、謀略、防諜、占領地行政
  - 補助学……総力戦一般、政治学、経済学、思想問題、心理学、統計学、民族学
  - 語学……英語、露語、支那語、マライ語、ドイツ語、仏語
  - 軍事学……戦史、戦術、軍制、兵営、交通、築城、地形、航空
- 学生隊――北方班（対ソ）、支那班、南方班
- 実験隊――潜行法、偽瞞法、表現法、破壊法、偵察法、連絡法
- 研究科

二代目校長は、初代に引続いてロシア通の川俣少将（のち中将）が就任し、三代目は光機関長であった山本敏少将となったが、第二次大戦は漸次われに不利となり、二十年五月の大空襲には中野学校も焼失して、静岡県下に疎開することとなった。

しかし中野学校は、戦勢に逆比例して膨張、発展していったのは、その性格上、当然といえよう。

私が関係したのは十六年の初めごろまでであるが、担当したのは精神教育と術科および体術、護

身術の面で、術科は家伝である甲賀流忍術を現代戦に活かすことであった。

術科の授業を始めるに当って、私はいつも次のようにのべた。

「忍術の修行がスポーツや他の武術と異る点は、修業の目標のおき方にある。スポーツにしろ他の武術にしろ、その目標は、これまで誰かが達した最高記録にあるが、忍者はその最高記録を最低段階として修行を始める」

忍術の忍は忍耐の忍であること、精神上の忍耐、肉体的な忍耐を本領とすることを教え、体の基本的な鍛練から始めた。むろん一人前の忍者になるためには、幼少から練磨しなければならないので、普通の人間を、わずか六カ月で鍛えなおすことはできないが、それでも、もともと粒ぞろいの生徒たちであるから、案外、期待以上の効果はあがった。

体術は最も実戦的な、南蛮殺倒流を指導した。それから忍術の本論に入って、ふつうに五遁といわれている木遁、火遁、土遁、金遁、水遁の術、天象の利用、生きた人間の利用、鳥類、獣類、虫類の利用などから敵中潜入の術としては、

陽忍の術（近入りの事）…………姿を現わしながら計略を以て敵中に入り込む方法

敵陣へ忍び入る時の用意

水月の術……………敵軍中にまぎれ込んで忍び入る方法

陰忍の術（家忍の事）…………人の目を忍び姿をかくして忍び入る方法

四季弁眠のこと

逢犬術…………犬に見付けられた時の処置
歩行の中座さがし
除影術五ヵ条…………忍び入る時敵に発見されぬための手段
陰影術五ヵ条…………忍び入つて居る時の身をかくす手段
家忍人配り三ヵ条
通路仕掛け六ヵ条

忍術独得の謀計と秘術については、

陽忍の術（遠入りの事）…………戦い以前に敵中に入つている方法
始計六ヵ条…………その時々に応じて入り込む手段を考える
桂男の術三ヵ条…………敵中に間諜を入れて置く方法
如影術三ヵ条…………敵の行動気配に先んじて行動を行う方法
くノ一の術…………くノ一即ち女間諜を利用する方法
里人の術二ヵ条…………敵国の者を利用して敵中に入る方法
身虫の術二ヵ条…………敵の反間をつくる方法
螢火術三ヵ条…………敵の重臣をうたがわせ、かの手で討たせる方法
袋飜術二ヵ条…………敵に信用させておいてその裏をかく方法
天唾術二ヵ条…………敵の間諜を我が間諜とする方法

弛弓の術二ヵ条…………敵の間諜らしく働いて居り寝がえりをうつ方法
山彦の術二ヵ条…………進んで敵の間諜となり実は我が間諜をなす

以上は甲賀流の秘伝に属するものであるが、古来の術法を今日の実態に即応させて、十分の効果をあげ得るよう意を用いた。

これに沿つて金庫の開け方、手錠の外し方、殺人法など、泥棒、人殺しの技術も授けたが、上達すればどんなに精巧な鍵でも錠前でも、針金一本あれば開けられるようになる。

殺人法は、おおむね暗殺である。スパイの殺人は密かに、しかも瞬時に果さねばならぬ場合が多いから、毒物利用が主となる。生徒たちが後日、任地の満州や中国でしばしば用いた毒物は青酸カリであつた。

たとえば、殺すべき相手と何気なく対談しているが、そのうち傍らに果物などあれば一個を取上げて、仲良く二人で食べようなどと二つ切りにし、一方を自分が先にたべる。それにつられて相手も他の一片を口に運ぶ。と、三十秒の後に相手は加害者の足下に倒れているのである。これはスパイの使用したナイフの片面に毒物が塗つてあつて、その接触した方を口にしたからである。

古来から忍者が暗殺する場合、刃物を用いるのはもつとも下策とされていた。従つて毒物の研究は相当高度にすすんでいた。指先きほどの毒薬で人を眠らせ、殺し、涙を流させ、くしやみを出させることも自由自在であるし、わずか一滴を皮膚にすりつけただけで、人の心臓の血液を凝結させ、死に至らしめる恐るべき秘薬もある。

私は生徒の一人々々を、りつぱな忍者に仕上げようと努力したが、なにしろ限られた課題と短期間の教育では、その十分の一も希望が達せられなかつた。しかし古来、門外不出とされた忍術の初歩を学んだだけでも、ひじような効果があつたろうことは想像にかたくない。

ここでの教官生活は二年で、四度、生徒を送りむかえたわけだが、送り出した生徒がどの方面の任地におもむき、どういう任務についたか、また生死の程もわからない。

大東亜戦争に役立つた忍術の秘薬

忍術が近代戦に活用されたのは、兵糧の面においても非常に大きいものがあつた。本所（今の墨田区）の越中島に陸軍糧秣本廠というのがあつて、兵隊の食糧に関する一切の研究がなされ、特殊食糧が盛んに製造されていた。

忍術には昔から最少の分量で最大の効果をあげる食糧の研究が非常にすすんでいたもので、たとえば「兵糧丸」などは、一粒たべるだけで、一日分の食糧をおぎなうに足るとされ、各流の秘伝となつていた。

一粒の丸薬で一日分のカロリーが補給されるとは、まるでおとぎ話のようだが、これは事実なのである。甲賀流の伝書には、その材料や分量、製法などが伝えられているが、これは干あわび、大麦、干鯉、ぶくりよう、（松林の中に生じ漢薬として利尿にも用いる）寒晒（白玉粉）、鰻の白干、梅肉、生松の甘はだ、氷砂糖、麦角その他のものを用いることになつており、今日の知識をもつてし

ても、何れも選りによつた滋養物である。しかも大切な養分が相互作用によつて十分に発揮されるように製造されているのである。

私は陸軍糧秣本廠から依頼を受け、航空兵のための携帯口糧として、この「兵糧丸」をはじめ「熱糧丸」「水渇丸」その他、二十数種の兵糧を、古来の種々な軍書を調べてこしらえた。「熱糧丸」というのは、一粒をたべれば氷の上に寝ても、体じゆうがホカホカと温まるという食糧である。「水渇丸」というのは、一粒を口中にふくめば、唾液が盛んに出てきて、ノドの渇きを医する重宝なもの、このほか、視力を強くする丸薬とか、疲労の回復をすみやかにする薬とか、目的によつて様々なものをこしらえた。

これは後の話になるが、大東亜戦になつて、特攻隊の将士が出発の前夜、十分に熟睡しなければならぬのに、どうも眠れないから、神経にも肉体にも障らず、よく眠れる薬はないかと相談をうけた。

忍術で用いる様々の秘薬は、たとえばイペリット、シウカベンチル、ホスゲンに相当するような毒薬でも、すべて植物から製造するのである。催眠剤にしても植物からつくるのだが、これは松根油から採れるテレピン油を用いれば製造可能なりと思つたので、松根油の採取を提言した。

これは、併せて飛行機用燃料のオクタン価を高める媒剤ともなつたので、たちまち全国的に松根油の採取が始まり、津々浦々の山村漁村まで、老いも若きも、婦人も子供も、松の根ッ子掘りに汗水を流さなければならぬようなことになつたのだが、実を申すと松根油の必要を主張した発頭人は、

かくいう私であり、これがため日本全国の風致を害し、老幼の方々に御苦労をかけた結果となつたことを、いま、非常に申訳ないと思つている。

　これと同時に、もう一つ申訳なく思つていることは、催眠剤と反対の覚醒剤をネオアオチンからこしらえ、埼玉県の某所に貯えたまま終戦となつた。これを戦後、農村の男女が野良ダンスなどで夜遊びするのに、昼間の疲れで眠くなるのを妨ぐため、こつそりと用い出した。それから次第に全国的に悪用されるようになつたのが、ヒロポンなのである。

　しかし、私は当時日本国民の一人として、祖国日本を勝たせたい、負けては大変だというので、自分のある限りの力を傾け、古来の伝統と秘法を活かし、国家のお役に立ちたい一心で献身してきたのだが、中間に立つている軍人共の一部の態度に、いささかあきたりない……というより不快に感じていたことがあつて、これが次第に鬱積していつた。

　それは中佐、大佐、少将級の軍人のケチ臭い立身出世慾というか、エゴイズムというか、どうにも鼻もちならぬものがあつた。

　例えば「熱糧丸」をつくるのに、

「藤田先生、何とかお知恵を……」

と、平身低頭してたのみに来る。私が古書を調べ、自ら調合したりして出来上がる。軍の方では喜んでその製造にかかるのだが、私は軍人ではないし、無位無官であるから、熱糧丸の功績は、これを担当した中佐か大佐のものに帰し、私の名は全然出ない。

　全然名が出なくとも、国のお役に立つたというので私は満足しているのだが、これを担当する軍人には上官に対しても、国民一般に対しても、自分一人の手柄顔に発表し、勲章の一つも余計に貰おうという、情けない根性の者が大部分であつて、だんだんにはこういう空気に、つくづくイヤ気がさしてきた。

　私にも勲章をやろう、位をやろうという話は度々あつた。しかし、少将相当官を受ければ中将に頭を下げねばならぬし、中将待遇を受ければ大将に頭が上がらんことになるから、初めからことわり通した。私は中将の前に出れば中将と友達づきあいに話したし、大将の前に出れば大将と同格に話した。この方が気楽であり、天下の野人をもつて自ら任じていた。軍部の方でも私に用があるときは、黄色い将官旗を立てた自動車を差し廻してよこすのが例で、扱いは常に将官級であつた。

　長年にわたつて重要な軍の機密にも参劃したが、私はつねに陰の人であつて、表向きには一切名を出さなかつた。だから戦後、勲章も年金もないかわりに戦犯にもならず、市井に悠々と閑居していられたわけである。

　話はさかのぼるが、昭和十二年、時の軍医総監で、後に厚生大臣となつた小泉親彦氏から使いがあつて、私は麻布の私邸に呼ばれた。

「藤田さん、忍術には相手に呑ませたり、舐めさせたりしなくとも、一滴を皮膚に滴らしただけで命を奪うという秘薬があるそうですが、本当ですか」

「あります。一滴を皮膚にぬりつけるだけで、三、四十秒のうちに心臓の血液を凝結させ、死に至

らしめるという猛毒薬で、毒ガスよりも用法によつては有効なものですな」
「その秘薬のつくり方を、一つ公開していただけんだろうか」
「公開はできませんね、他のものとちがい、これだけは殺人薬ですから、用途を伺つた上でなければ」
「用途というのは、軍の機密に属することなので……」
「その機密は伺えませんか」
「ちよつと、それは」
「それならお断りします」
私がハッキリと軍の要求を蹴つたのは、この時が最初だつた。

縄抜けの術と敗戦

運命の大東亜戦争

この間も、私は中野学校の教官をつとめ、警察関係では全国の特高係に護身術、逮捕術などを指導してまわつた。また支那へは、占領地で、金庫を開けたいが、どうしても開けられないというとき、暗号を入手したが解読できないというようなとき、急遽、飛行機で現地にとび、もつぱら私の一手にひきうける仕事となつた。

こうしているうちに支那事変は未解決のまま、昭和十六年十二月八日、日本は大東亜戦争に突入したが、中野学校の教育も精鋭の粒撰り（つぶよ）では数的に間に合わなくなり、一クラス百人から百五十人と、大量生産になつていつた。そのため生徒の質もずつと低下し、終りのころは下士官級までも、だいぶ混つてくるようになつた。

私は、海軍大学にも武道や兵学の講師として顔を出していたから、陸海軍どちらの内部事情にも

通じていたが、海軍部内の首脳者たちは、いずれも英、米を相手とする大東亜戦争には反対だつた。即戦即決で一挙に勝敗がきめられるなら格別、米、英を相手とすれば、どうしても長期戦になる。長期戦になると勝算がないということを知つていた。だから反対だつたのだが、陸軍にしても、海軍の意見に耳を傾けないわけではなかつたが、騎虎の勢いというか、やむにやまれぬ当時の勢いというもので、あのようなことになつた。

戦後、東条ひとりが悪者のようにいわれているが、大東亜戦争は彼一人がひき起したものではない。そういう解釈は逆説的にいえば、悪者にせよ彼を大へんな大物にすることだが、彼はそれほどの大人物ではない。

支那事変が何年かかつても、いつこうに解決のメドがつかないのは、支那のバックに強力な米英の後押しがあつたからで、米英はドンドン戦力物資を送り込み、日露戦争以後、破竹のいきおいで世界列強の間に台頭してきた日本の頭を、支那人の手で叩かせようとした。

日支間の争いは、勝敗いずれにせよ、両国の国力を消耗させるもので、有色人種を同士討ちさせ、どちらもが弱体化するのを待つて、自らは手をぬらさずして御馳走にありつくというのが、アングロサクソンの昔からの伝統なのである。

徐州大会戦に支那軍がやぶれ、武漢三鎮が陥落し、漢口に日の丸が上がると、米英のわが国軍に対する妨害はいよいよ露骨になつてきた。攻撃目標の前面に突如として星条旗を立てたり、米英の建造物内に秘かに観測所を設けさせたりして、前戦の将兵を、しばしば悲憤慷慨させたものだ。

一方、わが国に対しては軍需資材の輸出をストップし、はては通商を遮断して日本を太平洋の孤児たらしめ、いわゆるABCD包囲陣を強化して、あらゆる手で日本のノド首を絞めてきた。かような国際情勢を招来する以前に、打つべき手もあつたのであろうが、不幸にして陸奥、小村のような大外交官が日本にいなかつたので、軍部外交に押し切られ、一か八かの大賭博である大東亜戦争にとびこんでしまつたのである。

しかし、長年の支那事変で、戦力は衰えている。陸海軍の足並みは揃わずという悪条件ではあるが、軍の指導者たちは、それでもウマク事を運べば勝てるかもしれないと思つて、決心して始めたことである。私らも、これはまずいことになつたと思つたが、始めたからには勝たねばならぬという気になつた。

真珠湾奇襲に成功したとき、海軍の戦力はその後、半年ないし七カ月間続けられるだけのものしかなかつたという。だから、その期間のうちに終戦のチャンスをつかんで、多少条件がわるくとも講和にもつていけばよかつたのだ。

ところが香港を占領した。マライの電撃作戦に成功した。シンガポールを陥落させたといい気持になつているうちにその機会を失い、兵站線は脅かされる、輸送船は沈められるで、だんだん窮地に追いこまれて行つた。

私は大東亜戦争を始めたことは東京裁判がいうごとく、日本の侵略でも何でもない、当然の自衛権の発動で、やむを得ぬことだと思つているが、緒戦の華やかさに酔つて講和のチャンスを逸した

ということは、兵学の初歩からいつても大失敗である。これは東条をふくめて戦争指導者たちが、天皇および国民に、いくらお詫びをしても足りない大罪を犯したものといわねばならぬ。

いくさは武術でいえば槍術のようなもので、繰り出すより引くことが大切だ。つねに引くことを考え、チャンスと見れば間髪を入れず兵を収める方策をとらねばならないが、延び放題に戦線をひろげ、兵力を分散し、補給が続かない。敗色はすでに十七年の秋ごろから現われて来た。

それでもやめられなかつたのは、負け込んだバクチのような心理で、こんどこそは、こんどこそはと張りながら、上衣、ズボン、シャツまで取られ、とうとう裸一貫になつて放り出されてしまつたようなものである。

「易（えき）」に出た日本の敗北

戦況が不利になつてくると、軍艦を失なつた海軍では、来襲する敵に最後の捨身の攻撃を加えるべく、特攻隊をこしらえた。この生みの親は大西滝次郎である。

私は昭和十九年の初頭ごろから、全国の特攻隊基地をまわつて、激励の講話や白兵戦闘の指導をするよう依嘱され、そろそろ空襲のひどくなつて来たなかを、ほとんど家を留守にして旅行した。

二十年になると、いよいよ敗戦の色は濃厚になつてきた。私は三月十五日、戦争の見透しについて易を立ててみた。

〔本卦〕　地　沢　臨　䷒

〔之卦〕　火　雷　噬　嗑　䷔

戦争の終末は凶、つまり日本は敗戦によつて八月半ば頃に終るという卦であつた。

そのころ私は興亜院幹部の椅子をもつてこられたり、ビルマの司政官にならんかとすすめられたりしたが、それでなくとも私は、もともと一介の野人でおし通すのが理想だつたから、みんな断わつた。

興亜院の方は第一部長というのだつたが、私が断わつたので頭山秀三君が代つてなつた。

これより先、勲章の話もあつたが、これも妙ないきさつから、貰わないで済んだ。昭和十三年、北支にいたとき、土肥原軍司令官の副官でYという中佐が、

「藤田先生、履歴書を出して下さい」

と、ヤブから棒に言つてきた。私はこのYとウマが合わないというか、日ごろから虫が好かなかつたので、

「今ごろ履歴書なんて何だ。これから先、長く北支にいるつもりもないんだから、必要ないだろう」

と、つっけんどんに言った。
「しかし、軍司令官殿が、そう言われるのです」
「じゃア、陸軍省か参謀本部にきいたらいいだろう。おれは書かんよ」
「そうですか」
Y中佐は、むくれた顔をして行ってしまった。
その夜、A中佐がやってきたとき、雑談のすえ、今日の話をすると、
「そりゃ先生、勲章ですよ。履歴書なんか形式なんだから、それはお出しになった方がいいです。なんなら今から届けます。先生なら勲二でしょう」
「いや、初めてくれるんだからチンコロだろう」
チンコロというのは勲三等である。首にかけるのでチンコロといった。
「おや、先生はチンコロもまだだったのですか」
「ずっと前にも話があったとき、ことわったからね。今さらチンコロなんかいらんよ」
勲三等は大佐か、なりたての少将がもらうもので、勲二は少将の古手か、すくなくとも将官級のものと決っていた。私は数年前から少将か中将の待遇だったから、A中佐も当然、勲二だと思っていたらしい。
私もそのときは、勲二なら貰ってもいいなくらいの稚気がちょっと起ったが、何にせよ貰わないでよかった。

というのは、私は位階勲等もなければ、どんな官公職にもついていなかったので、敗戦となりGHQが戦犯をしらべ出すとき、私に何も手がかりがなく、相変らず東京のまんなかにトグロをまいていたが、私は終始、平穏無事だったのである。
昭和十年、私は「忍術秘録」という一書をある出版社から出したことがある。このとき驚いたことには、参謀本部の少佐が来て、
「先生、あの本は市場に出て一週間後に、ソ連大使館の手に入り、一カ月後にはモスクワに行って飜訳されていますよ。ソ連では先生の行動に注目していますから、用心をなさった方がいいですよ」
と、いうことだった。
「君はあの本、読みましたか」
「いや、まだ全部は見ていません」
ソ連の抜け目のない活動にたいし、日本軍人の熱意のなさというか、不勉強加減というか、比較を見せられたような気がしたものである。
私の本が、いち早くソ連で注目されていたくらいだから、私がいい気になって勲章をもらったり、役人の椅子についたりしていたら、恐らくまっさきに引っくくりに来たろうと思う。

縄抜け術で前線激励

昭和二十年になると、本土空襲はいよいよ急ピッチとなり、東京は無残に焼け野原と化していっ

た。東京中は疎開だ、避難だと大混乱におちいつた。私も四十年来、武術の伝書はじめ、二度と入手できない貴重な古書など、八千余巻が二階の三間いつぱいにあつて、これが戦火を受けてはたまらないと思つたが、易を立ててみると、火災の不安は全くなしと判断されたので、腰をすえておちつくことにした。食糧がなくなれば、土を食つたつて生きていられると覚悟していたから、余計な心配もしなかつた。

八月六日、広島に原子爆弾が落され、続いて八日には長崎にも投下された。その日、私は海軍軍令部から、重大な御相談あり、御来駕を乞うという電報をうけた。

発信者は、大西滝次郎中将であつた。

場所は麻布の豊田軍令部長の官邸で、案内された一室には、豊田大将以下の将官から大佐級の者が七、八人、沈痛な面持ちでテーブルを囲んでいた。むろん、大西中将もいた。

「藤田さん、ご承知のように敵は琉球を占領して、本土進攻も時間の問題という状況になりました。わが海軍としては艦船を殆んど失い、敵潜は四方の海をとり囲んで、身動きもできぬ有様です。頼みとするところは特攻隊の攻撃で、本土上陸の戦力を挫折させるにあるのみですが、この際、何とか特攻隊の意気を昂揚させるような講演を、特に先生にお願いしたいと相談し合つたわけなのです。どうでしょう、ひとつお引受け下さらんでしょうか」

そういわれても、ちよつと返事に困つた。青年達に、いたずらに空疎な言葉をならべても激励にならない。絶望的な悪条件ばかり並んでいて、今は何ひとつ勝算はないのだ。死地に活を求めると

か、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれと武道で教えているのも、敵と一対一の場合である。

私が沈黙していると、大西中将は、

「さつき話題になつたのですが、いつぞや先生の縄抜けの術を拝見したことがあります。体をガンジがらめに縛られていて、サッと簡単に抜けましたね。たとえば、日本の現状は、敵からガンジがらめになつているようなものです。そこで、こういう方法はどうかと考えたのは、先生に、特攻隊基地を廻つていただき、隊員たちに先生の鮮かな縄抜けの術を見せます。そして、日本は今、敵のためにガンジガラメになつているけれども、技術の鍛練と精神力によつては、この通り縄も抜けられる。狂瀾を既倒に返して、祖国の危機を救うこともできるのだと、講演していただきたいと思うのです」

なるほど、苦しくなるといろいろ考えるものだと思つた。

「お引受け下さるなら、これは陸海軍合同の企画として、天皇陛下にもお伺いを立て、まず皇族会議の席上でやつていただき、陸軍の挺身奇襲隊基地、海軍の特攻隊基地と、全国を廻つていただきたいのです」

「そういうことでお役に立つのなら、快くお受けしましょう。しかし、僕が今さら縄抜けをやつてみせても、何十年となく鍛えているのだから、当りまえに思われ、ちつとも面白くないでしょう。むしろこれは私の家内にやらせてみたらと思います」

「大丈夫ですか」

「家内はやつたことがないから、私にくらべればズブのしろうとなわけです。しかし、教えれば、すぐ出来るようになる。ズブのしろうとでも出来るというところで、いつそう効果もあると思いますが」

「なるほど、それはおつしやる通りです。では、ぜひお願いします」

「承知しました」

帝国海軍の総意ともいうべき依頼なので、私も最後の御奉公をしようと思つて引受けることにした。

その日は、風呂が沸いたからと、一番先きに案内されて汗を流し、歓待をうけて帰宅した。

さて、家内に今日のことを話すと、

「いやですよ、私、人前でそんなことするなんて、見世物じゃありませんもの」

と、てんでその気にならない。

「しかし、おれは豊田大将の前で、こつちから言い出したことなんだし、みなからも、お国のためだから是非と頼まれたので、お前が引受けてくれんとおれの顔が立たんのだ」

いろいろ説いて、やつと納得させた。

私は極秘とされている縄抜けの口伝を、初めて家内に授けた。

家内はさつそく稽古にかかつた。最初のうち二分三、四十秒かかつたものが、二日後には二分で抜けられるようになり、五日目には一分何秒かで抜けられるようになつた。

私達が基地に出発するのは一週間以内にとのことであつたが、私は、それ以前に、横芝部隊に白兵戦闘の指導に行くことになつていたので、帰宅後ということを約しておいた。

横芝部隊の反乱

八月十日、私は千葉県の横芝部隊から迎えの者が来たので昼近くに家を出た。横芝は、外房九十九里浜の中心地で、アメリカが上陸してくるとなると、当然、第一線陣地となるべき場所である。そのため、国軍も精鋭があてられ、近衛師団が厳重な防禦陣地を築いていた。

その部隊の中でも選り抜きの決死隊ともいうべき、近衛挺身奇襲隊からの依頼で出かけたのである。

第一日は中隊長以上の将校をあつめて話をし、第二日は小隊長以下、下士官までをあつめ、精神講話と奇襲戦の兵学を講義した。

あくる日から大いに実地訓練をさせるというので、その夜は若い将校連中に取り囲まれ、大いに飲んで談笑した。

するとそこに立派な通信機械用の無線機があつて、一人の将校が、

「これはなかなか性能がよくて、アメリカの放送もよく聞えますよ。ひとつ音楽でも御聞かせしましょうか」

といつて、スイッチをひねつた。

すると思いがけなく日本音楽の千鳥の曲なので、こいつはいいぞと大喜び、みんなこれに聞き入った。

間もなく曲が終ると、流暢な日本語が流れてきたから、二度ビックリだった。

「日本の皆様、日本の皆様、こちらはアメリカ……」

という冒頭で、ニュースを流し始めたが、八月六日、広島に原子爆弾を落した。続いて八日には長崎に投下した。同時にソヴィエトが立った……云々ということなどで、

「おお、ソ連が参戦したか」

と、将校たちはおどり上がって喜んだ。その年の二月まで、日ソ間には不戦条約が締結されていたから、ソ連は日本の味方だとばかり思いこんでいたのである。そこで「参戦」というからには、日本側についてくれたと解釈したがるのは、ワラをもつかむ神だのみで、当然の人情といえるが、それはこちらの早合点で、参戦したのは米英側の味方として、弱り切った日本をうしろから叩くために立ったのであった。

「万歳、万歳、ソ連が立ってくれれば、もう安心だ。ソ連は無疵だし、アメさんは相当いためられているから、戦争もおもしろくなってくるぞ」

「自分たちも、苦労して今日まで頑張った甲斐があったというものじゃないか」

さあ乾盃だと、急に席は賑やかになったが、そのうちラジオ放送が、さらに驚くべき言葉をならべて、一同を愕然とさせた。

「日本がソ連を通じて申し出たる全面降伏に関しては、次の条件を付するものとす。第一項……、第二項……」

将校たちの驚きようといったら、本当に文字通り、持っていた盃をバタリと取りおとして、顔色を蒼白にしてしまった。

「先生、日本が全面降伏を申し出たというのは本当ですか」

「そんな事実があったんですか」

彼らは悲壮な叫びを発し、申し合わせたように私をとり囲んで詰め寄った。

私はこれに対して、否とも然りとも返事をすることはできなかった。それは陸海軍部内でも極めて重要な位置についている人達との内輪話から、このアメリカ放送が全くのデマ宣伝であるとは言いきれないものがあるし、私の秘かに聞いていた情報から総合すると、むしろ信頼し得べきものと判断されたのである。

私が秘かに聞き込んでいたところでは、昭和二十年になってから、一月、二月、三月、五月と、それまで四回も、日本の方から講和条件がもち出された。

すべてソ連を通じて出されたもので、ソ連とは二月いっぱいで不戦条約の期限が切れ、日本からはそのまま条約の継続を希望し、交渉を続けてきたが、ソ連の方ではこれを断わるでもなく、承知したというでもなく、ズルズルベッタリに確答を引きのばしてきたのである。

とにかく軍の首脳部が、勝算なしと見極めをつけたのは、十九年の中ごろのことといわれ、すこ

しでも有利な降伏をしたいと、それ以来、代々の首相が苦慮してきたものだつた。
「全面降伏など、もつての外だ。おれたちは絶対に承服できない！」
「おれたちは最後の一人になつても、断じて戦うぞ！」
「大本営がどうしても降伏するというなら、おれたちは独自の方針でいくよりほかない。しかし、これは反乱になるぞ」
「反乱を起そうじやないか、反乱だ、反乱だ！」
若い将校たちは一人のこらず勢い立つて、卓を叩いて叫ぶ者もあれば、拳をふるつて熱狂的な演説を始める者もあつた。
中でもHというリーダー格の少佐は、
「藤田教官どの、われわれは反乱を起しますから、ぜひ指揮官になつて下さい」
と、頬に涙のすじを光らせながら、言うのであつた。
翌る日から、部隊の空気は一変してしまつた。H大尉は数人の同志をかたらつて、司令官と膝詰談判をしたらしい。どういう話になつたのか、小隊長以上の将校は、一集団となつて、斬込み戦の猛練習をはじめた。
部隊長室をのぞいてみると、K司令官は、困つたことになつたと、半白の頭を抱えこんでいた。
「藤田さん、若い者たちに、何とか反乱を起させないように、説得してくれんですか」
「どうも今の状況では、処置なしですな」

私も、そう答えるほかなかつた。
青年将校たちは、意見が一つにまとまり、統制ある行動を始めたらしい。私は午後から帰京しようとしたが、彼らは、
「先生、もう一晩だけ泊つて下さい。明日はもう空襲もないでしようから、早朝、送らせてもらいます」
と、私に取りすがるようにして止める。私の予感では、昨日今日となかつたので、明日こそデカイ空襲があると思えたが、青年将校たちの一途な情熱を振りすてることもできず、もう一泊することにした。
夕方、風呂に入つていると、近くの廊下を踏み鳴らして通るあわただしい靴音がして、
「司令官がウンといわなければ叩つ斬つてしまつて……」
なぞと、不穏な声もきこえた。
いそいで風呂から上がつてみると、丸腰で荷物を背負つた兵隊が、営庭にギッシリ整列していて、列の一方から順次、営門に進んでいた。営門の前に来ると、
「何々伍長以下何名、ただ今除隊になりました」
と、言つて夕闇の中に去つて行く。
H大尉に、
「これは一体、何事か」

と、訊ねると、

「われわれは同志だけで踏みとどまり、最後の血戦を覚悟したので初年兵はみんな除隊させたのです。古兵も有志の者だけ止まるようにいいましたが、全員われわれと同じ覚悟です。銃器弾薬はすべて確保しましたし、準備は十分です」

司令官を一室に軟禁して、すでに彼らだけで行動を始めたのであつた。

初年兵は、その夜の終列車に乗り込ませたというから、恐らく今度の戦争で除隊になつたのは、この横芝の近衛師団がイの一番ではなかつたかと思う。

やむにやまれぬ大和魂

私はその夜、いつしよに酒をくみながら、青年将校たちに、その意気は壮とすべきも、理性を失なつた暴挙というに等しいと、言葉を極めて訓した。

すると、Tという一番年輩の中佐が、

「教官殿のお話は身に沁みてよくわかりましたが、ことここに至つては、大石を積んですべり出した車のようで、どうすることもできません。われわれが中央から孤立して米軍と戦うのは、蟷螂の斧のごときものでありましょう。しかし五体健全のままで、むざむざ敵に降伏したり、捕虜になつたりはできないのです。吉田松陰の歌、かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和だましい……あれです。教官殿、わかつて下さいますか」

といつて、わッと男泣きに泣き出した。そこここに嗚咽の声が起つた。

と、このとき、すッと立ち上がつた玉木中尉という詩吟の名手が荊軻の有名な「易水」の詩を朗吟した。

　風は蕭々として易水寒し
　壮士ひとたび去つて亦還らず……

一死報国を誓い合つた青年将校たちの純粋な気持が、この一篇の詩によく表現され、耳なれた語句ではあつたが、このときくらい切々と、私の胸に応えたことはない。

翌る朝、夜明けと同時に、馬当番が馬を曳いてきた。駅まで十余町あるので、馬を貸してくれたのである。

営門には「反乱軍」の大隊長以下、整列していて、

「教官殿に敬礼」

と、公式の見送りをうけたが、この純真無垢な青年たちとも、これが最後の別れになるのかと思うと、私も感無量であつた。

営門を出て、百歩も行つたかと思うとき、突如、警戒警報、つづいて空襲警報である。

東の空をみると、グラマンの数十機が大梯段となつて続々と殺倒してくる。四方をみると、左右は果てしなく続く芋畑で、身を隠す場所とてなかつた。

仕方がないから、馬を畑の中に追い放して、私と馬当番は、道路の横の水の濁れている溝の中に

とびこんで、身を伏せた。
兵営を襲つたグラマンは、余勢を駆つて、私ら二人を発見すると、次々に機銃掃射を浴びせてきた。一機が去るとまた一機、また一機と、その間十秒ほどの余裕もない。
機銃掃射はミシンを縫うように、ダダダダッと、身辺に土けむりを上げて行く。
私は背中を丸め、呼吸をつめていたが、こんどはやられるか、何事も運命だと、観念の臍(ほぞ)をかためていた。それにちようど、八月十三日という日は、私の誕生日である。誕生日に死ねば人生の区切りもいいわいなど、つまらんことを考えたりした。
そのうち第一波が去つたので、
「いまの間に走れ」
私は馬当番をうながして、畑の中に無事だつた馬をひきよせ、一本道の畑地を走つた。と、こんどはB―29の編隊が、西の空からあらわれ、成東から横芝の駅のあたりと思う方面に、爆撃を始めた。
「あッ、またグラマンです!」
馬当番が、東の空を指さした。
少し行くと農家があつたので、私たちはその裏の木立ちの中に駆け込み、グラマンの目を避けた。
敵機は民家も何もかまわず、機銃掃射を浴びせていつたが、私たちは何事もなかつた。
ようやく横芝の町に行きついたが、それから三十分ないし一時間ごとに、B―29、艦爆、グラマ

ンが、入れかわり立ち替りに波状攻撃を加えてきて、汽車は出ない。とうとう朝の五時から夕方の七時まで、この空襲はつづいた。
この空襲で横芝の駅はメチャメチャにやられ、成東では爆薬を満載していた貨車がやられて大爆発を起し、停車場は半分飛んでしまつたとのうわさだつた。しかし、線路は直ちに復旧したというので、成東から夜行で上京することにした。
横芝から成東までは馬で行つてもよかつたのだが、いつまた空襲がないともかぎらず、何日間か乗り馴れた馬に怪我させるのも可哀想なので、馬当番に曳いて帰れといつた。すると、彼はそのことを部隊に連絡し、部隊からは自動車を廻してくれたので、時間ギリギリに列車に間に合い、夜半すぎ東京に帰つて来ることができた。

青年将校たちの純情

翌(あく)る日の八月十四日は、東京に空襲があり、十五日は正午、陛下のお声で終戦が宣せられた。
陸海軍、ことに若い将校たちに対する衝撃は、言語に絶した。
「われわれは本土決戦を命ぜられ、その覚悟でいたのに、急に降伏とは何事だ。われわれは国民に対し、どのつら下げてお詫びすればいいのか!」
軍の上層部は、至るところで青年将校たちから吊し上げにあい、返答に窮して腹を切つて死んだ者も少くはなかつた。

それでなくとも、強い責任感から割腹自殺した将軍や、中堅将校は、陸海軍を通して相当の数にのぼつたであろう。大西滝次郎中将もそうだし、参謀本部の親泊大佐のように子供を道連れに、夫妻して自刃した人もある。

陸軍、海軍の青年将校は、毎日のように私の家にやつてきた。

「われわれは一体どうすればいいんでしよう。生きていた方がいいのか、死んだ方がいいのか、それすらわかりません」

まつしぐらに戦争という道一筋に進んできた彼らの行手に、突然その道が消え失せたのだから、方途に迷うのは当然であつた。

「戦争に負けて、国民に顔向けができない。のめのめと生き恥をさらしていられません」

と、すぐにも自殺しかねぬ様子で来る者もあつた。

私は、これにたいして、まず「御苦労でした」と、ねんごろに犒い、次のように訓すのを常とした。

「これだけ国民が総力をあげて負けたのは、まことに残念で、ことに戦争に直接参加した君たちの胸中は、察するに余りがある。しかし勝敗は兵家の常で、一度くらい敗けたからといつて、それほど深刻に考える必要はない。僕の解釈では、なるほど今度の戦争は、形においてこそ確かに負けたが、実質においては決して負けていない。ハッキリ日本の勝利だと思つている」

そういうと、必ず不審な顔をして、

「どうしてですか」

と、訊ねる。そこで私は次のように説明するのだつた。

「昭和十六年十二月八日の宣戦の御詔勅を覚えているかね。あれに陛下は、米英と戦端を開く、これ朕が意ならずと仰せられている。そして、大東亜諸地域の人々をして、各々その処を得しむるのが、今回の戦争の目的だと仰せられている。こんどの戦争では、りつぱに所期の目的は達成されているのだよ。見たまえ、インドはイギリスの鉄鎖から解かれて独立した。ビルマも然り、仏領インドシナも、フランスの圧力から解放されたし、インドネシアもオランダの統治から脱れて、独立の旗をひるがえしている。大東亜のこれらの諸民族が、独立を願つて、しかも達せられず、何十年、何百年の間、流血と圧政に苦しんで来たか。それを日本は今度の戦争に大犠牲を払つて達成させてやつたのだ。朝鮮が独立したのも妙な言い方だが、日本が負けたからで、大東亜戦争の目的というのはどつちから見ても十分以上に達せられている。大義名分は、りつぱに立つたのだよ。日本は形において負けたが、りつぱに勝つたといえるじやないか。君たちは大東亜諸地域の人々から、ありがとうと直接お礼の言葉は言われないかもしらんが、彼らにとつては救世主なのだ。負けた負けたといつて、なにもクヨクヨすることはないじやないか」

そういうと、たいていの者は急に明るい顔になる。よくわかつたと納得する。

「もう大目的は達したのだから、剣を捨てていいのだよ。これからは平和な国民として、お互い力になり、何とか食つて行く道を講じようじやないか。長いなじみだもの、僕だつて出来ることなら、

どんなにでも力になりますよ」
一人々々、そう言って手を握ってやると、若い彼らはハラハラと涙を流して、
「よくわかりました。ここへ来るまでは生きる張合いも失いましたが、これからは生まれ変つた気持で再起します」
と、力づけられて帰るのだつた。

武道追放と日本人の堕落

百万円の錠前会社

終戦後はアメリカの占領軍が進駐してきて東京にGHQがおかれ、占領政策は着々と行われた。軍人にも政治家にも、私の懇意な連中が、戦争犯罪人としてドンドン引張られていつた。私にも当然来ると覚悟していたが、ついに何の音沙汰もなかつた。

これは前にも述べたように、陸海軍の御用はずいぶんつとめたが、いつも無位無官の浪人であり、勲章も貰わなければ、どんな公職にもつかなかつたからだ。といつて、戦後に戦犯を脱がれようなどという魂胆から、計画的に辞退したのでないことは論を俟たない。

私は、いつ、いかなる時代にも権威にあこがれたり、物慾のとりこになつたりすることを極度に恥とし、これを嫌つている。天性の野人、自由人でありたい。その生き方を自分流に押し通してきたまでのことである。

金儲け話も、私をかつぎ上げてひと仕事しようと、よくいろいろな人物がやってくるが、一度も乗つたことがない。

終戦後まもなく、こんな話があつた。

中島飛行機製作所にある資材を使つて、ある人が百万円の資本金を投じ、特殊な防犯錠前の製造会社をこしらえた。

その錠前というのは、時計の技師としては有名な工学博士の発明になるもので、三カ所にバネを用い、三段構えになつているから、泥棒には絶対にあけられないという自慢のものだつた。

このカギの会社は、九州の戸畑市に工場をもち、大々的に宣伝をして売出そうというわけで、警視庁の防犯課に、このカギの優秀性を証明してもらおうとした。

ところが警視庁では、藤田西湖氏にあけられなかつたら、「絶対にあけられぬカギ」として太鼓判を押してもよいという返事で、来る何月何日、各新聞社を招き、警視庁が立会いの上、私に来てもらつて実験してみようということになつた。

さて、一日、私の宅を訪ねてきたのは、その九州のカギ会社の代表者のような人であつた。初対面のあいさつがあつて、以上のことをひと通り説明してから、会社自慢の錠前と、内部の構造を写した写真をとり出した。

「近く各新聞社を招いて警視庁で、先生に実験していただくわけですが、先生に簡単にあけられたら、宣伝にいつわりありということになつて、私の会社はつぶれてしまいます。そこで、事前に試

していただきたいと思つて参上しましたようなわけで……」

このほか、会社が成功したら、ドシドシ、アメリカにも輸出され、大いに国益にもなるから、ぜひ御協力を……という口上であつた。そのとき私の家内も傍らにいたが、話をきいて家内が、

「ちよいと拝見」

と、写真と実物を手にとつて見ていたが、

「これは、あきますよ」

と、あつさり言つてのけたので、錠前会社の人はびつくりした。

「えッ、奥さんにでもあけられますか」

「ええ、やつてみましようか」

家内は台所から杉箸を持つてくると、ものの三十秒とかからぬうちにあけてしまつた。

「あッ」

と、そのときの客の驚きと狼狽（ろうばい）の様子といつたらなかつた。私の弟子分のような家内の手で、あつさりあけられたのだから、ガッカリしたのも当然であろう。

彼は狼狽なすところを知らずという格好で帰つていつたが、警視庁での実験の方は願い下げにしたのか、しばらくの間、なんの音沙汰もなかつた。と、それから一カ月ほどたつて、錠前会社の者がまたやつてきた。

「せつかく会社がスタートしたのですから、何とか事業を始めたいのですが、つきましては私ども

を助けると思召して、簡単でいいですから一筆、証明をお願いしたいのです」
「どういう証明ですか、カギなしでも簡単にあくという証明じや困るでしよう」
「いや、そのあかないという……」
「馬鹿を言つちや困るよ。あくのをあかないとは言えんじやないか」
「そこを何とか。私共では百万円の会社が興るか潰れるかという瀬戸ぎわで、お礼は何とでもいたしますから」
すると、横にいた家内が、
「そんな無理をして会社をなさらん方がいいでしよう。製品はアメリカにも輸出するということですが、日本は戦争に負けたんですから、この上、信用をおとすような品を送つて笑われでもしたら、恥の上塗りではありませんか。およしになつた方がいいと思います、主人だつて何万お金を積まれても、黒を白と書くようなことは絶対にしませんから」
正義感では私に負けない家内のことで、やんわりと、しかも痛烈にやられ、とうとう尻つぽをまいて帰つていつた。昭和二十二、三年の百万円といえば、相当大きな会社だつたはずだが、これで気の毒にもお流れになつてしまつたようである。

戦後の武術研究所

昭和二十年にＧＨＱの通達により、武道は全面的に禁止になつた。武道は侵略主義の手段になる

からという理由にあつたようだが、被占領国家の国民としては、抗議の持つて行きどころもなく、命令には御無理ごもつともと服従しなければならなかつた。
しかし、武道を生命とする私には遺憾に堪えぬことではあつたが、これを機会に、私は多年の研究を集大成する計画をたてた。
幸いに、書籍や文献類は戦火に逢わなかつたから、一冊も失われていない。なすべき仕事はいろいろあつたが、第一に着手したいと思つたのは、「武術流名録」である。
日本で武術と名のつくものが行われるようになつたのは、仁徳二十八年（皇紀一〇〇〇年、西暦三四〇年）頃からであるが、それから全面的禁止をうけた昭和二十年（皇紀二六〇五年、西暦一九四五年）の間、いつたいどんな武術がどれほど行われたか、これを研究目的とするもので、私が年少のころから調査してきた資料を分類整理にとりかかり、これはなお今日まで継続されている。
私の研究結果を総合すると、日本で行われた武術はだいたい三十種で、その各々の流派を数えると、ザッと次のようなものになつた。

剣術	一二四七流（五七一流）
居合術	三三二流（一六七流）
柔術	五〇四流（二一六流）
空手	四七流（一二流）
捕縄術	八三流（三九流）

鎗術	二九八流（一一二流）
長刀術	一五六流（六〇流）
銃剣術	一流（一流）
棒術	二二一流（五八流）
杖術	六八流（三四流）
三ッ道具	三四流（八流）
乳切木（ちぎりぎ）	一〇流（七流）
十手術	三七流（一八流）
手裏剣術	四〇流（二〇流）
含針術	一流（一流）
吹針術	一流（一流）
鎖鎌術	八〇流（二七流）
鎖術	二六流（一二流）
鎌術	四一流（一二流）
打根術（うちね）	一流（一流）
弓術	一三四流（六〇流）
管矢術（くだや）	一流（一流）

手弓術	一流（一流）
砲術（火術）	四五五流（一三三流）
馬術	一五三流（五四流）
水泳術	九二流（三五流）
兵法	二七二流（一一五流）
忍術	七一流（三一流）
計	四四二〇流（一八一六流）

この流名をあげた数字は、私が長年にわたつて渉猟（しょうりょう）した武道、武術に関する一切の文献、資料、伝書、巻物、帖冊、伝統系譜、武道家武術者の手記、伝記、諸国藩誌、各県地誌、市史、村史、郷土史、人物史、墓誌等々によるもので、さらにカッコ内の数字は、その流派についての秘伝書、巻物、秘帖など、私が現に所蔵しているもの、及び他家の所蔵に属するものについては、これを借受けて原物のまま模写し、自身所蔵し居るもので、共に研究資料としては、十分の価値あるものである。

わが国は古来、武の国といわれたほど、武術が盛んに行われ、尊ばれたもので、信頼し得る文献によつて私の調査し得た武術の流派は、右に掲げたごとく、三十種目を通じて四四二〇流におよび、それらの始祖、開祖、流祖、主なる伝統者など、いわゆる名人、達人の域に達した人物だけを数えあげても、実に一万数千名におよんでおり、もつて如何に武術が盛大に行われたかを知るべきであ

ろう。

この武道が日本精神を形成する根源となり、廉知、潔白、質実、剛健、勇侠、信義、克己、忠孝、などのモラルが、数百年間、指導的階級にあつた武士の道徳、すなわち武士道となり、日本国民のバックボーンとなつて近世に至つたことは、いまさら申すまでもない。

ＧＨＱが日本占領と同時に、武術を全面的に禁止したのは、物質面に於て陸海軍の武装を解除し、サイクロトロンを破壊したと同じように、精神面において日本人を骨抜きにしようとの抜け目のない政策であつて、ポツダム宣言の代行者たるマッカーサーは、日本精神の研究家とのことだが、さすがにえらいものだと思つた。

マッカーサーは日本人から武術を奪つたかわりに、ジャズやダンスを与えた。道義の廃頽と青少年の不良化は、顕著な社会現象となつた。殊に青少年が国家観念を喪失し、高邁な理想とか剛健な気風というようなものの片鱗すらも見られぬに至つた風潮は、まことに寒心に堪えぬものがあつた。

私は政治家でも教育者でもないから、これに対してどうこうというのではないが、一介の武道家として、一つ心に念願するものがあつた。それは、世界に比類のない、日本独特の文化財たる武術諸流の道統が、かかる風潮の中に押し流され、ついに消滅し去るようなことがあつてはならない。いかなる努力、犠牲を払つてもこれを後世に伝承し、有志の便に供するのが、私の余生に残された る義務であると思つたのだ。

こうしてアメリカ軍の占領治下にあつたときは、ひたすら武術関係書の整理、文献類の研究に没

頭していたが、昭和二十六年、わが国が独立をゆるされてからは、再び「日本武術研究所」の看板をかかげ、同好の士をかたらつて、逐年、所期の目的に近づきつつある。

日本武術研究所の研究書として上梓されたものは、昭和二十八年九月「神道夢想流杖術図解」その他となつている。

また「古武道振興会」も再発足し、昭和三十一年十月以降、年々その演武が公表され、漸次大衆に親しまれてきたが、これには私も常任理事として参劃し、さらに「日本唐手道会」「唐手道連盟」にもそれぞれ顧問として関与し、斯道の発展に微力をつくしつつある現状である。

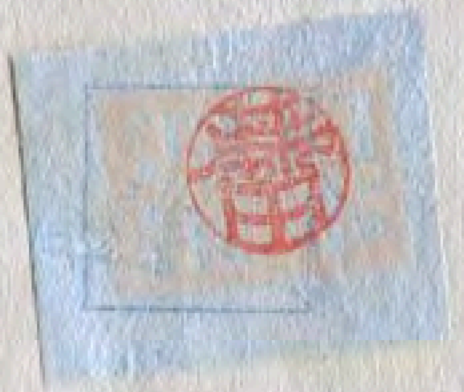
さて、私のお家芸であり表看板の「忍術」については、チャンバラ映画や大衆小説が、マスコミ時代の人気に投じて、おのずから宣伝され、少年雑誌の漫画にまで大いに進出している有様である。

しかし、その全部が全部といつてよいほど、荒唐無稽な無責任きわまる作り話であり、本来の忍術をあやまるものである。忍術ほど科学的で進歩的なものはなく、しかも武芸百般を総合し、精神と肉体の練磨において、このくらい厳しいものはないのであつて、私は忍術こそ武術中の武術なりと信ずるものである。

されば、いかに時代が進歩し、或いは原子力時代といい、宇宙時代といわれるようになつても、忍術の精神を生かし、時代に即応させて行くならば、その効用は限りなく発揮されるはずである。これは本書にも述べたように、科学兵器万能といわれた今度の大東亜戦争に、しばしば私が重大な用を仰せつかつた事実からも言えることである。

〔著者紹介〕

明治三二年八月十三日東京浅草に生る。六歳の時兄の仇討ちのため十一名を傷つけ、寺にあずけられたが、後寺から放逐、修験道行者について修業。七歳の秋、千里眼能力者として福来博士に見出された。その後甲賀流忍術十三世祖父並に南蛮殺倒流二世橋本一夫斎等につき拳法、柔術、剣術、槍術、長刀、棒、十手、捕縄、手裏剣術などの武芸を学ぶほかそれぞれの師匠につき茶道、生花、音曲、舞踊、書画、彫刻を学んだ。大正三年早実卒後、早大中大、明大に学んだがみな乱暴のため放校。同八年日大宗教科卒業その間報知、日日、やまと、国民、中外等の新聞記者をはじめ柔道、剣道等の師範も兼る。大正十一年から陸軍戸山学校、陸士、陸大、海大等の教授を歴任、現在甲賀流忍術十四世、南蛮殺倒流第三世、心月流手裏剣術、大円流杖術、一伝流捕手術師範、日本空手道会顧問、日本古武道振興会常任理事、武術研究所長に任ず。現住所、東京都文京区根津須賀町七



最後の忍者 ——どろんろん——

昭和三十三年十月二十日 発行
昭和三十四年十一月二十日 12版

定価 二百六十円

著者 藤田西湖
発行人 湯川洋蔵
印刷人 菅生定祥
東京都千代田区神田錦町三丁目六番地

発行所 日本週報社
東京都中央区八重洲六丁目七番地
振替口座・東京九九〇六八
電話 (2328) 五六〇五・五六〇六
二六二四(24)四七八八

落丁・乱丁はお取替えいたします　印刷・三協美術印刷　製本・江口製本

Auteur : Fujita Seiko
Titre en langue originale : どろんろん 最後 の 忍者
Titre en japonais : « Doronron saigo no ninja »
Titre en français : « Le dernier ninja »
Titre en anglais : « The last ninja »
Année : 1958

Autobiographie de Fujita Seiko, que certains considèrent comme un des derniers maîtres ninja connus.